

やまぐちたてあと  
山口館跡

北部環状線道路改良工事関係埋蔵文化財調査報告書

2002.3

岩手県宮古市教育委員会





やまぐちたてあと  
**山口館跡**

北部環状線道路改良工事関係埋蔵文化財調査報告書



2002.3

岩手県宮古市教育委員会







調査区現況（西から）







SI1001 (南から)



SI1004・SK1005 (南西から)





SI1004遺物出土状況（南西から）



SI1011カマド煙道部（南から）



## 序 文

宮古市は山海からの恵みと自然豊かな環境に囲まれた住みよい街であります。この恩恵を受けながら、数千年もの昔から現代に至るまで脈々と生活が営まれ、その中で郷土の文化は育まれてきました。この文化は、はるか昔の先人たちの頃から培われ、今も地域の特色として受け継がれています。

長い歴史の中で、特色ある文化を育てた先人たちの足跡は、遺跡として現代に周知されています。

山口館跡は中世の山城跡とされる遺跡であり、地形を巧みに利用しながら大規模な土木工事により山地に施設を構え利用したものと考えられます。これまでの調査では古代の住居跡や貴重な遺物が出土しており、当時の人々の暮らし振りを知る上で興味深い成果を上げております。

遺跡に眠る遺構・遺物には、歴史資料として、また、地域の文化を正しく理解するための様々な情報があります。そして、そこには先人達の知恵と技術が凝縮されています。

この貴重な文化財を保護し活用することは、我々の大きな責務であり、本書がふるさとの歴史資料として地域文化の理解の一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査ならびに整理作業に多大なご協力をいただいた関係者、関係各位に感謝を申し上げ序文といたします。

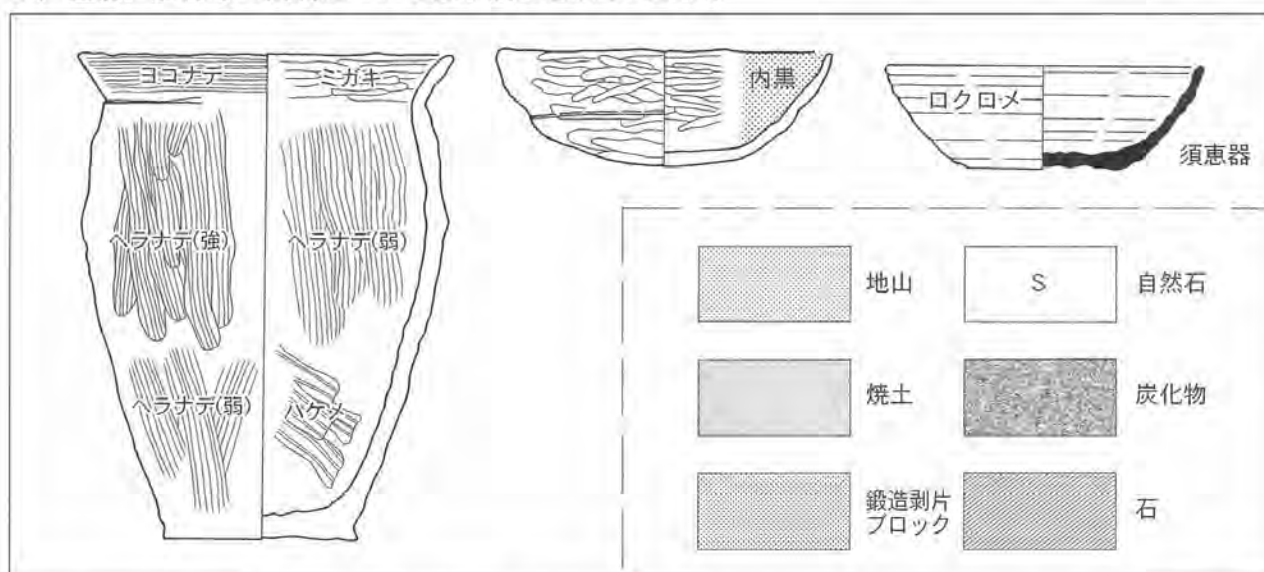
平成14年3月

宮古市教育委員会

教育長 中 屋 定 基

## 例 言

1. 本書は北部環状線道路改良工事に伴い平成11年から平成12年にかけて実施した山口館跡発掘調査報告書である。
2. 発掘調査の主体は宮古市教育委員会である。発掘調査および本書の執筆、編集は安原が担当し、竹下、高橋、鎌田、加納、阿部、江口がこれを補佐した。
3. 座標は平面直角座標X系に準拠した。調査座標原点をX-38,300,000 Y+95,150,000に設定し(RX0, RY0)、南北はRX記号を、東西にはRY記号を使い、その後ろに1m単位で原点から距離として数字を付した。
4. 高さは標高値をそのまま使用した。
5. 各遺構の略記号は以下のとおりである。  
SI - 竪穴住居跡      SK - 土坑跡      SX - 不明遺構
6. 遺構、遺物等の表現については下記のとおりとした。



7. 土層観察および表記には農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を使用した。
8. 基準点測量、航空地形測量は株式会社フジテクノに依頼し、実施した。
9. 出土した鉄製品の保存処理は株式会社ニッテツ・ファイン・プロダクツ釜石文化財保存処理センターに依頼し行った。
10. 発掘調査ならびに報告書作成に際して、次の方々からご指導、ご教授いただいた。記して、謝意を申し上げます。(順不同、敬称略)  
 小山内透 (財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター)  
 溜浩二郎 ( )  
 八木光則 (盛岡市中央公民館)  
 室野秀文 (盛岡市教育委員会)  
 中村 裕 (浄法寺町教育委員会)  
 武井則道 (財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター)

# 目 次

序 文	
例 言	
目 次	
I 調査経過	
1 調査に至る経過	1
2 調査概要	1
3 調査体制	2
II 遺跡の立地と環境	
1 遺跡の位置と立地	3
2 遺跡周辺の地形・地質	4
3 周辺の遺跡	5
III 調査内容	
1 調査方法と経過	9
2 遺跡の基本層序	15
3 検出した遺構・遺物	16
SI1001	16
SI1004	20
SI1010	24
SI1011	24
SK1003	26
SK1005	33
SK1006	33
SK1008	38
SK2012	38
SK2013	38
SK2014	38
SK2015	41
SK2016	41
SX1002	41
SX1007	41
石 積	41
遺構外出土遺物	42
IV 調査のまとめ	50
写真図版	53
報告書抄録	

## 挿 図 目 次

第1図	山口館跡位置図	3	第19図	SI1011平面図・土層断面図	29
第2図	地形分類図	4	第20図	SI1011出土遺物	31
第3図	宮古市内城館跡分布図	6	第21図	SI1011出土遺物	32
第4図	周辺遺跡分布図	7	第22図	SK1003平面図、土層断面図、出土遺物	34
第5図	調査区区分図	9		SK1006・SX1007平面図、土層断面図	34
第6図	山口館跡調査区地形図	10		SK1008平面図、土層断面図	34
第7図	検出遺構配置図	11	第23図	SK1005平面図、土層断面図	35
第8図	調査区基本土層断面図	13	第24図	SK1005出土遺物	36
第9図	SI1001平面図、土層断面図	17	第25図	SK2012平面図、土層断面図、出土遺物	37
第10図	SI1001構築面平面図	18	第26図	SK2013平面図、土層断面図	39
第11図	SI1001カマド平面図	19		SK2014平面図、土層断面図	39
第12図	SI1001出土遺物	19		SK2015・2016平面図、土層断面図	39
第13図	SI1004平面図、土層断面図	21		SX1002平面図、土層断面図	39
第14図	SI1004構築面平面図・出土遺物	22	第27図	遺構外出土遺物(1)	45
第15図	SI1004カマド平面図、土層断面図	23	第28図	遺構外出土遺物(2)	46
第16図	SI1010平面図、土層断面図	25	第29図	遺構外出土遺物(3)	47
第17図	SI1011貼床面平面図、土層断面図	27	第30図	遺構外出土遺物(4)	48
第18図	SI1011構築面平面図、柱穴断面図	28	第31図	遺構外出土遺物(5)	49

## 写 真 図 版 目 次

出土遺物写真	巻頭	SI1011北カマド完掘	59
調査区全景	巻頭	SI1011北カマド煙道上部	60
SI1001全景	巻頭	SK1003完掘	60
SI1005全景	巻頭	SK1006完掘	61
SI1005遺物出土状況	巻頭	SK1008完掘	61
SI1011カマド煙道部	巻頭	B区作業状況	62
調査区遠景	53	B区基本土層断面	62
石積	53	SK2012完掘	63
基本土層断面	54	SK2012東西土層断面	63
SI1001貼床面	54	SK2013完掘	64
SI1001南北土層断面	55	SK2015礫検出状況	64
SI1004・SK1005完掘	55	SK2015・2016東西土層断面	65
SI1004カマド検出状況	56	SK2012～2016遠景	65
SI1004カマド本体部半裁	56	SI1001・1004出土遺物	66
SI1004遺物出土状況	57	SI1011出土遺物	67
SI1010完掘	57	SK1003・1005・2012出土遺物	68
SI1010鍛造薄片プラン	58	遺構外出土遺物	69
SI1011全景	58	遺構外出土遺物	70
SI1011カマド検出状況	59		

## 付 図

付図1 山口館跡調査区現況図



# I 調査経過

## 1 調査に至る経過

北部環状線道路改良工事は、国道45号、106号が市内で交差するため起きる交通渋滞の緩和と県立宮古病院へのアクセス道路として整備が進められている事業である。

本工事に先立ち、宮古市は、宮古市教育委員会と事前の協議を行い埋蔵文化財の有無の確認と現地調査を依頼した。

宮古市教育委員会は、平成4年の一部路線の決定に伴い、平成6年、平成7年に当該事業範囲内に含まれる遺跡の事前調査、範囲確認調査を行った。結果、一部路線と県道宮古岩泉線との取り付け部分にかかるものとして、赤畑遺跡、天神山遺跡、山口館跡が調査対象遺跡となった。天神山遺跡は平成6年度に本調査を行い、陥し穴状遺構が検出され、弥生時代後期の土器などが出土した。赤畑遺跡は平成7年度に本調査を行い、近代の耕作に伴う掘削跡が検出され、遺物は、縄文時代中期～晩期の土器などが出土した。

山口館跡は平成6年度、7年度に試掘調査を実施した。遺構は竪穴住居跡、土坑跡、柱穴跡が検出され、縄文から古代、中世にかけての遺物が出土した。

試掘調査の結果を受け、山口館跡の本調査について、岩手県教育委員会に協議を求めた。

その後、岩手県教育委員会と事業主体者の宮古市、宮古市教育委員会で協議を行い、結果、(財)岩手県文化振興事業団の受託事業として発掘調査を実施することとなった。平成8年度は4,300㎡、平成9年度は2,500㎡を調査し、平成10年度に調査実施部分についての報告がなされている。

平成11年度からは宮古市教育委員会が主体となり調査を再開し、平成11年度は900㎡、平成12年度は465㎡について調査を実施した。

平成11年度、平成12年度調査区の報告書については、各調査年度の冬期間に整理作業を実施し、平成13年度に編集、発刊することとした。

## 2 調査概要

所在地	宮古市大字山口第5地割字久保17番1、23番、28番1、22番1、24番、26番、28番、33番、34番、35番、39番1
発掘調査期間	(平成11年度) 本調査 平成11年6月14日～同年11月19日 整理作業 平成11年12月7日～平成12年3月24日 (平成12年度) 本調査 平成12年6月14日～同年9月8日 整理作業 平成12年12月13日～平成13年3月23日 (平成13年度) 整理作業 平成13年11月20日～平成14年2月22日
調査面積	(平成11年度) 900㎡ (平成12年度) 465㎡
立地	山口川左岸、標高40～50mの丘陵地
検出遺構	竪穴住居跡、鍛冶遺構、土坑
出土遺物	土師器、須恵器、縄文土器、石器、鉄製品、鉄滓、陶磁器

### 3 調査体制

(平成11、12年度)

調査主体	宮古市教育委員会	教育長	中屋定基
調査総括	沼崎幸夫	宮古市教育委員会	社会教育課長
事務担当	瀬川康平	同	社会教育課長補佐兼文化係長
	宇都宮禎子	同	社会教育課社会教育係長
調査員	竹下将男	同	社会教育課主任文化財調査員
	高橋憲太郎	同	社会教育課主任文化財調査員
	鎌田祐二	同	社会教育課主任文化財調査員
	加納由美	同	社会教育課文化財調査員
	安原 誠	同	社会教育課文化財調査員
			(発掘調査、報告書作成)
	阿部 豊	同	社会教育課埋蔵文化財調査員
	工藤剛司	同	社会教育課埋蔵文化財調査員
			(平成11年12月まで)
	江口邦泰	同	社会教育課埋蔵文化財調査員
			(平成12年11月から)

(平成13年度)

調査主体	宮古市教育委員会	教育長	中屋定基
調査総括	伊藤賢一	宮古市教育委員会	社会教育課長
事務担当	瀬川康平	同	社会教育課長補佐兼文化係長
	箱石憲市	同	社会教育課社会教育係長
調査員	竹下将男	同	社会教育課主任文化財調査員
	高橋憲太郎	同	社会教育課主任文化財調査員
	鎌田祐二	同	社会教育課主任文化財調査員
	加納由美	同	社会教育課文化財調査員
	安原 誠	同	社会教育課文化財調査員
			(発掘調査、報告書作成)
	阿部 豊	同	社会教育課埋蔵文化財調査員
	江口邦泰	同	社会教育課埋蔵文化財調査員

発掘調査・資料整理作業に際し次の方々から多大なるご協力をいただいた。記して謝意を表したい。

(敬称略、あいうえお順)

栗津和己 池上賢太郎 和泉朋子 伊東敬一 岩間康範 扇田正義 川目嘉郎 久保田加代子  
駒井聡 齋藤真希 坂本真 佐々木勤 佐々木信晴 佐々木英生 佐々木麻美子 佐藤精一  
鈴木恵美子 鈴木潤 鈴木祥一 田沢和憲 飛沢一徳 中澤ヒテ 西村敏光 古舘はる  
八木政樹 柳沢千鶴子 山内勝雄 横山公司

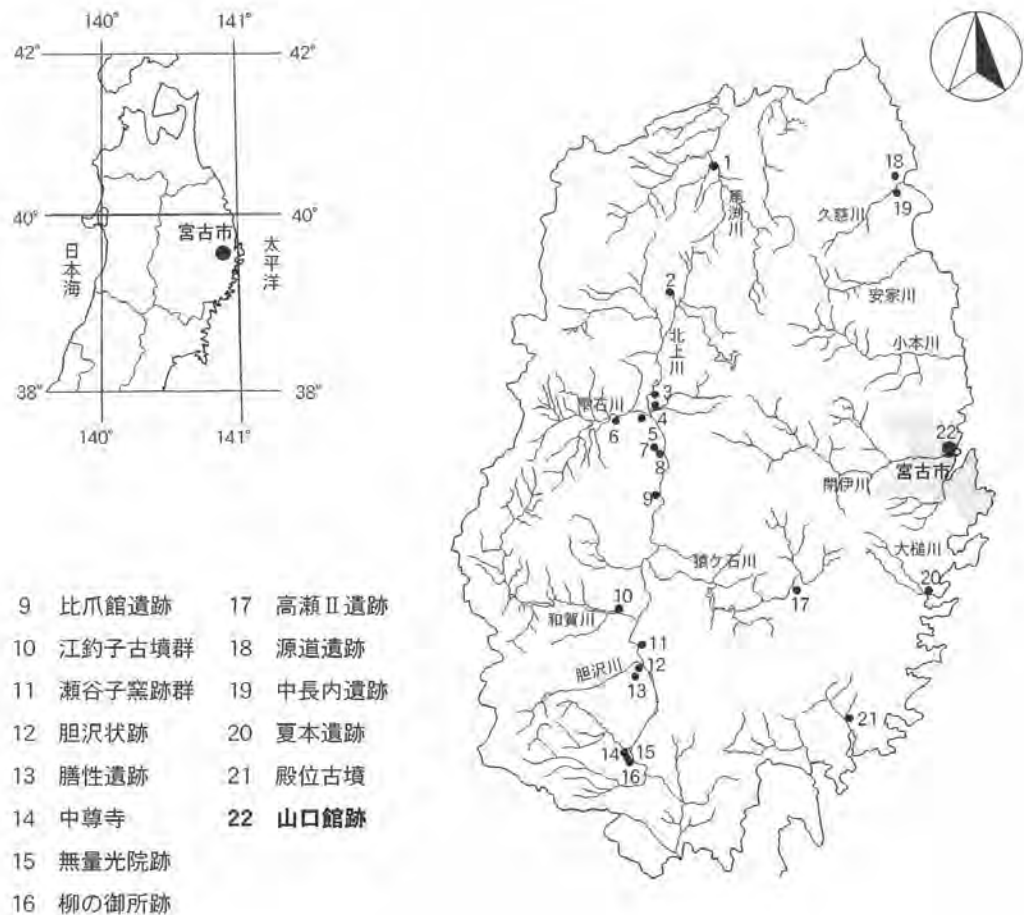
## 2 立地と環境

### 1 遺跡の位置と立地 (第1、2、3図)

宮古市は日本を代表する漁場のひとつ三陸海岸の中央部に位置し、本州最東端の町としても知られる。北を田老町、西を新里村、南を山田町に接する。東西幅は最長部で27.5km、南北で26.5kmを測り、市域面積は339km<sup>2</sup>である。人口は約55,500人である。(第1図)

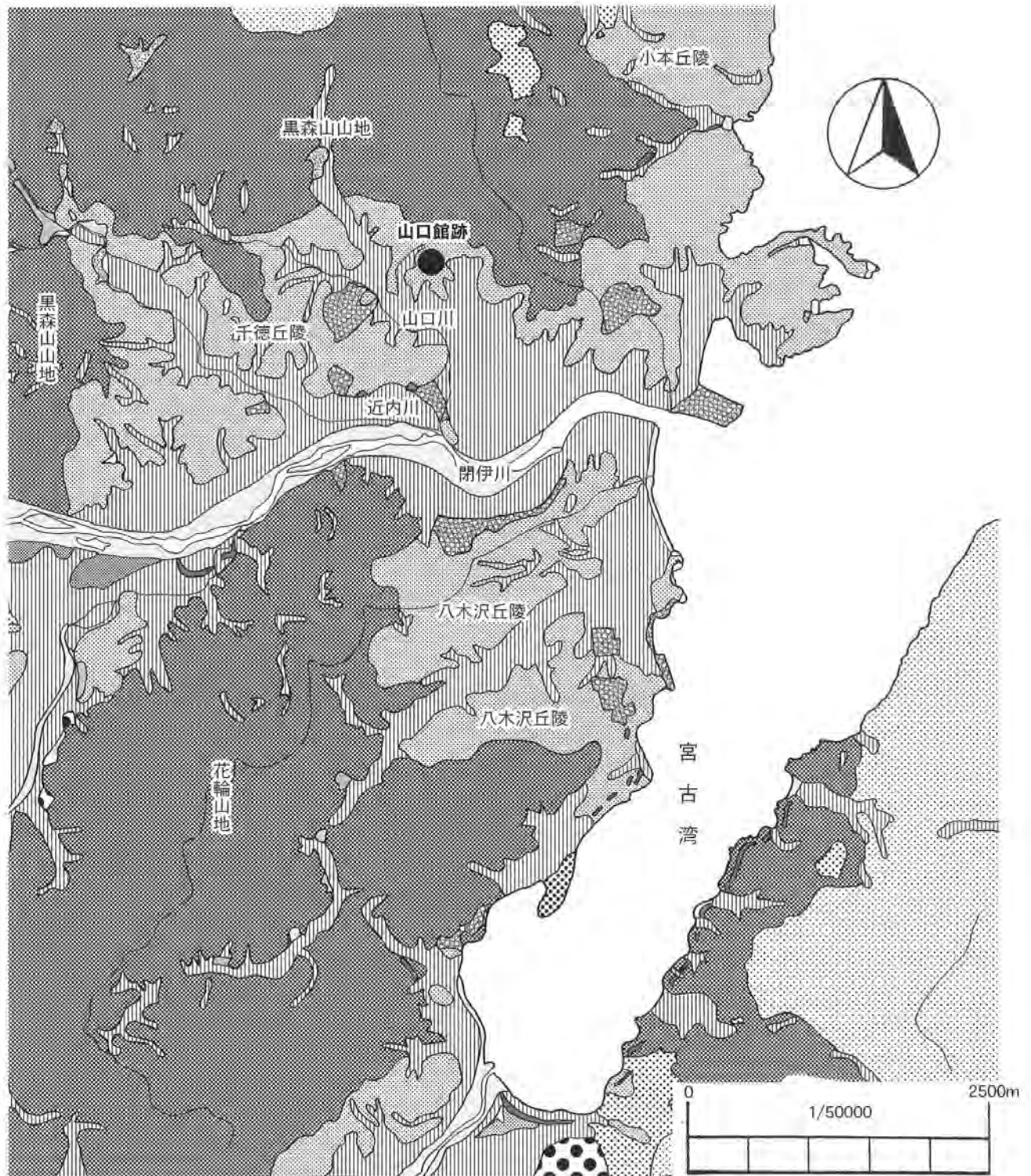
宮古市内の地形は、主な河川である閉伊川、八木沢川、津軽石川とその支流により形成された谷底平野、氾濫平野があるほかは、そのほとんどが山地もしくは丘陵地形となっている。宮古市を代表する河川、閉伊川は川井村兜明神岳に源を発しここから東流し、新里村を経て、宮古市を南北に二分するように流れ、宮古湾に至る。(第2図)

山口館跡は宮古市の中央部、北緯39° 38′ 59″、東経141° 56′ 29″ にあり、東日本旅客鉄道山田線宮古駅から北西に1.5kmの地点に位置する。閉伊川の支流、山口川の左岸にあり、黒森山から続く丘陵地に立地する。遺跡の北側には黒森山を頂上とする山地が続き、東側には市街地が広がる。(第3図)



第1図 山口館跡位置図





中起伏山地		扇状地		旧河道	
小起伏山地		崖錐性扇状地		浜及び河原	
山ろく		谷底平野		裸出砂丘	
丘陵地		三角州		人口改变地	
砂礫段丘Ⅲ		自然堤防		崖	

第2図 地形分類図

## 2 周辺の遺跡 (第4図)

山口館跡は、山口川の左岸、黒森山(標高310m)の南側丘陵地に立地する。周辺の遺跡は山口川の縁辺部に沿って点在しており、高根遺跡、小平Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ遺跡、赤畑遺跡、赤畑東遺跡、山口駒込Ⅰ遺跡、天神山遺跡がある。以下、調査実績のある遺跡について記述する。

高根遺跡は西側斜面と山口川の間、南東向き緩斜面に立地する。昭和63年と平成3年の2次にわたり宮古市教育委員会により調査が行われている。1次調査では土坑が111基確認されている。2次調査では竪穴住居が7棟、埋設土器が2基確認された。出土遺物は縄文中期前葉から中葉頃の土器が多くを占める。その他1次調査で円盤状土製品、2次調査では斧形土製品が出土している。

赤畑遺跡は山口川により形成された氾濫平野に立地する。県道改良工事に伴い昭和62年、63年、平成7年に調査が行われ、中世の竪穴住居跡2棟が確認され、縄文早期、中期～晩期、弥生時代の土器が出土している。なお、本遺跡からは市内で初例となる後北式土器が出土している。

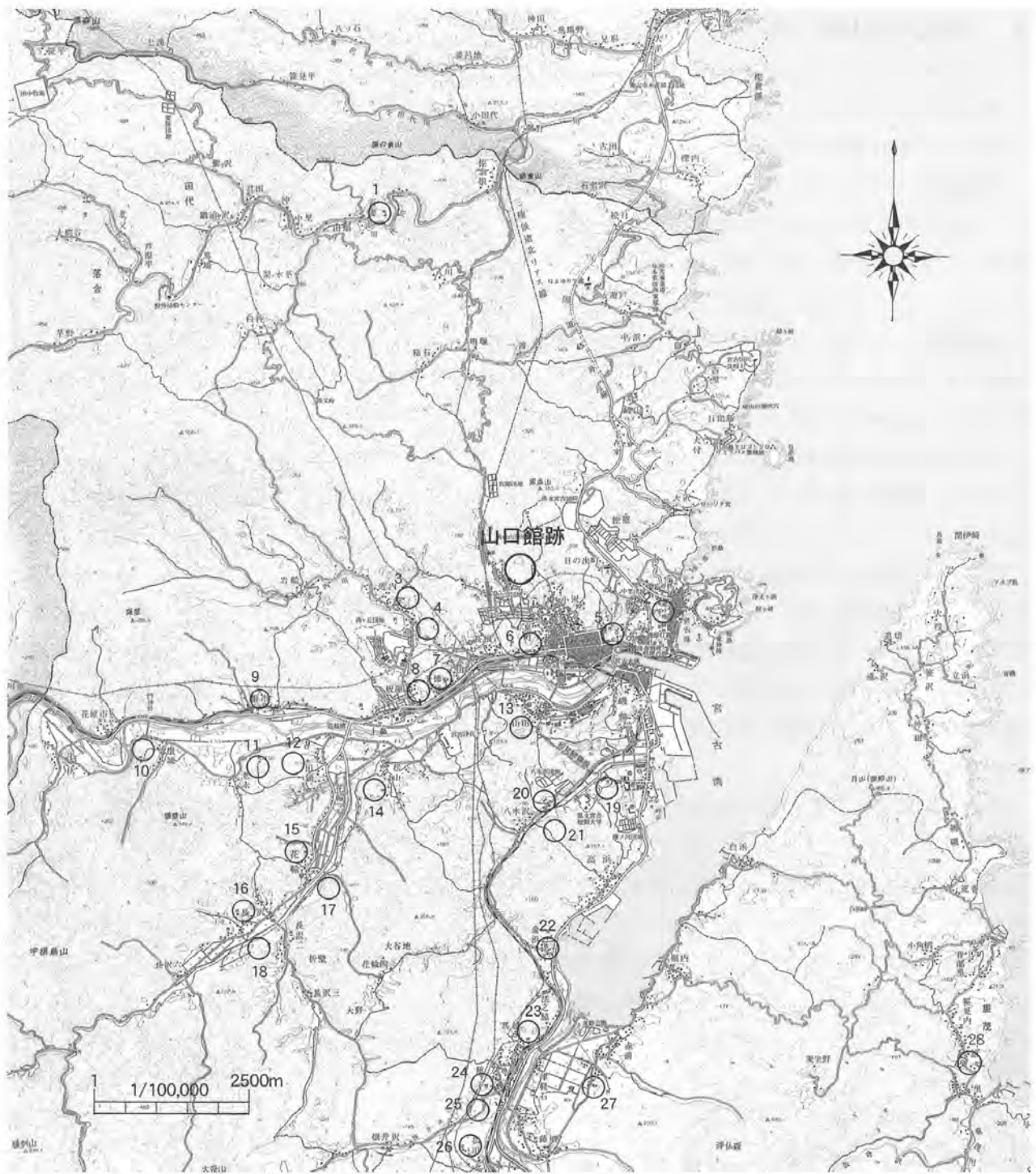
千徳丘陵は山口館跡から山口川をはさみ西から南に広がり、長根遺跡群、泉町遺跡群、青猿遺跡群をはじめ、遺跡が数多く、各時代の遺跡分布が想定されている。本丘陵は市街地に隣接するため近年宅地化が進み、そのため当該地区における緊急調査の頻度は高い。

狐崎遺跡は個人住宅建設に伴い1989年に宮古市教育委員会により調査が行われている。遺跡はこれら遺跡群の北側に位置し、山口川の右岸、千徳丘陵の北向き斜面に立地する。検出遺構は弥生時代竪穴住居跡1棟、古代竪穴住居跡5棟、土坑11基、溝状遺構1条、焼土遺構1基が確認されている。土坑は縄文時代のものが4基あり、その他は時期不明である。出土遺物は、古代竪穴住居に伴う土師器を中心に、弥生時代竪穴住居内出土の弥生土器、土坑内出土の縄文中期末から後期にかけての土器がある。

青猿Ⅰ遺跡は青猿遺跡群の西側に位置し、南北に伸びる尾根の頂上部を遺跡の範囲とする。宅地造成工事により1987・1989の2次にわたり調査が行われている。1次調査は、工事範囲の中で遺構密集部については現状保存し、比較的遺構密度の低い部分に関しては調査を実施、記録保存する方向で調査が行われた。検出された遺構は、古代と想定される竪穴住居跡が5棟、陥し穴状遺構4基、製鉄遺構1基、廃滓捨て場である。なお、古代竪穴住居跡は5棟のうち1軒のみ精査をし、他4棟は現地保存とした。製鉄遺構は竪穴、炉本体部、廃滓捨て場から成る。炉本体部は底部を検出し北半部のみが残存しており、径0.8mの円形と想定されている。出土遺物は、竪穴住居跡出土の土師器、廃滓捨て場の鉄滓、羽口である。2次調査は、1次調査区に隣接しその南側と西側で調査が行われた。検出遺構は古代の竪穴住居跡3棟、竪穴遺構3棟、土坑1基、時期不明の土坑が3基である。出土遺物は竪穴住居跡出土の土師器、土器以外ではフイゴの羽口、鉄滓が出土している。

### <参考文献>

- 宮古市教育委員会 『宮古市埋蔵文化財調査報告書第14集 -青猿Ⅰ・下在家Ⅱ・千徳城遺跡群-』 1988
- 宮古市教育委員会 『宮古市埋蔵文化財調査報告書第19集 -高根遺跡-』 1989
- (財)岩手県埋蔵文化財センター 『岩手県埋蔵文化財調査報告書第142集 -赤畑遺跡-』 1989
- 宮古市教育委員会 『宮古市埋蔵文化財調査報告書第51集 -赤畑遺跡・天神山遺跡・山口館跡-』 1989
- 宮古市教育委員会 『宮古市埋蔵文化財調査報告書第22集 -狐崎遺跡-』 1990
- 宮古市教育委員会 『宮古市埋蔵文化財調査報告書第27集 -青猿Ⅰ遺跡・千徳城遺跡群-』 1991
- 宮古市教育委員会 『宮古市埋蔵文化財調査報告書第33集 -高根遺跡-』 1992

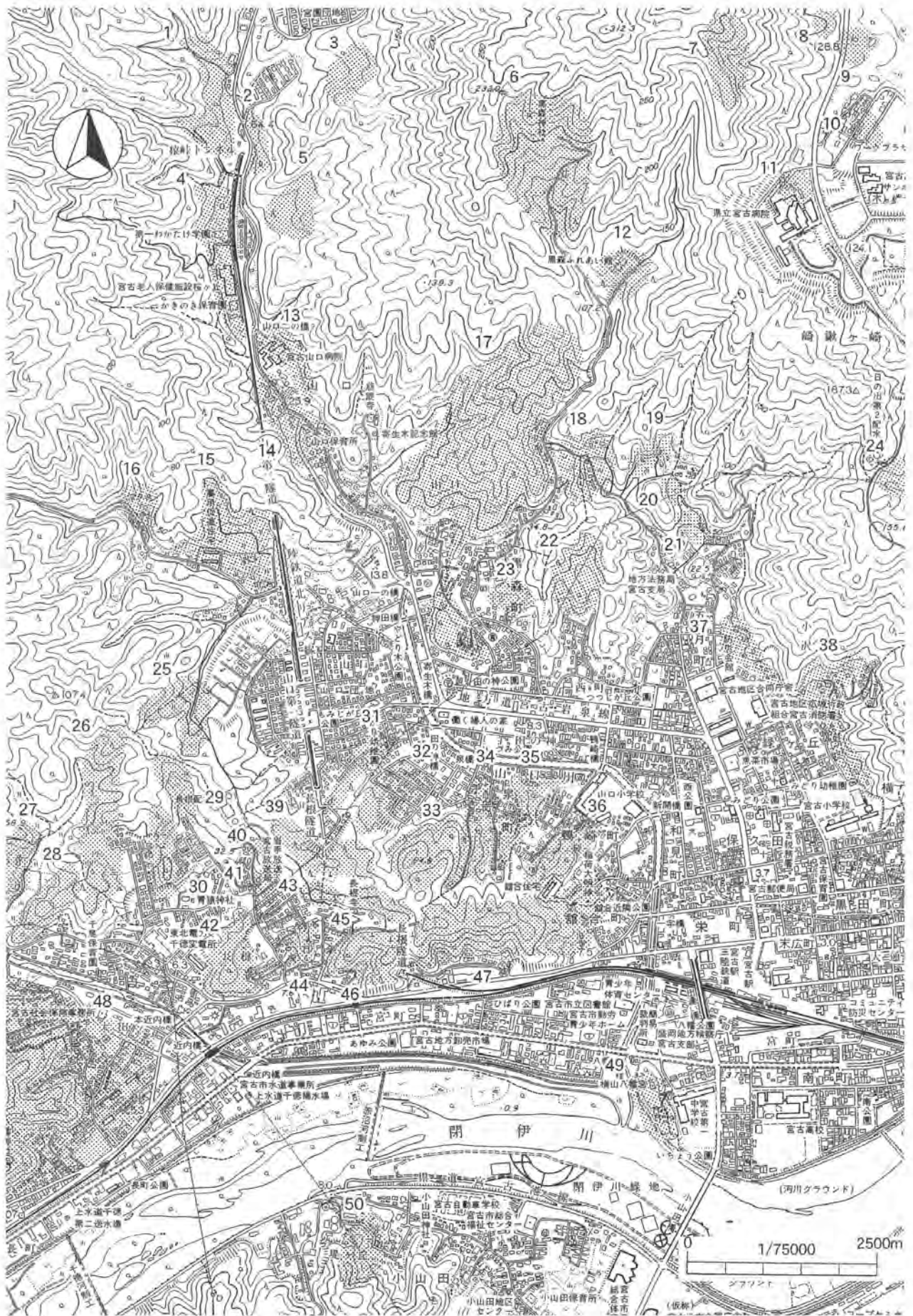


No.	城館名	所在地
1	田代館	宮古市田代第18地割館・岩石
2	鍛ヶ崎館	宮古市鍛ヶ崎字下町
3	近内館	宮古市大字近内第4地割跡場
4	近内大館	宮古市大字近内第3地割白石
5	黒田館	宮古市本町・沢田
6	笠間館	宮古市大字千徳第1地割猫ヶ沢・館合町
7	千徳城	宮古市大字千徳第16地割沢
8	堀合館	宮古市大字千徳第10地割土子豆
9	根市館	宮古市大字根市第7地割雲南沢・第8地割与藤沢
10	根城	宮古市大字老木第19地割根城館
11	老木館	宮古市大字老木第2地割沢の下
12	田鎖城	宮古市大字田鎖第1地割三合並
13	小山田館	宮古市大字小山田第5地割和山・大畑
14	松山館	宮古市大字松山第13地割大久保沢・田鎖第5地割鱈内

No.	城館名	所在地
15	花輪館	宮古市大字花輪第5地割程久保
16	長沢館	宮古市大字長沢第16地割中家と戸・第17地割寺沢
17	鱒沢館	宮古市大字花輪第17地割鱒沢・第1地割姉戸
18	折壁館	宮古市大字長沢第12地割向・第21地割中折壁
19	磯鷲館山遺跡	宮古市大字磯鷲字第8地割中谷地・第11地割岸ノ前
20	八木沢新館	宮古市大字八木沢第3地割八木沢・第2地割守の越
21	八木沢古館	宮古市大字八木沢第5地割寺ヶ沢・第6地割中田
22	金浜館	宮古市大字長沢第1地割西角地・堤ヶ沢
23	山崎館	宮古市大字津軽石第3地割馬越・第1地割法の脇
24	沼里館	宮古市大字津軽石第6地割沼里・第19地割穴田
25	高平館	宮古市大字津軽石第9地割吉原・第10地割向川原
26	弘川館	宮古市大字津軽石第14地割弘川・第10地割向川原
27	赤前館	宮古市大字赤前第5地割神田
28	重茂館	宮古市大字重茂第1地割西大館・第Ⅱ地割館

第3図 宮古市内城館跡分布図





第4図 周辺遺跡分布図

No.	遺跡名	遺跡コード	種別	時代	遺構・遺物
1	牛 沢	LG23-1233	散布地	縄文	縄文土器 (中・後期)
2	小 平 II	LG23-1234	散布地	縄文	縄文土器
3	小 平 III	LG23-1216	散布地	縄文	縄文土器
4	高 根	LG23-1253	土坑墓群	縄文	縄文土器 (中期)、墓坑、土坑
5	小 平 I	LG23-1255	散布地	縄文	縄文土器 (中期)、石器
6	黒 森 山	LG23-1332	寺院跡		勾玉
7	黒 森	LG23-1326	散布地		
8	南 沢 I	LG24-1000	散布地		
9	早 稲 栃 V	LG24-1010	散布地		
10	早 稲 栃 IV	LG24-1020	散布地		
11	寒 風	LG23-1349	集落跡	縄文	竪穴住居跡、土坑
12	黒 森 マギ 沢	LG23-1364	散布地	縄文	縄文土器 (早期)
13	赤 畑 東	LG23-1295	散布地	縄文・近世	縄文土器、鉄滓
14	赤 畑	LG23-2215	集落跡	縄文・近世	縄文土器 (早・中期)、竪穴住居跡
15	山 口 駒 込 I	LG23-2244	集落跡	縄文・奈良	縄文土器、土師器、須恵器
16	山 口 駒 込 II	LG23-2231	集落跡		鉄滓
17	山 口 館 跡	LG23-2310	城館跡	中世・古代	主郭、副郭、二の郭、三の郭、空堀、土師器
18	拝 殿 峠	LG23-2323	集落跡	縄文	縄文土器 (後期)
19	小 沢 V 神 籠 石	LG23-2325	散布地・祭祀跡	縄文・古代	縄文土器 (晩期)、土師器、土偶
20	小 沢 IV 人 形 鼻	LG23-2236	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器、須恵器
21	小 沢 III 石 倉 平	LG23-2346	散布地	縄文	縄文土器 (中・後期)
22	拝 殿 ヶ 沢	LG23-2353	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器、須恵器、鉄滓
23	黒 森 町 I	LG23-2362	屋敷跡・鑄造遺跡	近世	陶磁器、鑄造炉、墓坑
24	日 の 出 町 II	LG24-2033	散布地	縄文	縄文土器 (中期)、羽口
25	延 所	LG23-2282	散布地	縄文	縄文土器
26	青 猿 I	LG33-0221	集落跡・製鉄跡	縄文・平安	Tピット、製鉄炉、竪穴住居跡
27	近 内 寺 本 I	LG33-0138	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器、須恵器
28	近 内 寺 本 II	LG33-0149	散布地	古代	土師器
29	青 猿 III	LG33-0213	散布地	縄文・古代	縄文土器 (中期)、土師器
30	青 猿 II	LG33-0222	集落跡	弥生・平安	弥生土器、土師器、竪穴住居跡
31	狐 崎	LG33-0207	集落跡	縄文・奈良・平安	縄文土器、土師器、鉄滓、竪穴住居跡
32	泉 町 狐 崎 II	LG33-0218	集落跡	縄文・奈良・平安	縄文土器、土師器、竪穴住居跡
33	泉 町 狐 崎 III	LG33-0229	散布地		
34	泉 町 狐 崎 I	LG33-0321	散布地	古代	土師器
35	鴨 崎 I	LG33-0312	集落跡	古代	土師器
36	鴨 崎 II	LG33-0323	散布地	古代	土師器、須恵器
37	小 沢 貝 塚	LG23-2377	貝塚	縄文	縄文土器、貝層
38	小 沢 II 大 上	LG24-2080	散布地	縄文	縄文土器
39	長 根 V	LG33-0226	散布地		
40	長 根 IV	LG33-0225	散布地		
41	長 根 III	LG33-0235	散布地	古代	土師器
42	長 根 I	LG33-0253	群集墳	弥生～中世	古墳、蕨手刀、直刀、和同開珎、玉類
43	長 根 寺 I	LG33-0237	集落跡		
44	長 根 II	LG33-0256	散布地	古代	土師器
45	長 根 寺 II	LG33-0248	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器
46	長 根 寺 III	LG33-0258	散布地		
47	笠 間 館	LG33-0304	城館跡	中世	郭、腰郭、砦
48	千 徳 城 遺 跡 群	LG33-0197	城館跡	奈良・平安・中世	主郭、二の郭、三の郭、砦、空堀、千徳城、堀合館
49	横 山	LG33-0385	集落跡・貝塚	古代	土師器、須恵器、鉄滓
50	岩 ヶ 沢	LG33-1237	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器、須恵器

### Ⅲ 調査内容

#### 1 調査方法と経過（第5、6、7図）

調査区は、平成9年度に岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（以下、県埋文センターとする。）により調査された地点に続きその東側を調査区とした。調査区の現況は山林であり、地形は段状を呈する。調査面積は、平成11年度が900㎡（以下、A区とする。）、12年度が465㎡（以下、B区とする。）である。現況が段状地形であるため、地形を考慮し、平坦部一段ごとに調査を進めることとした。調査区は段差がつく斜面部を境に、調査A区とB区を設定し、両区を分割した。

A区は東西47m、南北42mの不整の逆台形をしている。B区は東西28m、南北8mの長方形をしている（第1図）。両調査区は南向きの斜面に位置し、高低差は南北で約13mほどある。

A区は南北に3段の平坦部が並び、B区は1段の平坦部と斜面部からなる。南北に3段の平坦部が並ぶA区は、中央の平坦部が広く、北側の平坦部が狭い。これらの平坦部は周辺地形の切り盛りにより現況に至ったものと考えられ、その掘削の時期の判断が山口館跡の規模、遺跡範囲を考える上で重要なものと認識していた。また現況で東西方向の並ぶ石積が確認できた。これについては検出遺構の項で後述したい。

全面掘り下げを行う前に、トレンチ調査により部分的に掘り下げを行い、遺物の有無、遺構の密度や地山までの堆積状況の確認を行った。

結果、A区北側の平坦部とB区全面は、斜面を削平し造りだされたものであり、A区中央部は旧地形に盛土を施し造成したものと判断できた。A区の堆積状況として、表土をはじめりとして、順に盛土層、旧表土層、漸移層、地山となる。このうち遺構確認面は漸移層から地山面である。また、A区中央部で、表土から遺構確認面までの深さが最深で約3.5mであることが判明した。

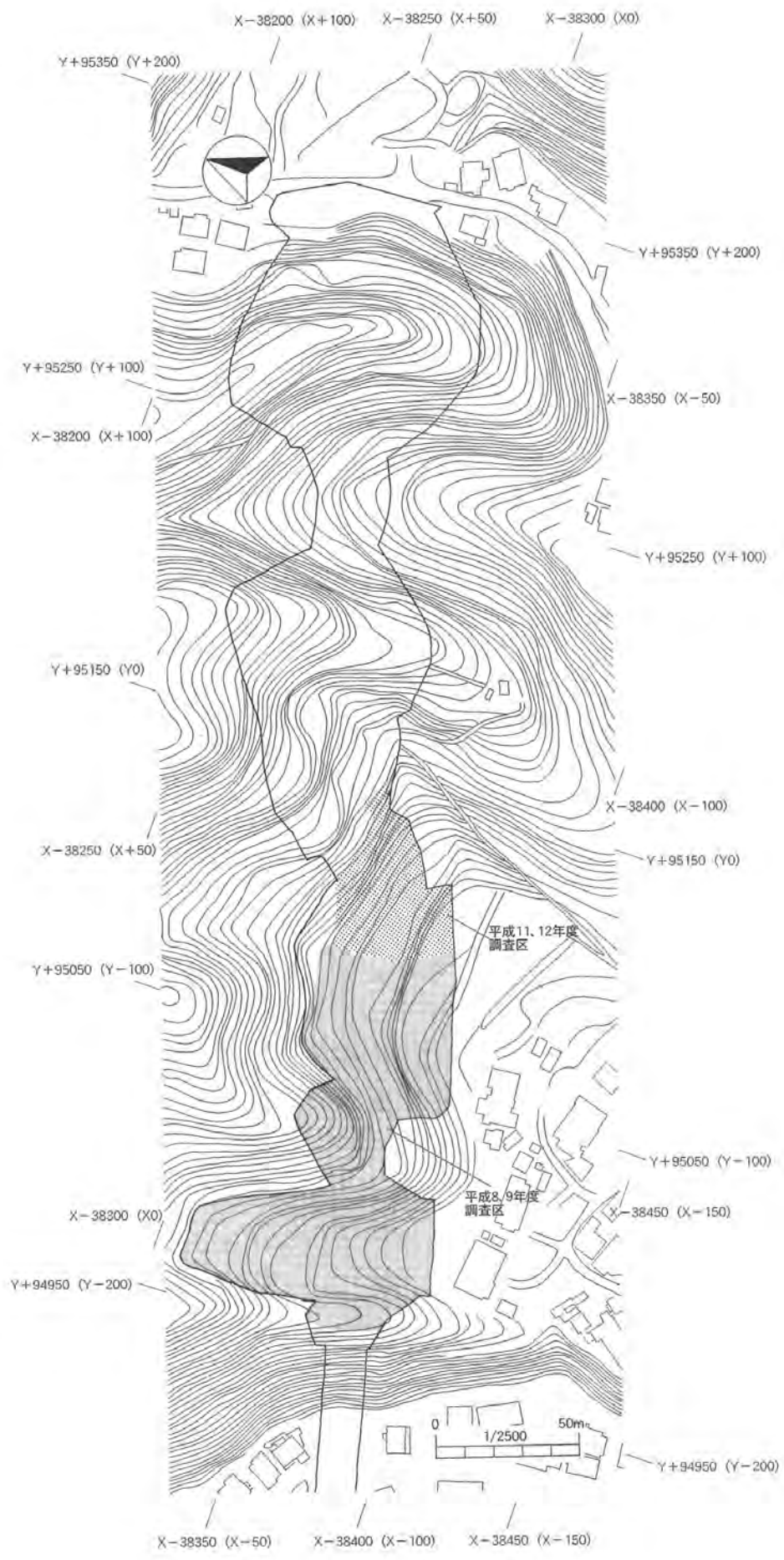
このトレンチ調査により、A区中央平坦部の盛土層中からガラス片が散発的に出土した。これにより、A区の盛土層を近・現代頃のものと考え、また、遺構検出面までの深さを考慮し、盛土層については重機を用い除去することとした。

なおこの盛土層については、基本土が遺跡地山の真砂土（花崗岩風化土）である。また調査区が丘陵の中腹にあり、地形的位置からみて遠距離からの土砂の搬入は考えにくい。したがって、この盛土は、削平地である調査地点B区やA区北側の平坦部を含めた調査区近辺から持ち込まれたものと考えたい。

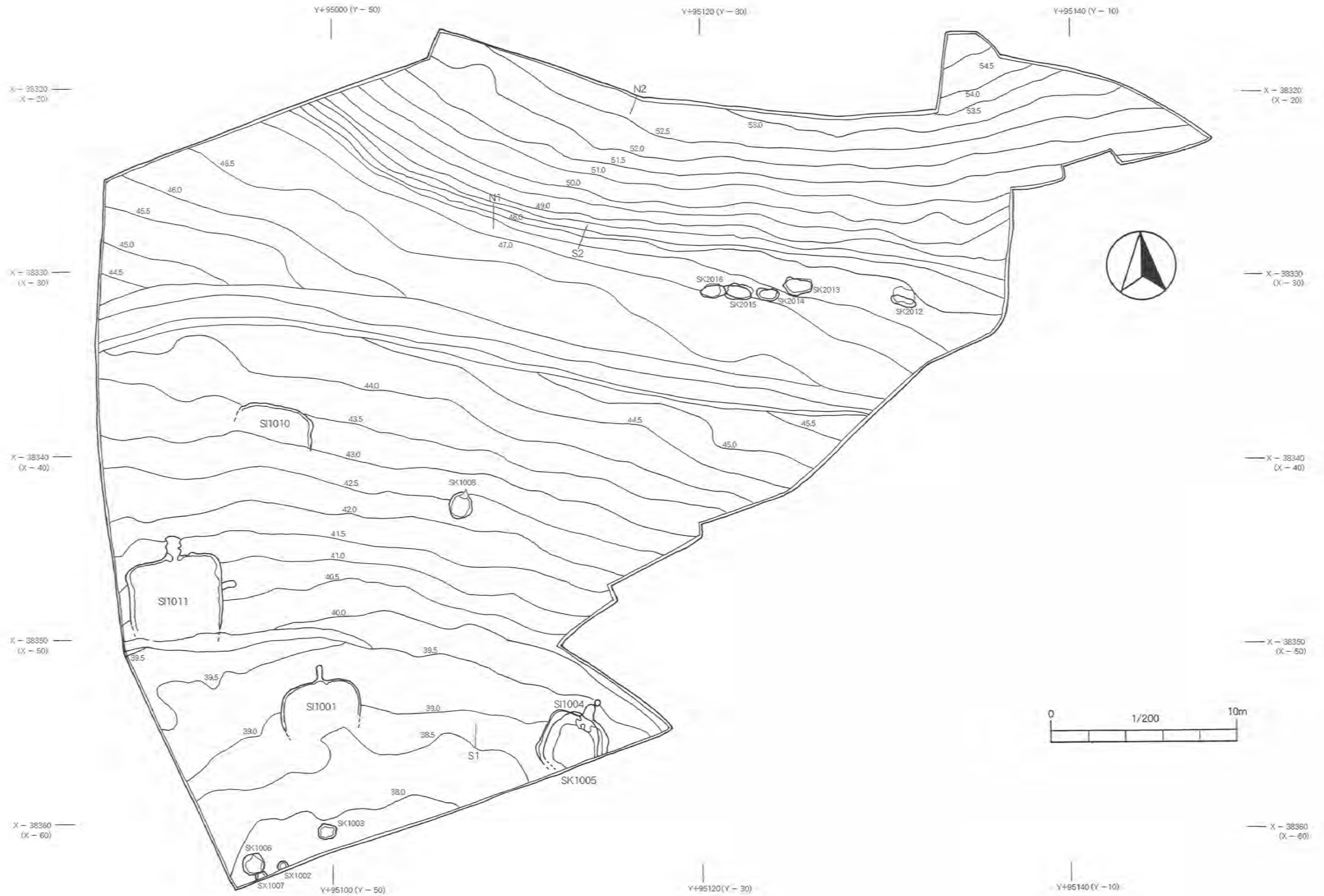


第5図 調査区区分図





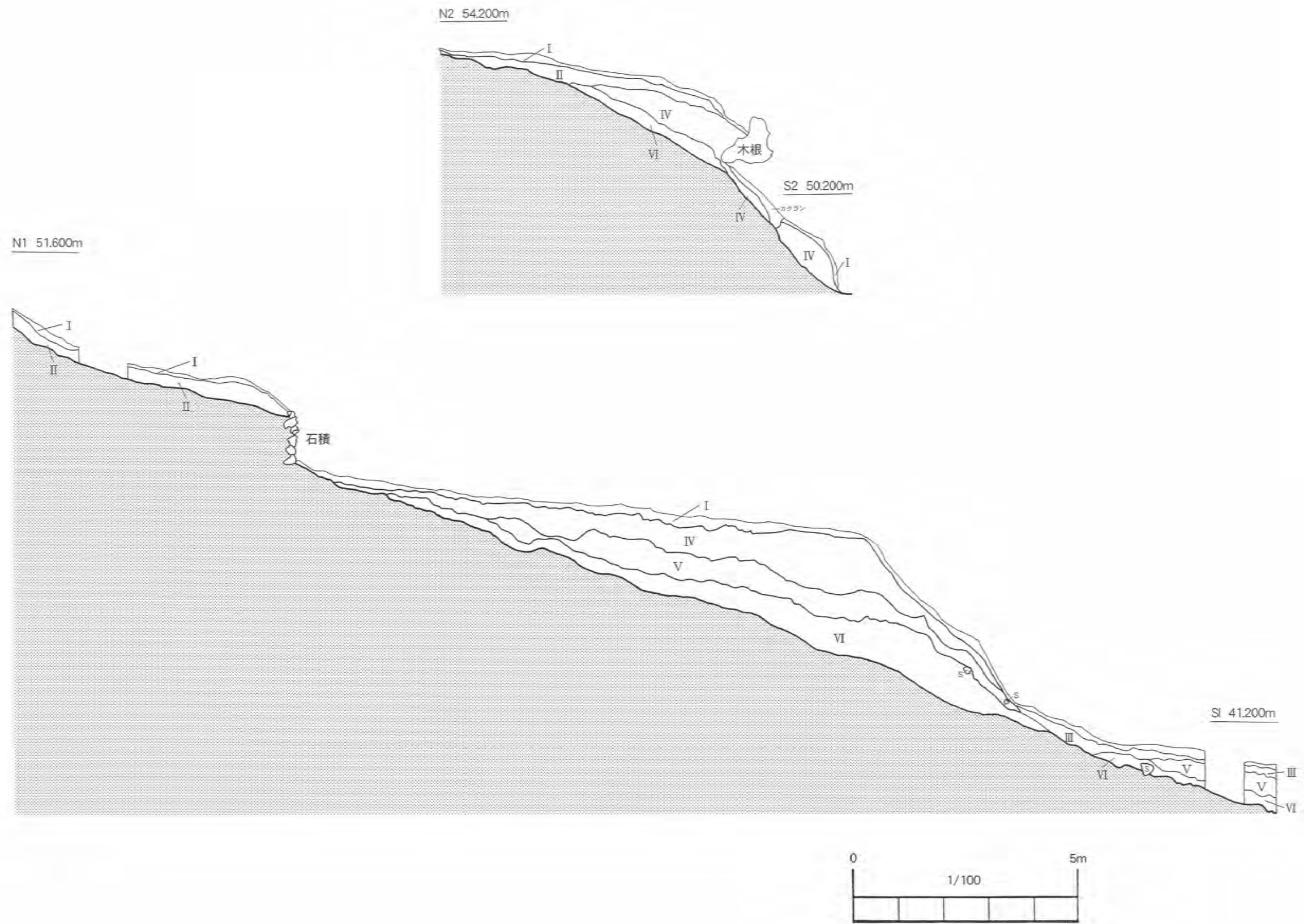
第6図 山口館跡調査区地形図



第7図 検出遺構配置図







第8図 調査区基本土層断面図



## 2 基本層序 (第8図)

A区・B区を縦断する南北方位にベルトを設定し、土層観察を行った。調査区の現況が、段状地形となっており、先に記した盛土層の状況から、現状の段状地形はA区南側平場を除き、近・現代の土木工事により改変を受けたものと考えられる。以下、遺跡の現況と基本土層の内容について記述する。

### A区

3段の平坦部からなる。北側の平坦部は、丘陵地形の削平により造りだされたものである。中央部の平坦部は、旧地形上に盛土を施し造成されたものである。南側の平坦部は、土層観察では盛土や削平の痕跡は見られず、大きな土地改変を受けずに現地形を留めているものと判断できる。

### B区

平坦面と斜面からなる。平坦面は、丘陵地形を削平し造りだされたものである。

### 基本土層注記

- I 層 表土層であり、黒褐色砂壤土 (10YR3/1・SL) を基本土とする。径2～5mmの花崗岩を5%、粗砂を含む。粘性なし。しまりは弱い。
- II 層 整地層であり、灰黄褐色砂壤土 (10YR5/2・SL) を基本土とする。径2～5mm花崗岩を5%、粗砂を含む。粘性なし。しまりは弱い。
- III 層 灰黄褐色土 (10YR4/2・SL) を基本土とする。灰黄褐色砂壤土 (10YR5/2・SL) を3%含む。粗砂を含む。しまりは弱い
- IV 層 盛土層であり、灰黄褐色砂壤土 (10YR4/2・SL) を基本土とする。径2～10mmの花崗岩を3%、粗砂を含む。粘性なし。しまりは弱い。
- V 層 旧表土層であり、黒褐色砂壤土 (10YR3/2・SL) を基本土とし、粗砂を含む。粘性なし。しまり弱い。
- VI 層 地山漸位層であり、黒褐色砂壤土 (10YR3/2・SL) を基本土とする。径5～10cmの鈍黄褐色砂壤土ブロック (10YR5/3・SL) が15%含まれる。また、粗砂を含む。粘性なし。しまりは弱い。



### 3 検出遺構と出土遺物

SI1001号竪穴住居跡（第9、10、11図）

〈検出状況〉 A区南側、Ⅶ層上面で検出する。

〈規模・形態〉 南半部がトレンチ調査の掘りすぎにより削平され、北半部のみ遺存する。掘り込み平面は、遺存部分で東西幅が4.0mを測る。カマドは北側壁面中央に付設される。壁は三方ともほぼ直立し、壁高は北壁で0.24m、東壁0.12m、西壁で0.28mを測る。床面はほぼ全面が貼床になっている。貼床面下部からは不整形ピットが5基確認された。大きさは0.14～0.4mであり、さほど深くなく、形状に規格性がない。これらピットの埋土は全て貼床構築土であり、地山包含の花崗岩の抜き取り跡と考えられる。また、掘り込みの東側と西側の一部で径30～70cmの花崗岩が露出する。

埋土は、黒～黒褐色砂壤土を基本とするA、B層に大別でき、A層は、不明瞭だが色調の違いから6層に分層される。各層とも混入土はなく、粗砂を含む。

〈カマド〉 北側壁面の中央に細長く張り出す煙道と、その前面で焼土を確認する。カマド本体部は消失している。煙道は長軸で1.15m、幅が0.45mである。焼土は貼床構築土上で確認される。焼土範囲は南北0.84m、東西0.4mで不整形長円形を呈する。煙道の構築法は不明である。煙道の底面はほぼ水平である。カマド方位は、煙道長軸から、概ねN-8°-Wである。

煙道部埋土は、色調の違いからA6、B1の2層に別けられる。黒～黒褐色砂壤土を基本土とする。鈍黄褐色土塊を含む。粘性がなく、しまりは弱い。

〈柱 穴〉 柱穴は北西側、北東側、南西側で各1基が確認される。これらから、柱痕跡は確認されていないが、位置関係から柱穴とした。北西側P-1は不整形円形で径0.28m、深さ0.1mである。北東側P-2は不整形円形で、径0.34m、深さ0.16mである。南西側P-3は、北側で礫抜き取り痕と重複し、柱穴が礫抜き取り痕を切る。南西側P-3の柱掘り方は、不整形形で、径0.24m、深さ0.26mある。

〈出土遺物〉 埋土中からの出土が多く、殆どが破片資料である。高坏形土器がA3層上面から口縁部を下にした状態で出土する。

1～7は土師器、8、9は須恵器である。

1は甕口縁部片である。口唇部は面取りされている。器面調整は、外面はヨコナデ、内面は横位のミガキを施している。口径は、推定15cmである。

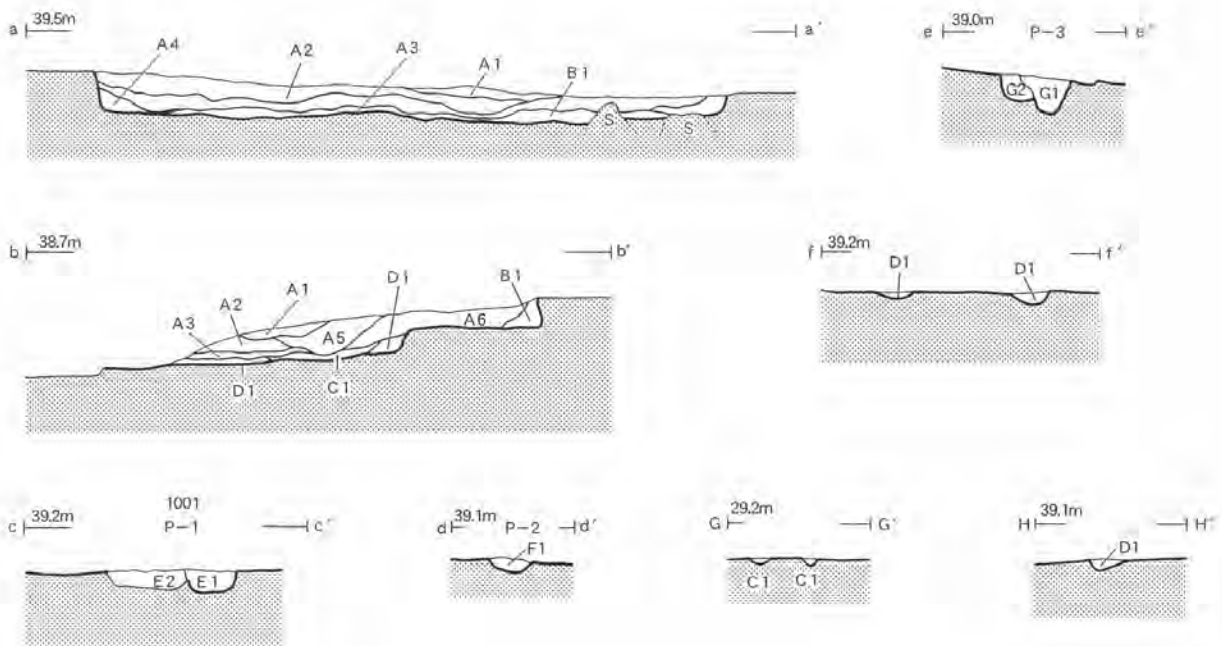
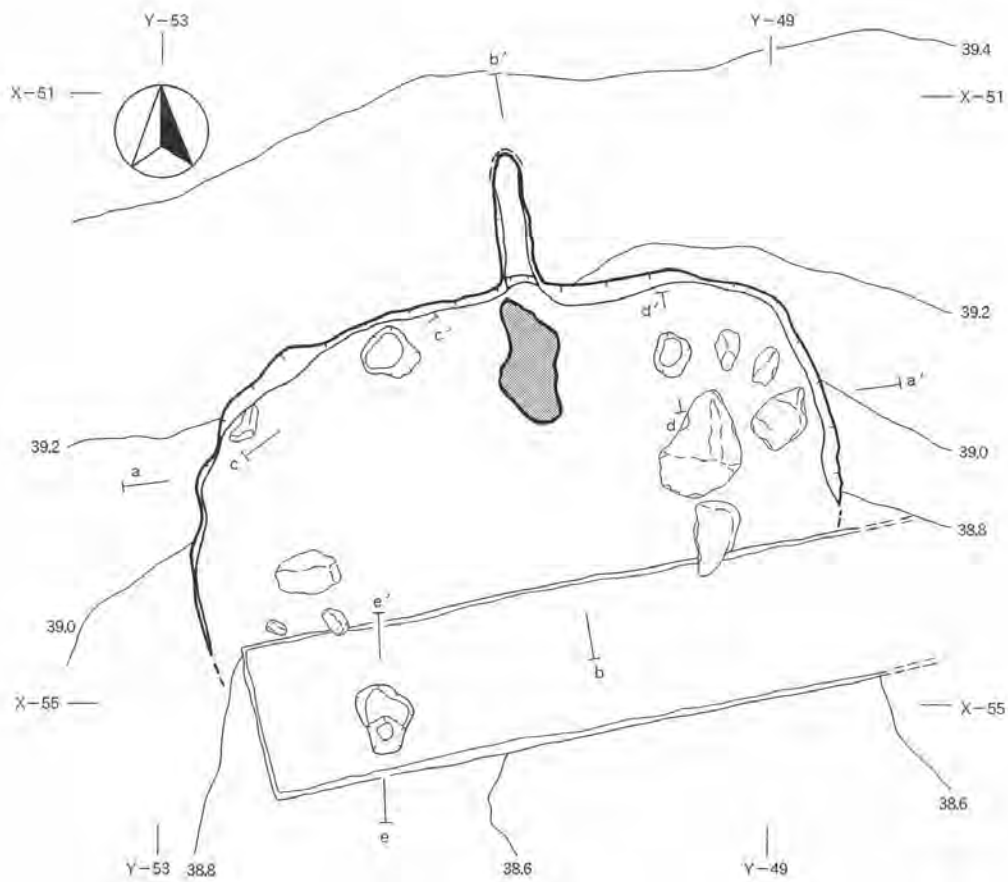
2は甕口縁～肩部片である。口縁部は外反し、肩部に段を持つ。器面調整は、外面はヨコナデ、一部ハケメがある。内面はヨコナデが施される。口径は、推定15cmである。

3は甕口縁～胴部上半部である。口縁部は内湾ぎみに立ち上がり、器壁が厚い。器面調整は、外面は、頸部～胴部にヘラナデとミガキが施され、口縁部はヨコナデで整形されている。内面は、頸部にヘラナデとミガキ、口縁部はヨコナデ整形されている。口径は、推定17cmである。

4は甕口縁部である。残存部位はわずかである。器面調整は、外面はヨコナデ、内面は横位ミガキが施されている。口径は、推定17cmである。

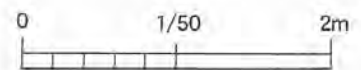
5は甕口縁部である。器面調整は、外面は口縁部先端側にヨコナデを施した後、ヘラナデ整形する。内面は、ヨコナデを施した後、横位ハケメが入っている。特徴として、胎土が粗く、色調は灰黄褐色を呈することがあげられる。

6は甕口縁～胴部上半部である。口縁部は肩部から折れ曲がるように開く。口唇部は面取りされて

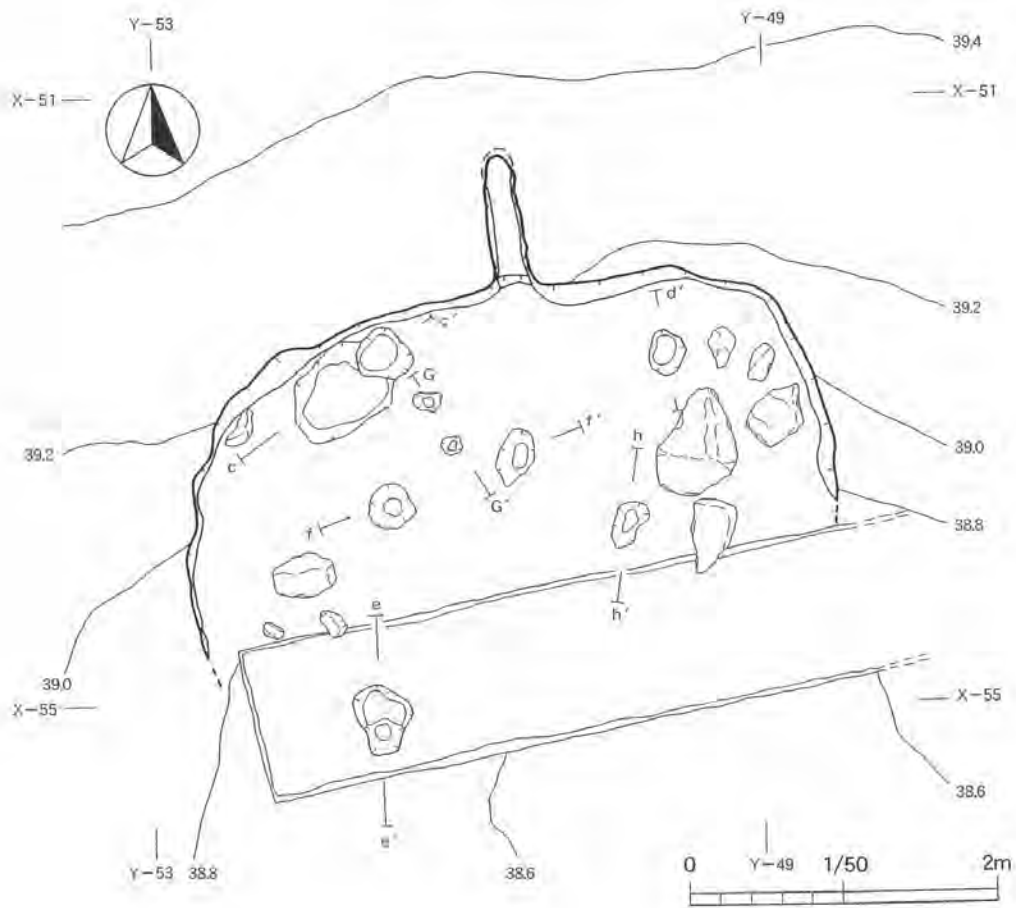


SI1001

A1	砂壤土	(10YR2/1)	砂質	やや疎	
A2	砂壤土	(10YR2/1)	砂質	やや疎	
A3	砂壤土	(10YR2/2)	砂質	やや疎	
A4	砂壤土	(10YR2/3)	砂壤土塊(10YR4/2)1%	砂質	やや疎
A5	砂壤土	(10YR2/1)	砂質	やや疎	
A6	砂壤土	(10YR2/2)	砂壤土塊(10YR4/2)1%	砂質	やや疎
B1	砂壤土	(10YR3/2)	砂壤土塊(10YR4/2)3%	砂質	疎
C1	砂壤土	(10YR5/5)	炭化物粒(10YR2/1)3%	やや砂質	やや密 焚口部焼土
D1	砂壤土	(10YR4/2)	砂壤土塊(10YR4/2)1%	やや粘質	やや疎 貼床構築土



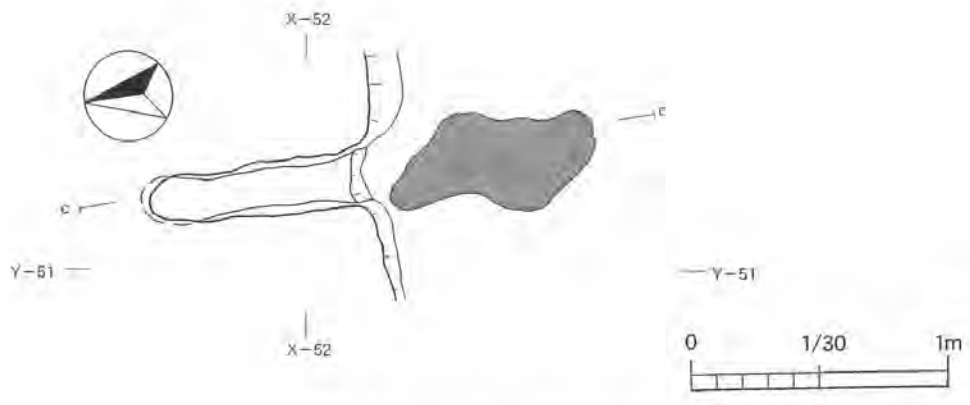
第9図 SI1001平面図(貼床面)・土層断面図



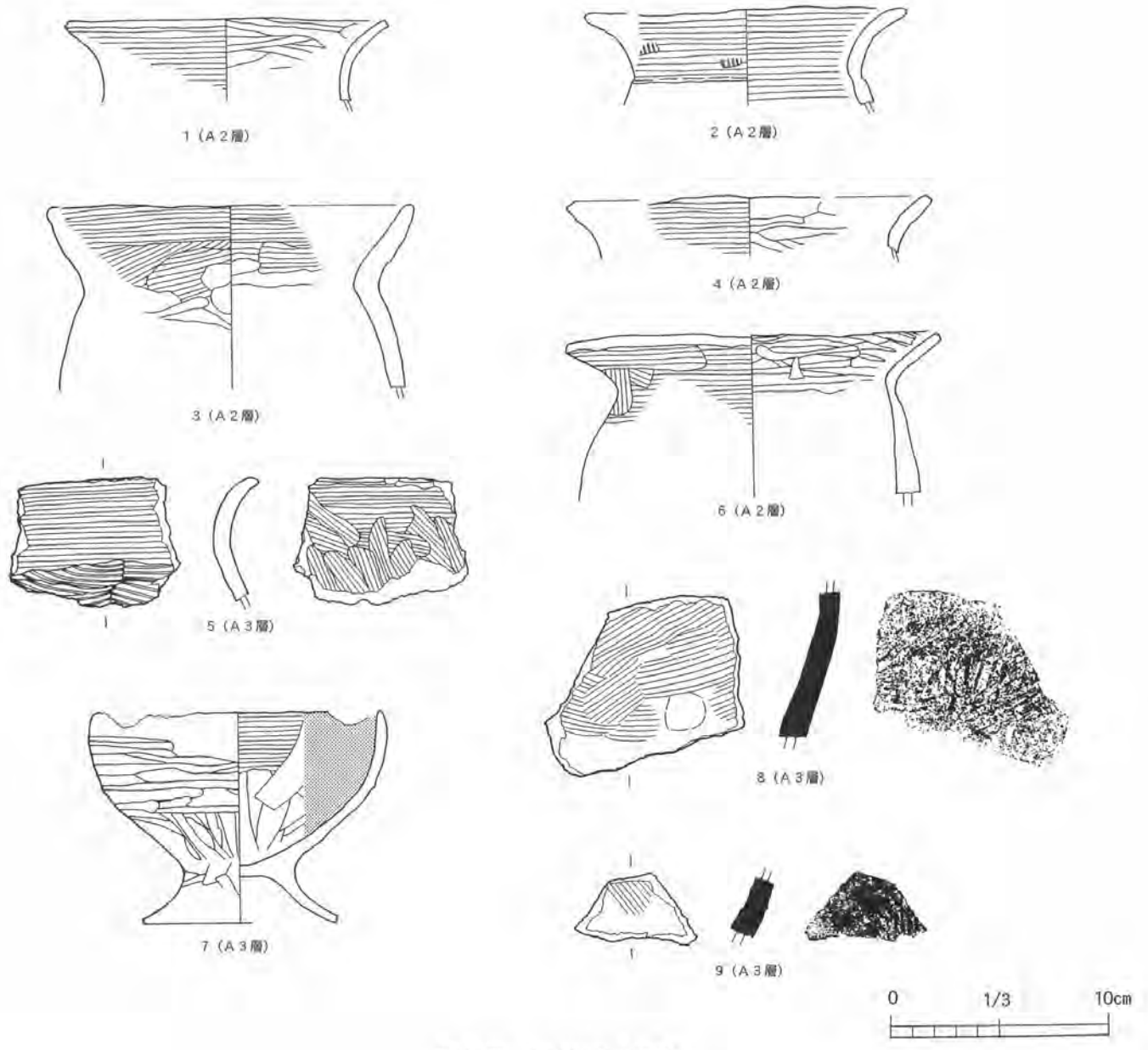
- SI1001 P1  
 E1 砂壤土 (10YR3/2) 砂壤土塊(10YR5/4)3% 砂壤土塊(7.5YR4/3)1% 砂質 やや密  
 E2 砂壤土 (10YR3/2) 砂壤土塊(10YR5/4)1% やや砂質 やや密
- SI1001 P2  
 F1 砂壤土 (10YR3/2) 砂壤土粒(10YR3/2)1% 砂質 疎
- SI1001 P3  
 G1 砂壤土 (10YR3/1) 砂壤土塊(10YR5/4)3% 砂質 疎  
 G2 砂壤土 (10YR3/2) 砂質 疎
- SI1001 f-f', g-g', h-h'  
 D1 砂壤土 (10YR4/2) 砂壤土塊(10YR4/2)1% やや粘質 やや疎 貼床構築土

第10図 SI1001平面図(構築面)





第11図 SI1001カマド平面図



第12図 SI1001出土遺物

いる。器面調整は、外面はヨコナデで整形している。内面は横位のミガキが施されている。口径は17.5cmである。

7は高坏形土器である。口径13.3、脚部径8.9、器高9.8cmである。口縁部はわずかに内湾する。脚部はハの字形に開き先端部を面取りする。器面調整は、外面は口縁～胴部上半に横位ミガキ、胴部下半から脚部に縦位ミガキを施す。内面は黒色処理されており、口縁～体部上半にヨコナデ、胴部下半～底部は縦位のヘラナデで整形する。脚部にはミガキが施されているが、摩滅しており、単位は識別できない。

8、9は甕胴部である。外面に平行叩目痕がみられ、内面はヘラナデ整形されている。8の内面には指圧痕がみられる。

<時期> 奈良時代

#### SI1004竪穴住居跡（第13、14、15図）

<検出状況> A区南東端部、Ⅶ層上面で検出する。SK1005に切られる。

<規模・形態> 南西側壁面が消失している。隅丸方形と考えられる。東西3.6m、南北3.1mの掘り込みである。カマドは北東壁中央部に付設される。壁はほぼ直立する。壁高は東壁が0.32m、西壁0.45mである。床面は平坦である。柱穴は北東側で1基確認された。柱痕跡はなく、位置的なことから柱穴とした。SK1005と重複し一部を消失している。

埋土は、黒～黒褐色砂壤土を基本とするA、B層に大別でき、A層は、不明瞭だが色調から2層に小別できる。両層とも、鈍黄褐色砂壤土塊をわずかに含む。しまりが弱く、粘性はない。

<カマド> 北東壁中央部に取り付く。本体部は芯材の礫を残し、これに張り付く構築土が崩落した状態で確認される。焚口部では土器片と礫が重なる状態で確認された。この土器片と礫には被熱痕跡はなく、廃棄時に置かれたものと考えられる。煙道の構築法は不明である。煙出しは割り貫いている。煙道の規模は、長さは1.9m、幅1.3m、深さ1.6mを測る。煙出は直径0.7mの不整円形である。カマド方位はN-34°-Eである。

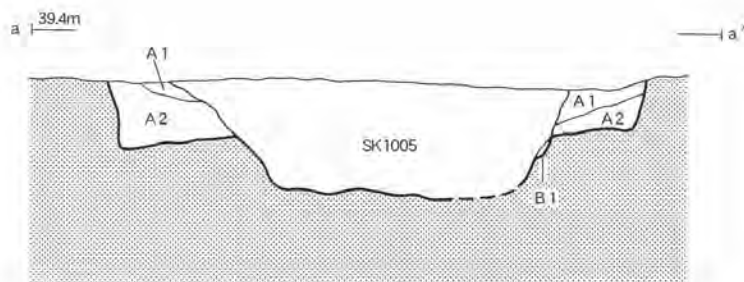
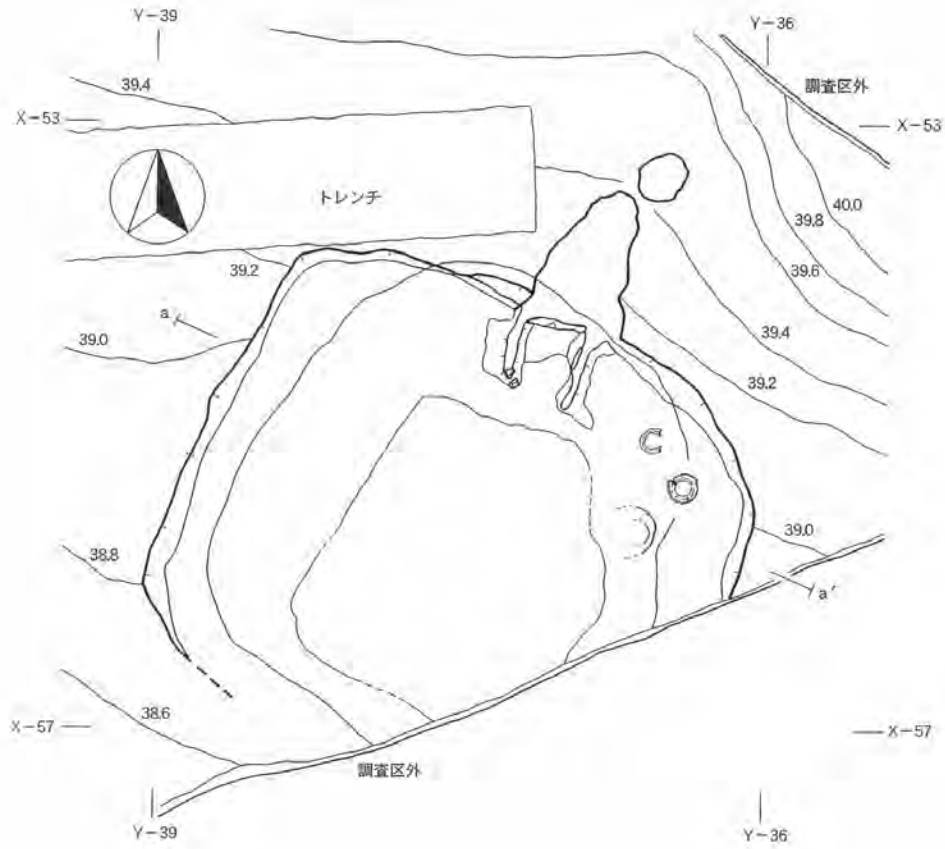
埋土は、不明瞭だが色調の差違から、A、B層に大別され、A層はさらに2層に小別される。A、B層は黒～鈍黄褐色土を基本とし、鈍黄褐色土粒を含む。しまりが弱く、粘性はない。

<出土遺物> 土師器が2点、床面北東隅から出土している。本遺構はSK1005と位置を同じくして重複しており、SK1005に切られている。このため、本遺構の遺物であったものがSK1005内出土として扱われている可能性もある。

1は球胴甕で、口径18.5cm、胴部上半に最大径を持つ。口縁部は、張りのある肩部から直立し外反する。口唇部は面取りされている。器面調整は、外面は口縁部をヨコナデ、肩部にはハケメが見られ、胴部は縦位の強いヘラナデで整形をしている。内面は、口縁部はヨコナデ、肩～体部にかけては不明瞭だが弱いヘラナデで整形をしている。

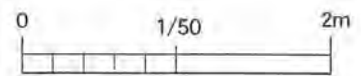
2は甕で、口縁部のみ出土する。口径は17.6cmである。口唇部に近いほど反りが強くなる。口唇部は面取りされている。器面調整は、外面、内面ともにヨコナデで整形されている。

<時期> 奈良時代



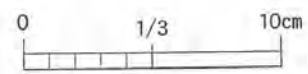
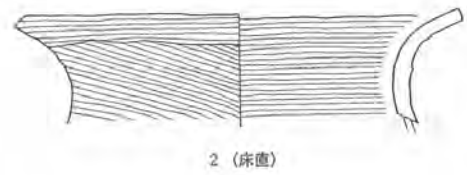
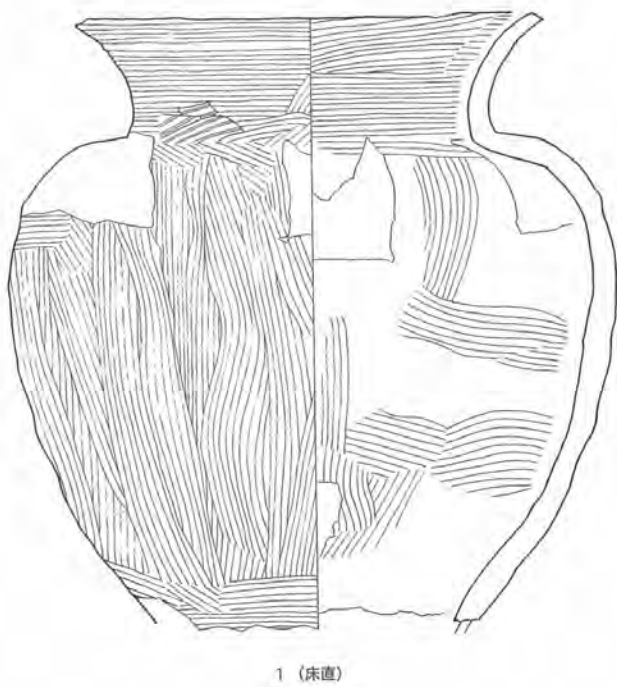
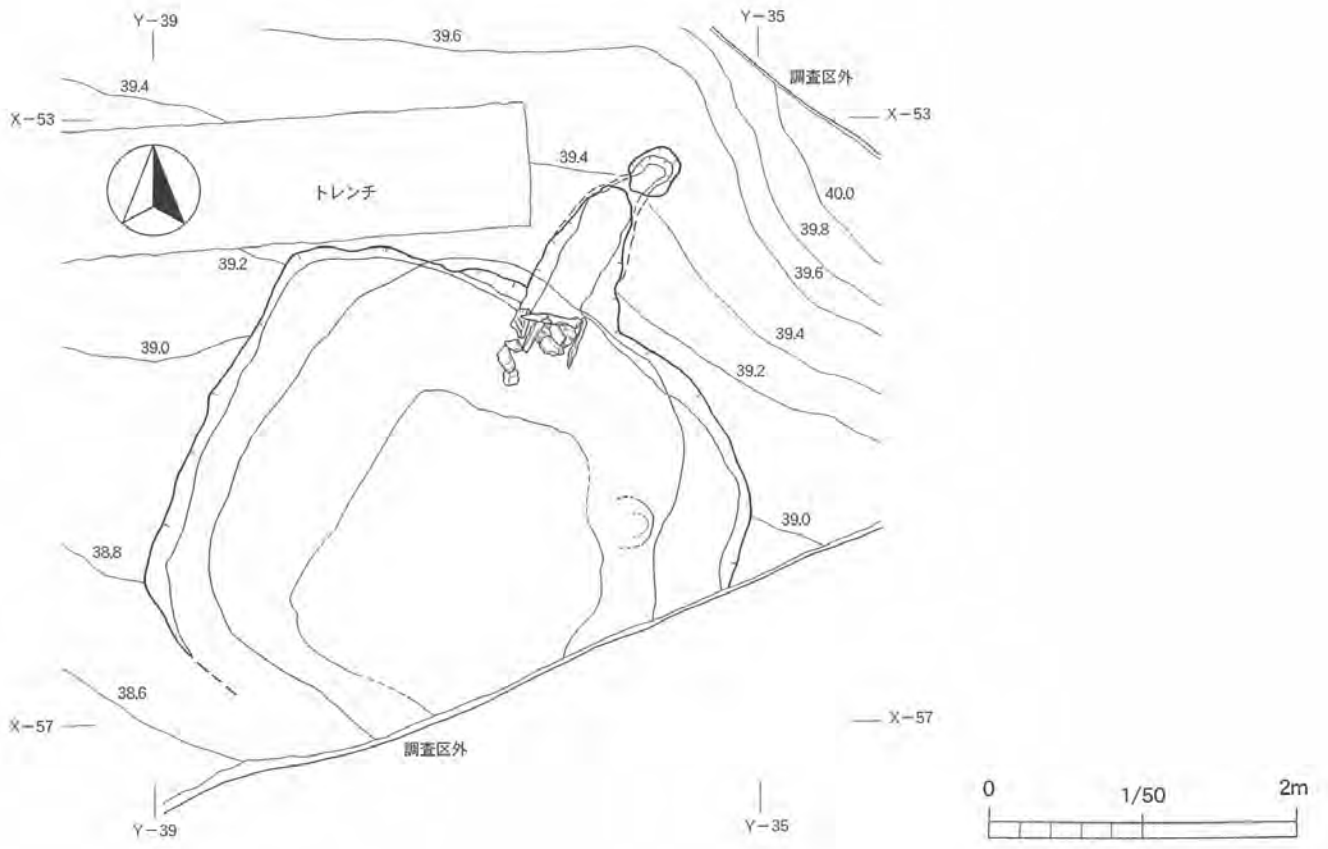
SI1004

- A1 砂壤土 (10YR3/2) 砂壤土粒(10YR4/3)1% 砂質 疎
- A2 砂壤土 (10YR3/1) 砂質 疎
- B1 砂壤土 (10YR2/1) 砂質 疎 北東側ピット埋土

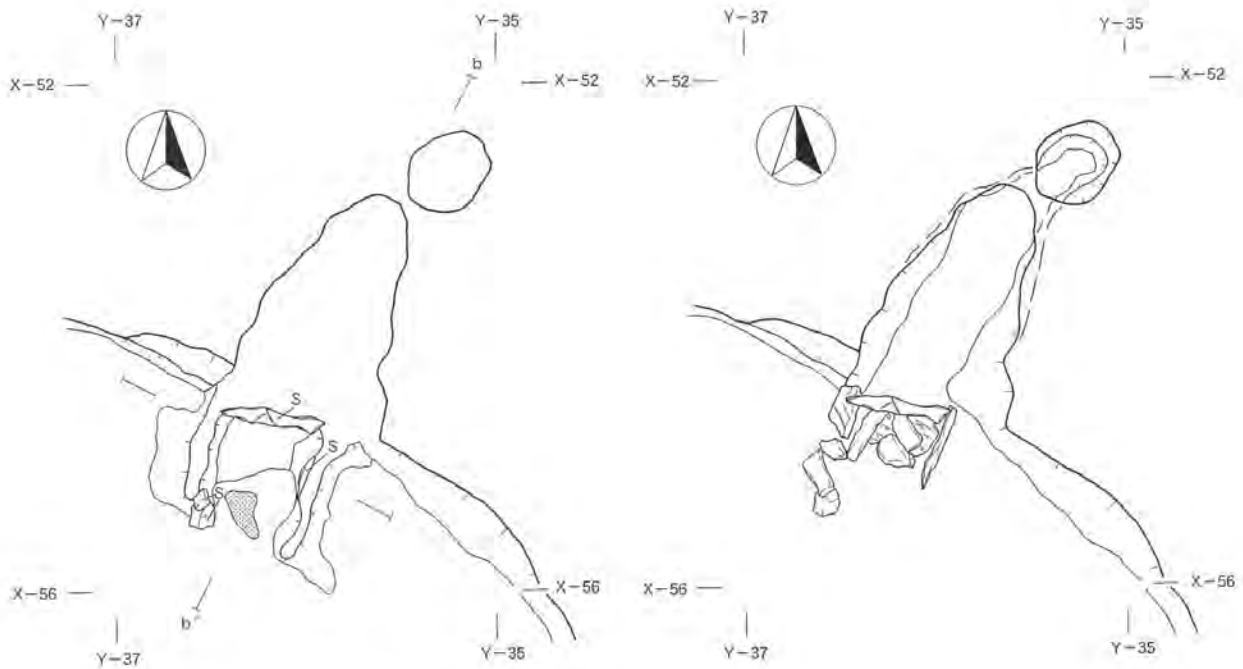


第13図 SI1004平面図・土層断面図



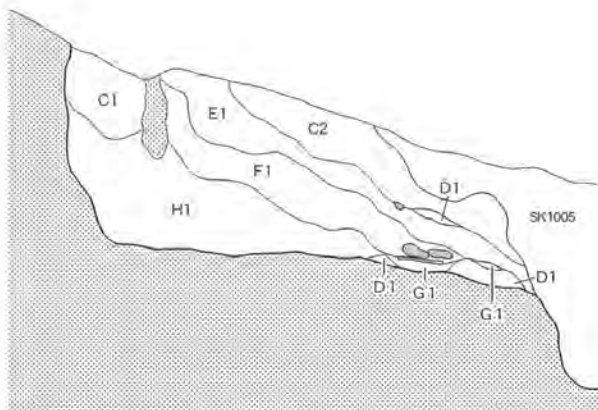


第14図 SI1004平面図 (完掘)・出土遺物



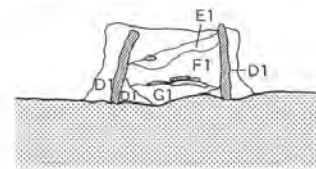
b | 40.0m

→ b'



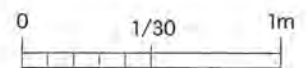
c | 39.1m

→ c'



SI1004

C1	砂壤土 (10YR2/1)	砂質 疎	流入土
C2	砂壤土 (10YR3/2)	砂壤土粒(10YR5/4)1%	砂質 疎 流入土
D1	砂壤土 (10YR5/4)	砂壤土塊(10YR2/1)1%	砂質 やや密 カマド袖土
E1	砂壤土 (10YR3/1)	砂壤土粒~塊(10YR5/4)5%	砂質 疎 流入土
F1	砂壤土 (10YR2/2)	砂壤土粒(10YR5/4)3%	砂質 疎 流入土
G1	砂壤土 (7.5YR4/4)	炭化物粒(10YR1/1)1%	砂質 やや密 カマド焼土
H1	砂壤土 (10YR2/1)	砂質 疎	流入土



第15図 SI1004カマド平面図・土層断面図

#### SI1010竪穴住居跡（第16図）

<検出状況> A区中央部西側、Ⅶ層上面で検出する。

<規模・形態> 南半部を消失する。西側部分は、トレンチ調査の掘りすぎにより消失する。

東西幅は4.0mで、遺存部分から隅丸方形を呈するものであったと考えられる。壁は直立し、壁高は、北壁は0.16m、東壁0.14mである。床面は南に向かい緩く傾く。柱穴は確認されなかった。床面中央で円形プランと不整円形プラン、長円形土坑を確認する。円形プランは灰黄褐色呈し、直径0.22mである。下部に明瞭な掘り込みは確認されなかった。不整円形プランは東西0.98m×南北0.9mを測り、この中から鍛造剥片と湯玉が確認されている。長円形プランは東西1.4m以上、南北0.4mを測り、掘り込みの深さは、確認面から0.05mと浅く、底面に凹凸があり安定しない。埋土は炭化物を多く含む。

埋土は、黒褐色砂壤土を基本とするA層である。単層であり、混入物を含まない。しまりは弱く、粘性はない。

<出土遺物> 床面中央の不整円形プランから鍛造剥片と湯玉が出土している。

<時期> 不明

#### SI1011竪穴住居跡（第17、18、19、20、21図）

<検出状況> A区中央部西側、Ⅵ層下面で検出する。

<規模・形態> 南側が、遺跡現況でみられた平坦部の造成時に削平されている。掘り込み平面は方形である。東西で5.08m、南北では遺存部分で4.06mを測る。壁面はほぼ直立し、壁高は東壁で0.5m、西壁0.45m、北壁0.7mである。床面は全面に貼床されている。周溝状の掘り込みが貼床下部から、西壁と北東隅で部分的に確認される。この周溝状の掘り込みは本来的には貼床上面から掘り込まれたものと考えられる。貼床の下部から花崗岩の抜き取り跡が確認される。

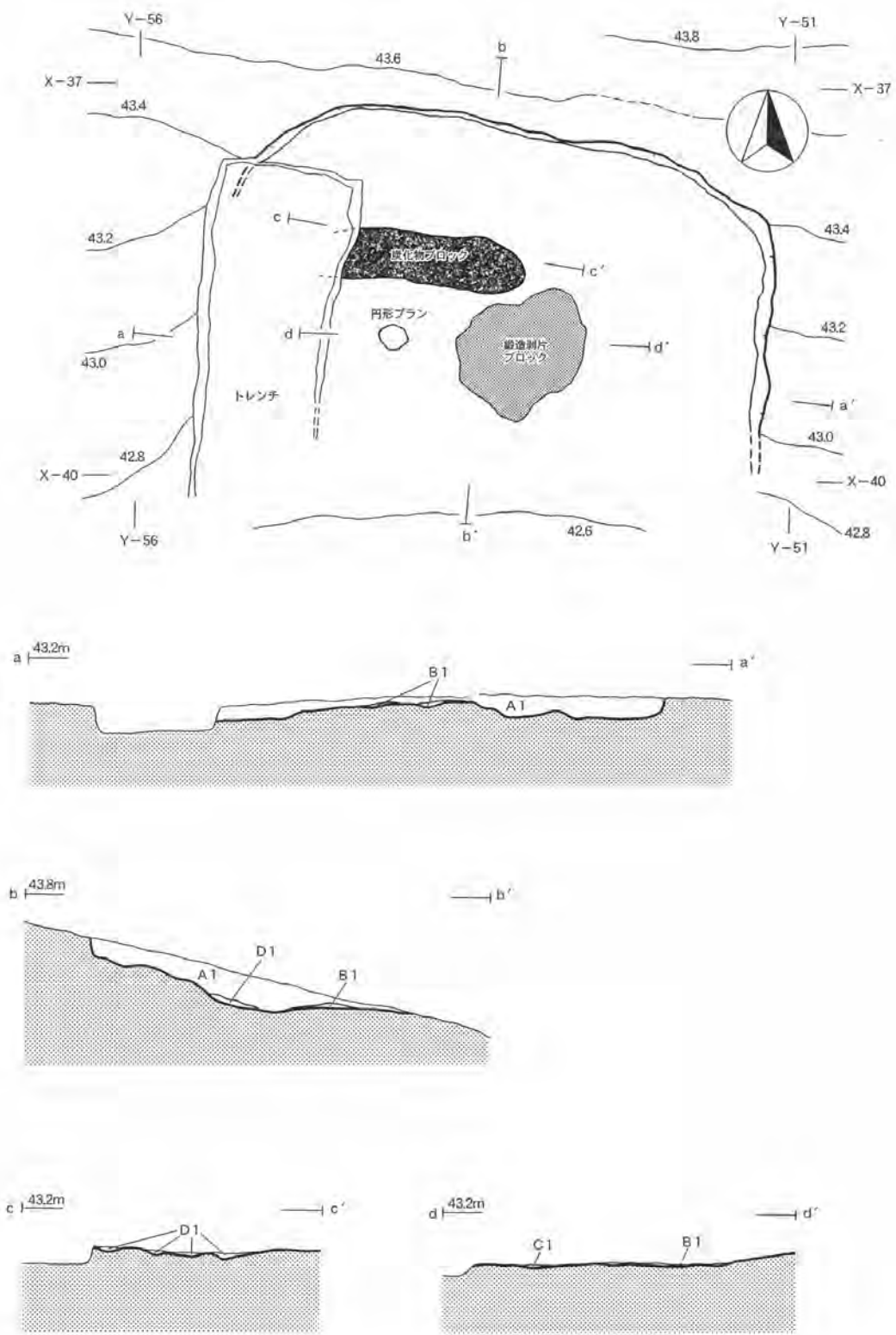
埋土は、黒～鈍黄褐色砂壤土を基本とするA、B層に大別できる。さらに、A、B層は、不明瞭ながらも色調の違いから、ともに2層に小別される。各層ともに混入土が少なく、また、色調に大きな違いはなく漸移的なものであることから、自然堆積と考える。

<カマド> 北側壁中央（以下、北側カマド）と東側壁中央（以下、東側カマド）に各1基確認される。北側カマドは袖部分が遺存し、東側カマドは煙道部のみ確認する。これら2基の新旧はその遺存状態から、東側カマドが古く、北側カマドが新しいものとする。

北側カマドは、本体部に芯材として板状の流紋岩を用い、構築土を貼り付けている。焚口部には東西0.8m×南北0.7mの不整形焼土が確認される。煙道は掘り込み式であり、天井と両側壁に板状の流紋岩を置き、天井部に構築土を貼り付けている。煙道から煙出部の規模は長さ1.15m、幅0.6mである。煙道側壁の芯材は、側壁に直置きされている。さらに、煙道天井部には、板状流紋岩が粘土で押さえをし立て置かれている。カマド方位はN-11°-Wである。

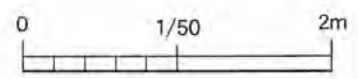
北側カマドの埋土は、黒～鈍黄褐色砂壤土を基本とするE、F層に大別される。さらに、E層は2層に、F層は3層に小別される。E層は、混入土をわずかながら含む。F層は混入土をわずかながら含む。E層は煙道天井礫の目止め土である。

F層は煙出部に堆積し、ここに意図的に円礫が充填されている。このことから、F層は人為的な埋め戻しにより堆積したのものと考え、本カマドは意図的に埋め戻されたものと判断される。



SI1010

A1	砂壤土 (10YR3/2)	砂質 疎		
B1	砂壤土 (10YR2/2)	ハンマースケール1%	砂質 疎	小鍛冶跡
C1	砂壤土 (10YR4/2)	砂質 やや密		円形プラン
D1	砂壤土 (10YR2/1)	炭化物粒(10YR1/1)3%	砂質 疎	長円形プラン



第16図 SI1010平面図・土層断面図



東側カマドは、煙道部のみ検出され、本体部は確認できず、前面には石の抜き取り痕とみられる不整形の落ち込みのみが確認される。煙道の構築法は不明である。煙道の規模は、長さ0.7m、幅が0.3mである。前面で焼土は確認されなかった。カマド方位は煙道長軸から、概ねN-75°-Eと推定される。

〈柱 穴〉 柱穴は床面の北東側で1基、南東側1基、南西側で1基確認される。柱穴については、柱痕跡が確認された北東側柱穴の形状を根拠に、同形状のものを柱穴とした。北東側P-2は直径0.25m、深さ0.45mで、柱痕跡が確認される。南東側P-3は直径0.32、深さ0.4m、南西側P-4は直径0.3m、深さ0.4mである。

〈遺 物〉 1～3は土師器、4～15は須恵器である。16は縄文土器である。17は鉄製品である。

1は甕底部である。底径は6.0cmで高台をわずかに作り出している。器面調整は、外面は側面を強いヘラナデ整形、内面は弱いヘラナデを施している。

2は坏である。口径12.7、器高4.1、底径7.0cmである。口縁部は緩く内湾し、口唇部は丸く収まる。胴部中央からやや下の位置に段をもち、平底である。器面調整は、外面は横位ヘラミガキ、内面は横位ヘラミガキが施され、黒色処理されている。

3は鉢である。口径19.4、器高9.7、底径7.2cmである。口縁部は緩く内湾する。器面調整は、外面は横位ヘラミガキ、内面は横位ヘラミガキが施され、黒色処理されている。底部には木葉痕がある。

6、9、11、12、14は甕である。4、5、10、13は格子状叩目痕があり、15の壺形土器と同一個体の可能性がある。

6は、外面は平行叩目、内面はヘラナデで整形される。

11、14は平行叩目が見られ、内面には指圧痕が残る。

9、12は、外面は摩滅し、内面には指圧痕が残る。

7は長頸壺頸部である。器面調整は内外面ともロクロ調整である。

8は坏口縁部である。器面調整はロクロ調整である。破片資料のため口径等は不明である。

15は壺頸～肩部である。外面には格子状の叩目が見られ、内面には指圧痕が残り、頸部はヘラナデで整形される。

16は深鉢の底部とみられ、網代痕がある。

17は釘の身部で、重量は1.9gである。

〈時 期〉 奈良時代

#### SK1003土坑 (第22図)

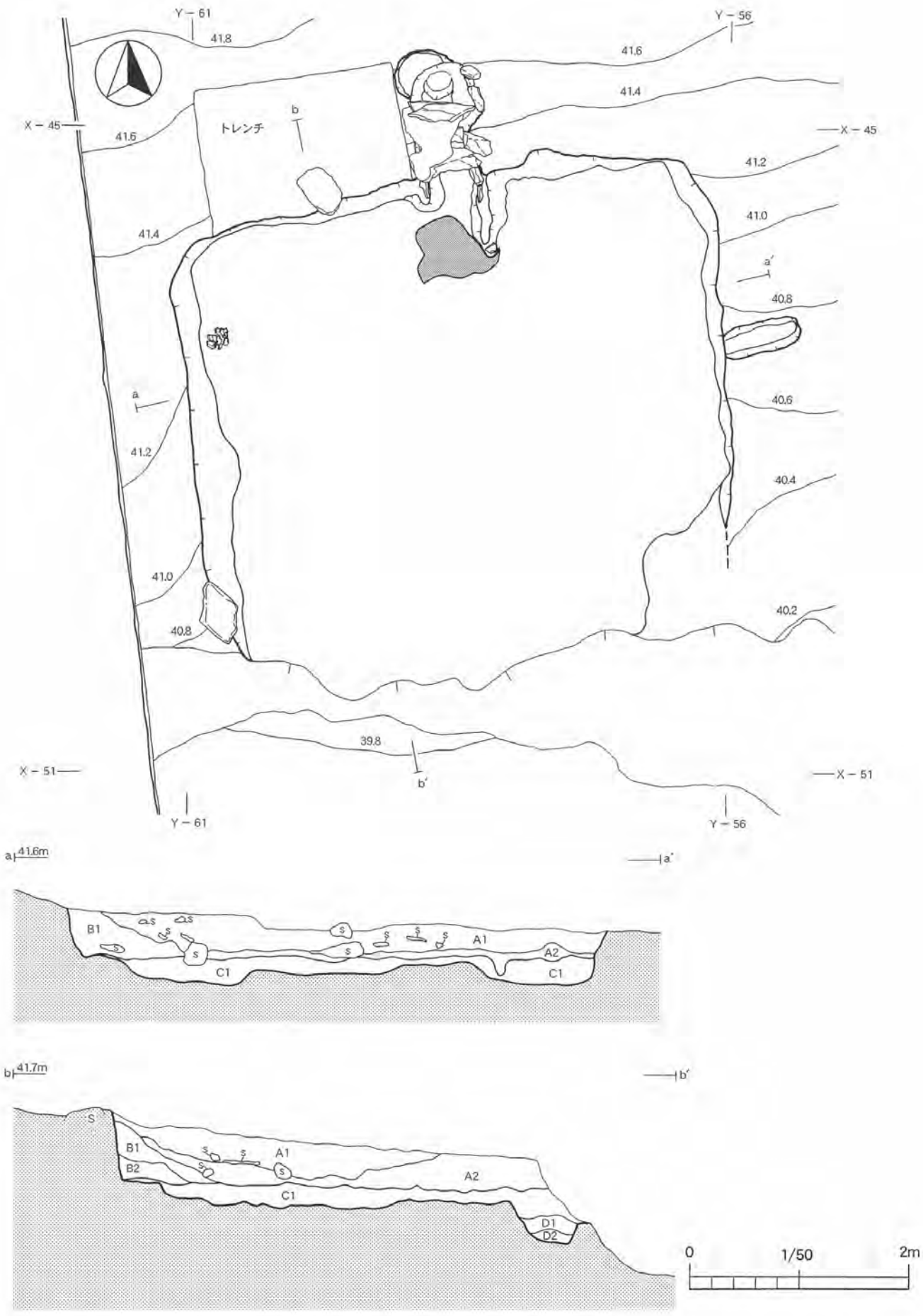
〈検 出 状 況〉 A区南端、Ⅱ層上面で確認する。

〈規模・形態〉 1.0×0.7mの不整形で、長軸方位はN-85°-Wにある。壁立ち上がりは緩く、底面にはやや凹凸がある。

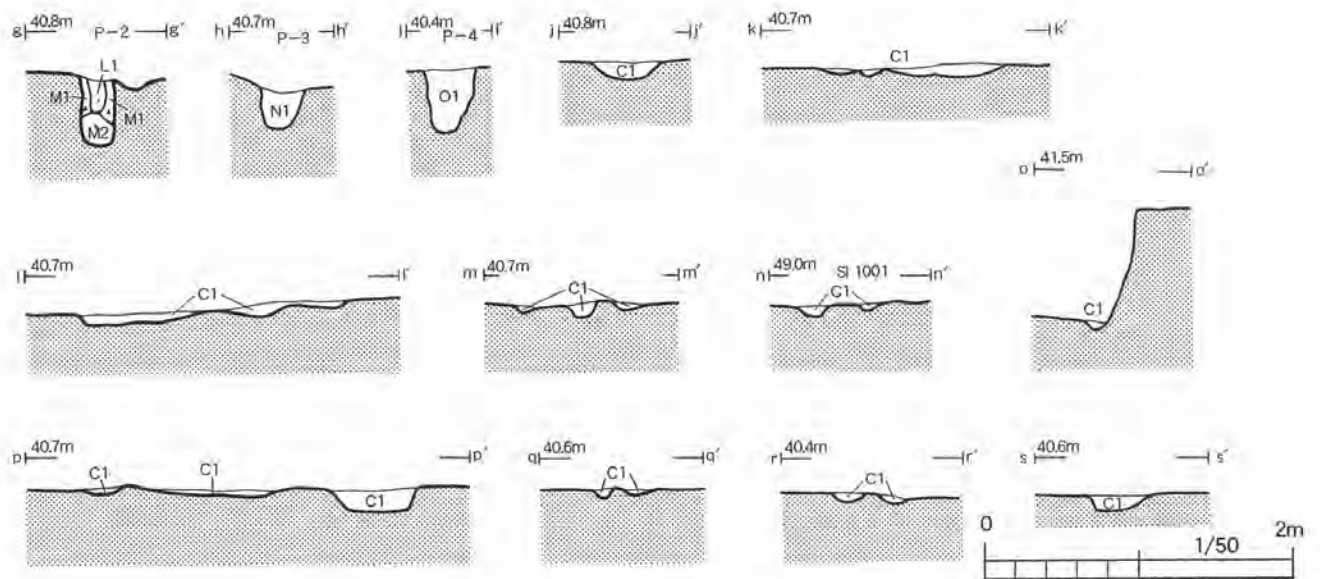
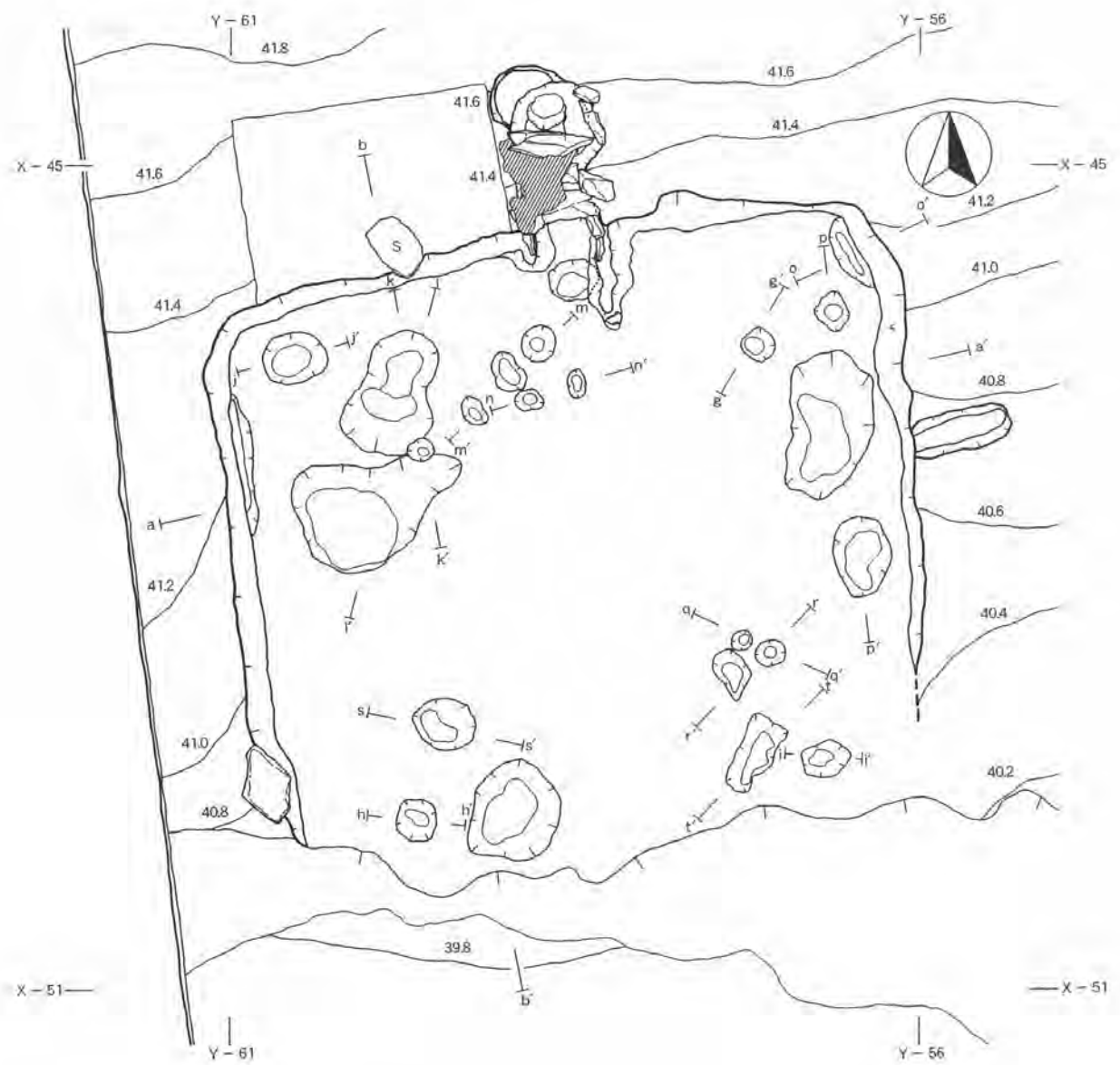
埋土は、黒褐色砂壤土を基本とする単一層であり、層厚は薄い。

〈出 土 遺 物〉 鉄釘が埋土中から1点出土している。全長5.1cm、重さは6.0gである。

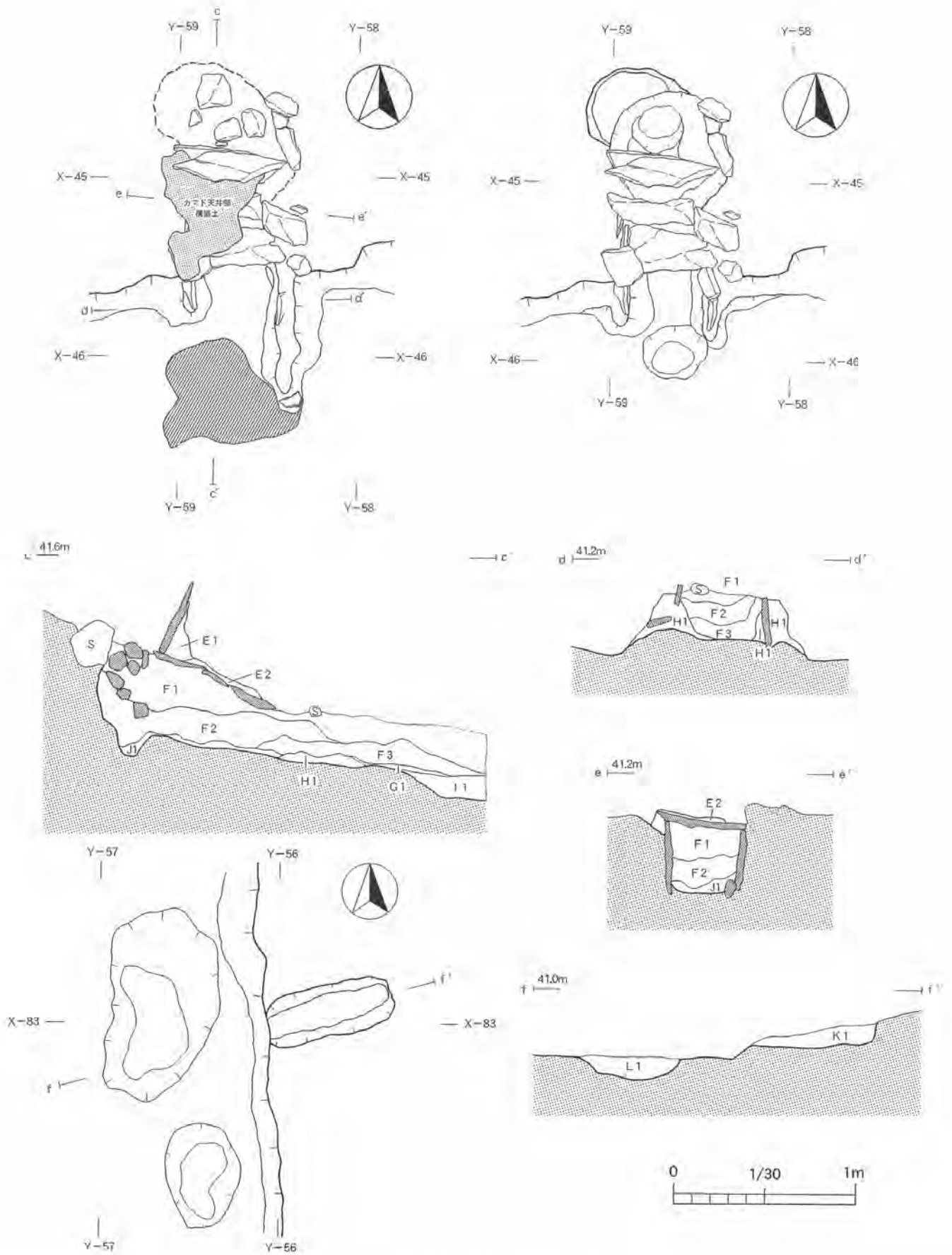
〈時 期〉 不明



第17図 SI1011平面図 (貼床面)・土層断面図



第18图 SI1011平面图(構築面)·柱穴土層断面图



第19図 SI1011北・東カマド平面図・土層断面図



## SI1011

A1	砂壤土	(10YR2/1)	砂壤土粒(10YR4/3)1%	砂質 疎	流入土
A2	砂壤土	(10YR1/1)	砂壤土粒(10YR4/3)1%	砂質 疎	流入土
B1	砂壤土	(10YR2/2)	砂壤土粒(10YR4/4)1%	砂質 疎	地山崩落土
B2	砂壤土	(10YR4/2)	砂壤土塊(10YR5/4)5%		地山崩落土
C1	砂壤土	(10YR4/3)	砂壤土塊(10YR5/4)40%	やや粘質 やや密	貼床構築土
D1	砂壤土	(10YR3/2)		やや粘質 疎	石抜き取り痕埋土
D2	砂壤土	(10YR3/1)	砂壤土粒(10YR3/2)3%	砂質 疎	石抜き取り痕埋土

## SI1011 北側カマド

E1	砂壤土	(10YR2/1)	砂壤土塊(10YR5/4)1%	砂質 やや密	
E2	砂壤土	(10YR5/5)	砂壤土塊(10YR1/1)1%	やや粘質 やや密	
F1	砂壤土	(10YR3/3)	砂壤土粒(10YR5/4)1%	砂質 疎	
F2	砂壤土	(10YR5/3)	砂壤土粒(10YR2/1)1%	砂質 疎	
G3	砂壤土	(10YR3/2)	砂壤土粒(10YR5/4)1%	砂質 疎	カマド構築土の崩落
H1	砂壤土	(10YR2/2)	砂壤土粒(7.5YR4/5)1%	砂壤土粒(10YR5/4)1%	焼土面
I1	砂壤土	(10YR5/5)	砂質 やや密		カマド袖土
J1	砂壤土	(10YR4/3)	砂壤土塊(10YR5/4)40%	砂質 疎	貼床土
K1	砂壤土	(10YR3/4)	砂壤土粒(10YR5/5)3% (10YR1/1)1%	砂質 疎	流入土

## SI1011 東側カマド

K1	砂壤土	(10YR2/2)	砂壤土粒(10YR5/5)1%	砂質 疎	煙道埋土
----	-----	-----------	-----------------	------	------

## SI1011 P-2

L1	砂壤土	(10YR2/1)	砂壤土粒(10YR1/1)1%	やや粘質 疎	柱痕
M1	砂壤土	(10YR3/2)	砂壤土粒(10YR5/4)1%	砂質 疎	根固土
M2	砂壤土	(10YR3/3)	砂壤土粒(10YR5/4)1%	砂質 疎	根固土

## SI1011 P-3

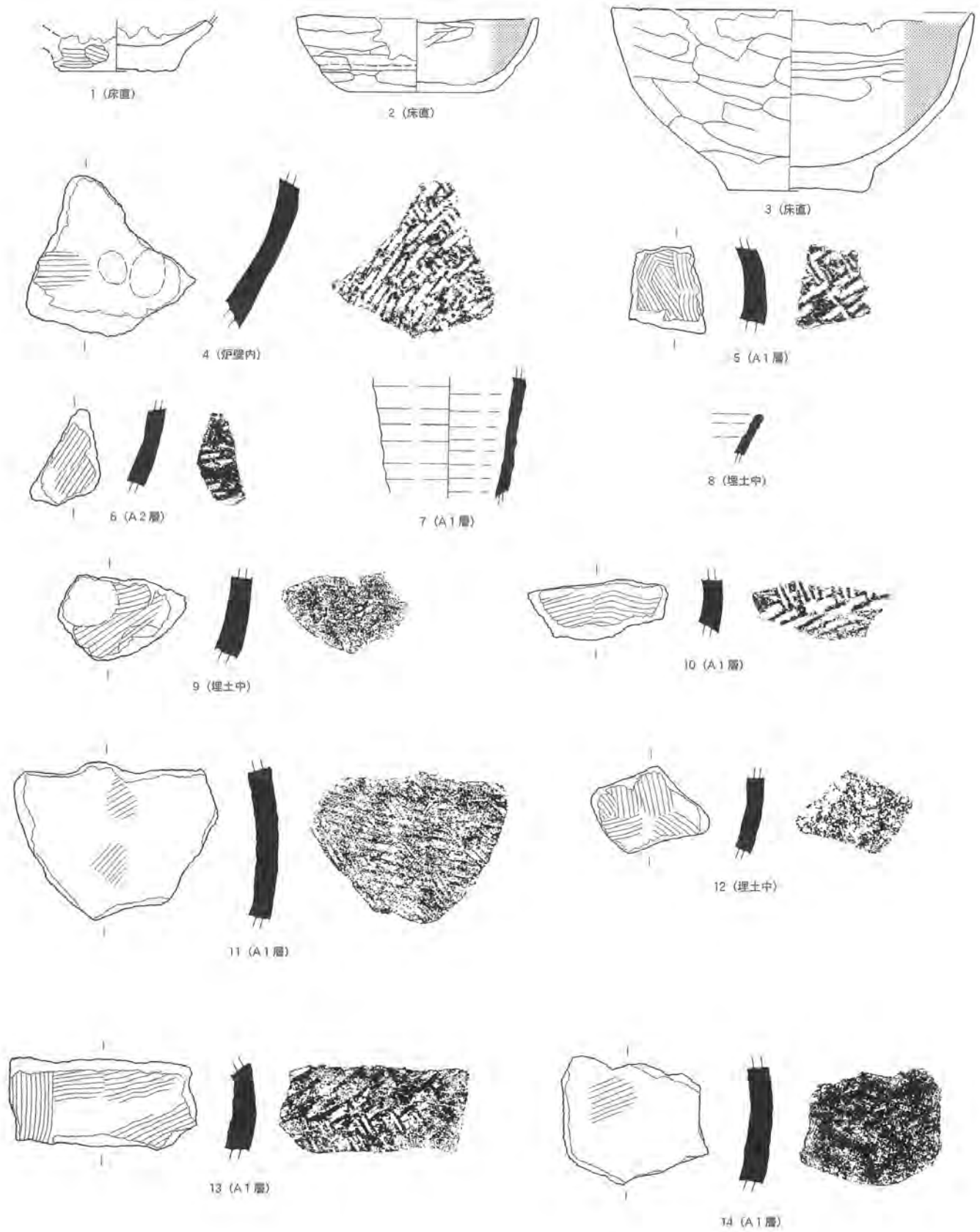
N1	砂壤土	(10YR3/1)	砂壤土粒(10YR5/5)1%	砂質 疎	
----	-----	-----------	-----------------	------	--

## SI1011 P-4

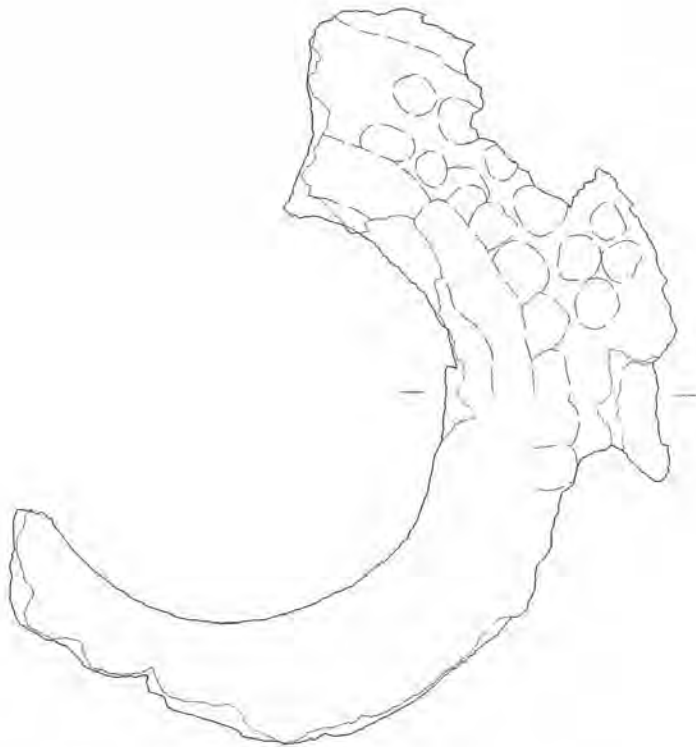
O1	砂壤土	(10YR3/3)	砂壤土粒(10YR5/5)1% 炭化物粒(10YR2/1)1%		砂質 疎
----	-----	-----------	---------------------------------	--	------

## SI1011 j-j', k-k', l-l', m-m', n-n', o-o', p-p', q-q', r-r', s-s'

C1	砂壤土	(10YR4/3)	砂壤土塊(10YR5/4)40%	やや粘質 やや密	貼床構築土
----	-----	-----------	------------------	----------	-------



第20図 SI1011出土遺物



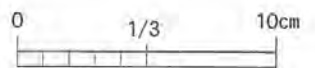
15 (埋土中)



16 (埋土中)



17 (埋土中)



第21図 SI1011出土遺物

### SK1005土坑（第23、24図）

＜検出状況＞ A区南東端、Ⅶ層上面で検出する。SI1004を切る。

＜規模・形態＞ 3.0×2.88mの隅丸方形である。壁は南西、南東側は直立し、北東、北西壁は上半部が外傾ぎみとなり、下半部が直立する。深さは確認面から1.06mである。底部は平坦である。長軸はN-30°-Eである。

埋土は、黒～黒褐色砂壤土を基本とするA、B、C、D層に大別され、さらにA層は4層に小別される。各層ともに、わずかに混入土を含む。

＜出土遺物＞ 1～7は土師器、8は須恵器である。

1～3、5～7は長胴甕、4は壺である。

1は完形であり、口径18.7、器高30.5、底径7.5cmである。口縁部は緩く外反し、口唇部は面取りされ角張っている。頸部に段をもつ。胴部は緩く膨らみながら立ち上がり、中央に最大径をもつ。底部には木葉痕が見られる。器面調整は、口縁～頸部はヨコナデ、胴部は外面が弱いヘラナデ、内面はハケ目で整形される。

2は完形であり、口径16.0、器高27.0、底径8.5cmである。口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部は先細りの丸縁である。胴部は緩く膨らみながら立ち上がり、胴部上半に最大径をもつ。器面調整は、口縁～頸部はヨコナデ、胴部外面は強いヨコナデ、内面はハケ目で整形される。底部外面は剥離する。

3は口縁～胴部にあたり、口径が19.5cmである。口縁部と胴部の境が不明瞭であり、口唇部は丸縁である。器面調整は、口縁部がヨコナデ、胴部外面は強いヘラナデ、内面はハケ目が施される。

4は壺の底部と考えられる。底径は6.1cmである。胴部の立ち上がりが緩く、底部には木葉痕が見られる。器面調整は、外面は強いヘラナデ、内面はハケ目で整形される。

5は底部であり、径7.5cm平坦であり、安定している。側面は強いヘラナデ、内面はヘラナデとハケ目で整形される。

6は胴部下半～底部である。底径は6.3cmを測り、木葉痕がある。器面調整は、胴部外面は強いヘラナデ、内面はハケ目で整形される。

7は胴部下半～底部である。底径は6.8cmを測り、平坦である。器面調整は、胴部内外面ともに強いヘラナデで整形されている。

8は胴部と考えられる。外面には叩目が見られる。内面は、ヘラナデで整形される。

＜時期＞ 奈良時代

### SK1006土坑（第22図）

＜検出状況＞ A区南端、Ⅶ層上面で検出する。SX1007を切る。

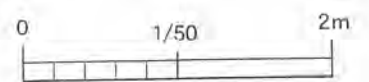
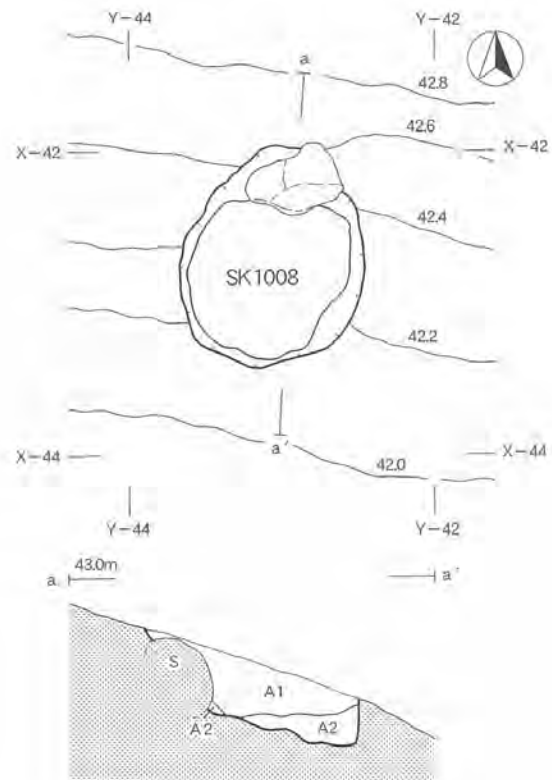
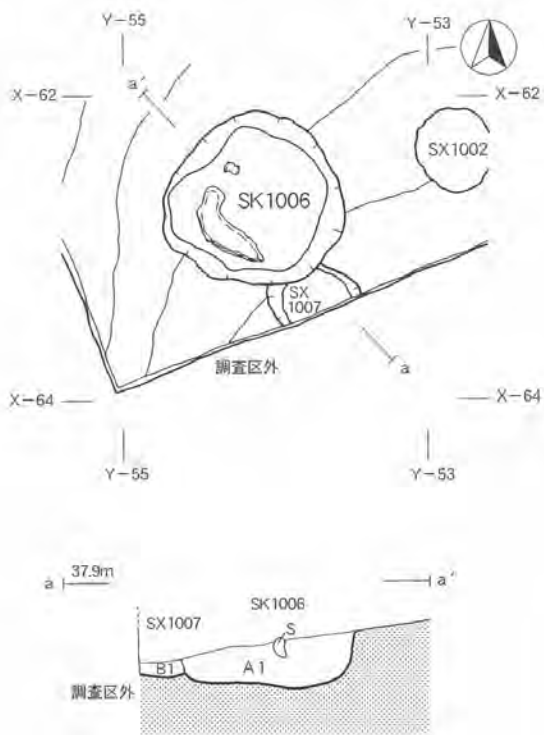
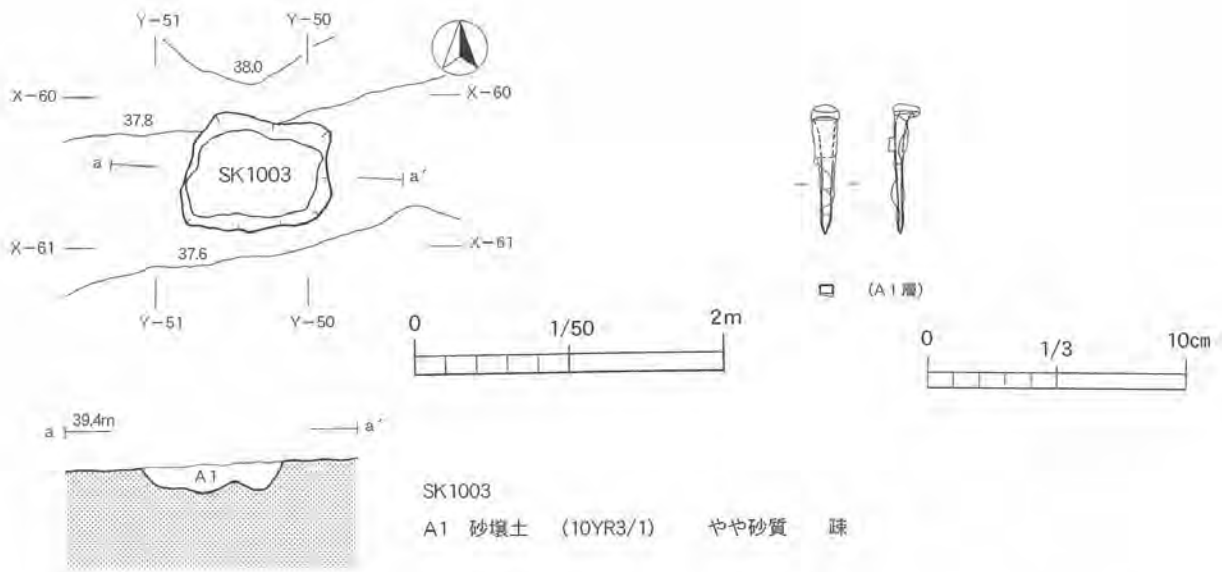
＜規模・形態＞ 径1.2mの不整形円形を呈し、壁はほぼ直立し、底面は平坦である。

埋土は、黒褐色砂壤土を基本とする単一層である。炭化物粒をわずかに含む。

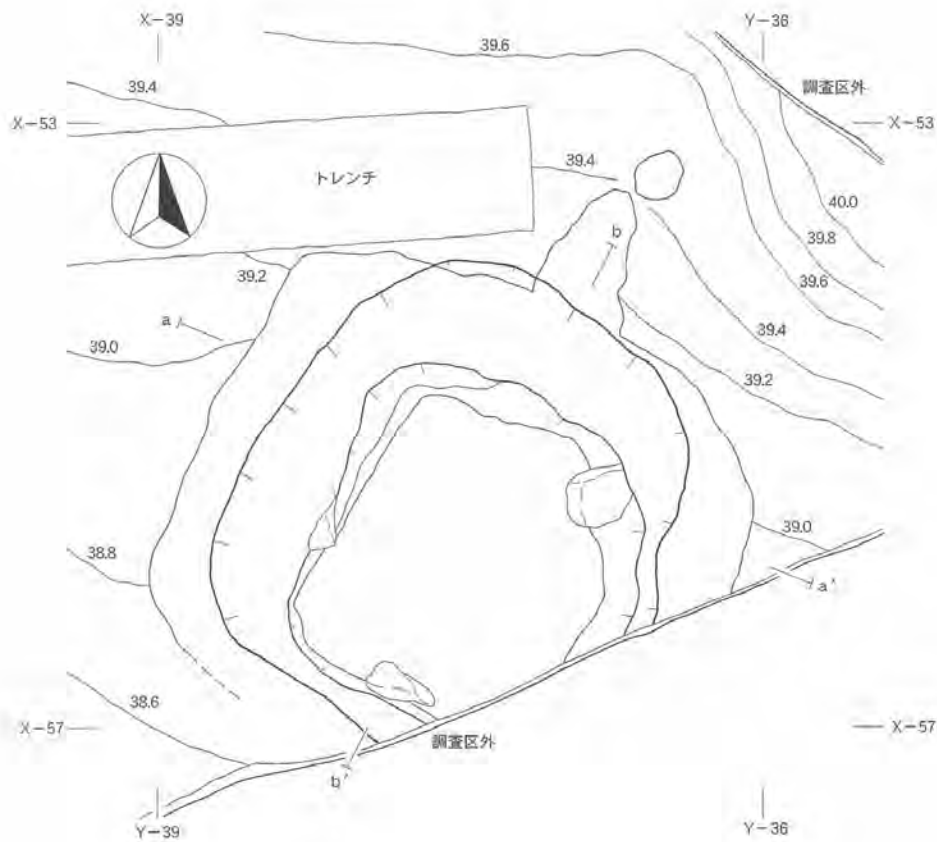
＜出土遺物＞ 遺構底面で人骨を確認する。脆弱であり、原形を留めていない。埋土から白菌が出土する。

＜時期＞ 不明

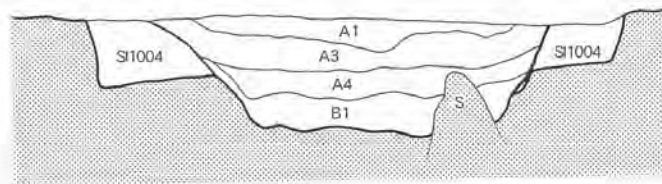




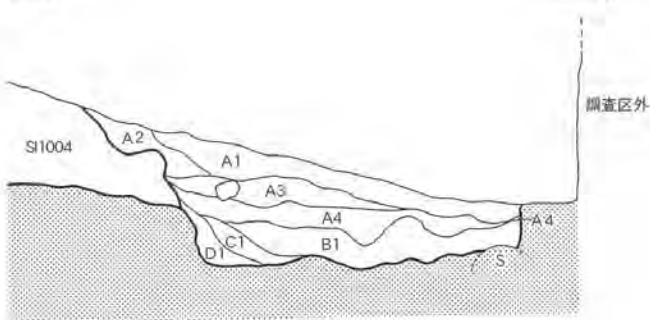
第22図 土坑不明遺構平面図・土層断面図・出土遺物



a 39.4m a'

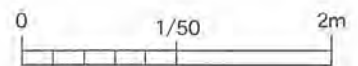


b 40.0m b'

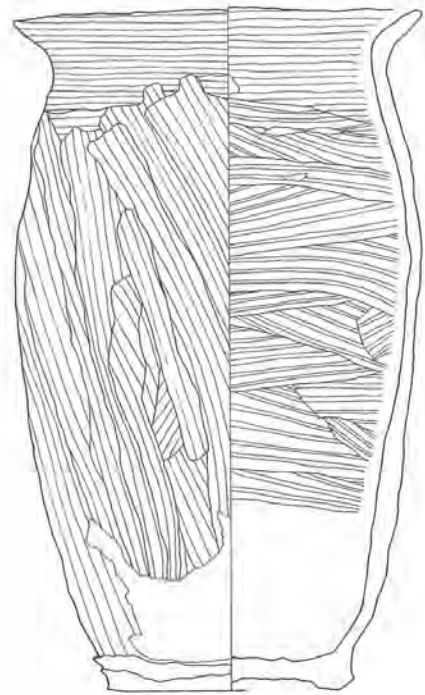
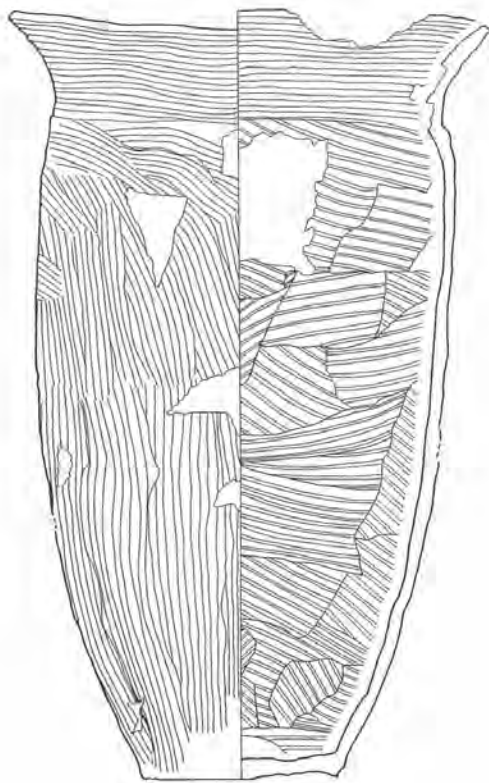


SK1005

A1	砂壤土	(10YR2/1)	砂壤土粒(10YR4/3)1%	砂質 疎
A2	砂壤土	(10YR3/2)	砂壤土粒(10YR4/3)1%	砂質 疎
A3	砂壤土	(10YR2/1)	砂質 疎	
A4	砂壤土	(10YR3/1)	砂質 疎	
B1	砂壤土	(10YR2/1)	砂壤土粒(10YR4/4)1%	やや粘質 やや密
C1	砂壤土	(10YR2/2)	砂質 疎	
D1	砂壤土	(10YR3/2)	砂壤土粒(7.5YR4/3)1%	砂質 疎



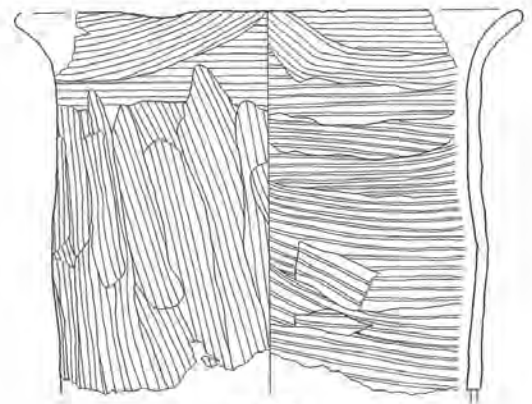
第23図 SK1005平面図・土層断面図



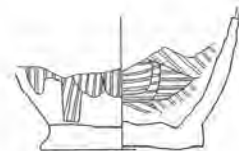
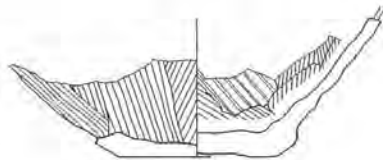
2 (A4層)



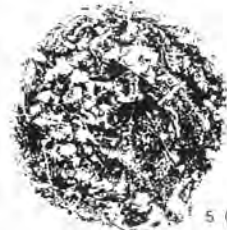
1 (B1層)



3 (A4層)



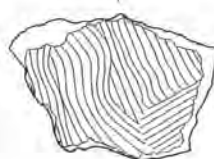
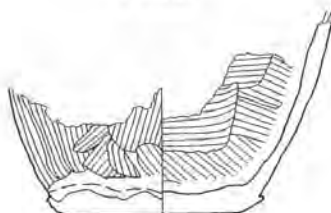
4 (A4層)



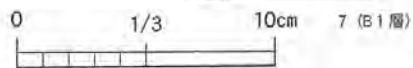
5 (B1層)



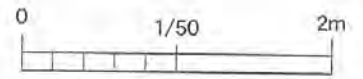
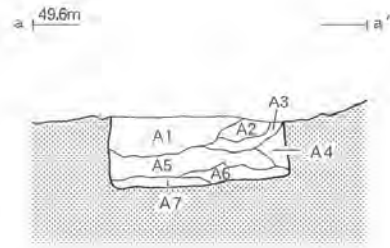
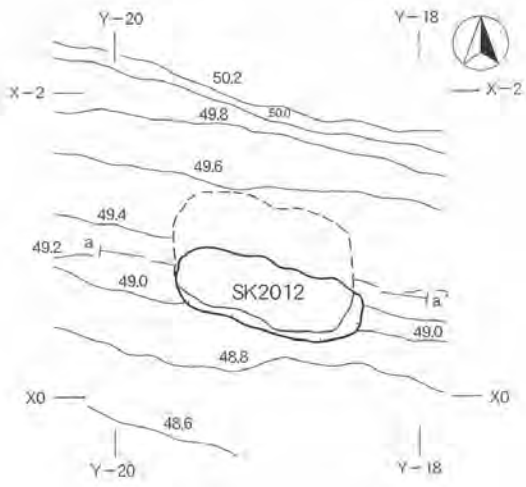
6 (B1層)



8 (A4層)



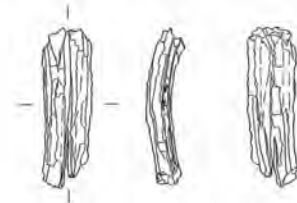
第24図 SK1005出土遺物



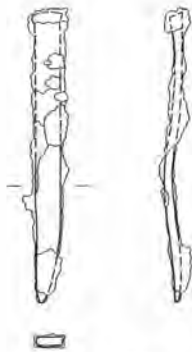
1 (床直)



2 (A4層)



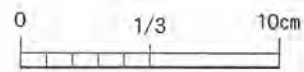
3 (床直)



4 (床直)



5 (床直)



第25図 SK2012平面図・土層断面図・出土遺物



#### SK1008土坑 (第22図)

<検出状況> A区中央部、Ⅶ層上面で検出する。

<規模・形態> 径1.3m、長幅差の少ない楕円形を呈する。壁は、北壁には地山包含の花崗岩が露出し、南壁は直立する。底面にはわずかに凹凸がある。長軸方位はN-10°-Eである。

埋土は、暗褐～灰黄褐色土を基本とするA層であり、焼土粒の有無から、2層に小別される。A1層は焼土粒をわずかに含む。

<出土遺物> なし

<時期> 不明

#### SK2012土坑 (第25図)

<検出状況> B区平場の北側縁辺部、Ⅶ層上面で検出する。

<規模・形態> 1.3×0.8mの楕円形を呈する。壁は、北壁が外に膨らむよう袋状に掘り込まれ、それ以外の壁は直立する。底面は平坦である。長軸方位はN-78°-Wである。

埋土は、褐灰～鈍黄橙色土を基本とするA層であり、色調と土質の差違から7層に小別される。各層とも境界が明瞭であり、人為的な埋め戻しと考える。遺構内から馬臼歯が出土しており、馬墓と考える。

<出土遺物> 1は缶の底部と考えられる。2は鉄製品で側縁を折り返しており、重量は1.6gである。3は馬臼歯である。4は鉄釘であり、重量は22.3gである。5は陶製品であり、把手のような形状を示す。

<時期> 出土遺物から近代頃と考える。

#### SK2013土坑 (第26図)

<検出状況> B区平場の北側縁辺部、Ⅶ層上面で検出する。SK2012の西側に位置する。

<規模・形態> 1.6×0.5mの不整楕円形を呈する。壁は、北壁が袋状に掘り込まれ、南壁は外反し、東壁、西壁は直立する。底面は南側に緩く傾斜する。長軸方位はN-87°-Wである。

埋土は、黒褐～鈍黄褐色を基本とするA層であり、色調と土質の差違から6層に小別される。各層とも色調が漸移的で、色調、土質が類似する。

<出土遺物> なし

<時期> 不明

#### SK2014土坑 (第26図)

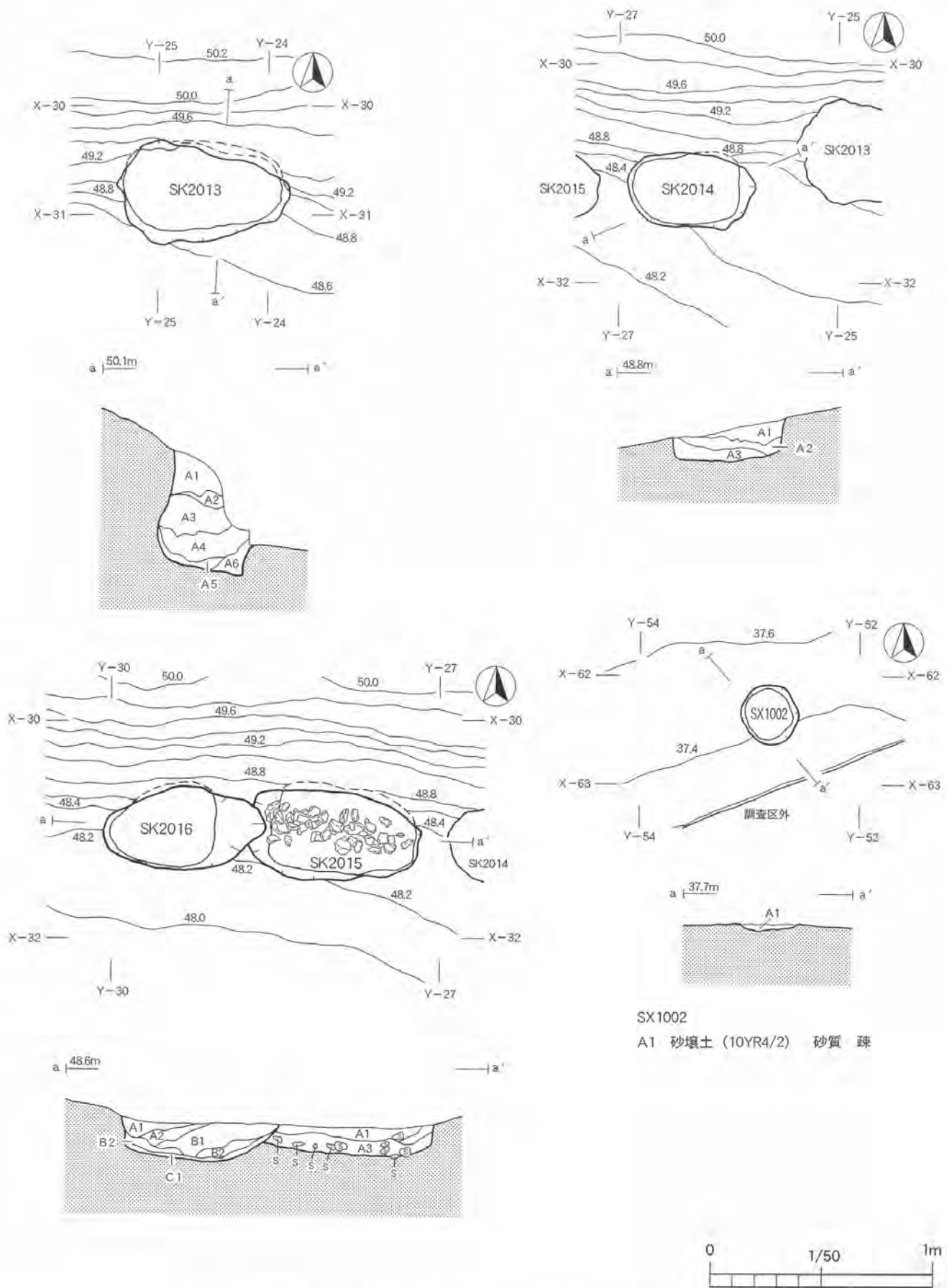
<検出状況> B区平場の北側縁辺部、Ⅶ層上面で検出する。SK2013の西側に位置する。

<規模・形態> 1.7×0.7mの楕円形を呈する。壁は、北壁の一部が袋状に膨らみ、それ以外の壁は直立する。底面はほぼ平坦である。長軸方位はN-87°-Wである。

埋土は、黒褐～鈍黄褐色土を基本とするA層であり、色調と土質の差違から3層に小別される。

<出土遺物> なし

<時期> 不明



第26図 土坑、不明遺構平面図・土層断面図

## SK2012

A1	砂壤土	(10YR5/2)	砂壤土粒(10YR5/3)1%	やや粘質 疎
A2	砂壤土	(10YR6/4)	砂壤土粒(10YR5/3)2%	やや粘質 疎
A3	砂壤土	(10YR4/1)	砂壤土塊(10YR5/3)3%	砂質 疎
A4	砂壤土	(10YR6/2)	やや粘質 疎	
A5	砂壤土	(10YR4/1)	砂壤土塊(10YR5/3)1%	砂質 疎
A6	砂壤土	(10YR5/2)	砂壤土粒(10YR5/3)1%	砂質 疎
A7	砂壤土	(10YR6/3)	砂壤土粒(10YR5/3)1%	砂質 疎

## SK2013

A1	砂壤土	(10YR5/2)	砂質 疎	
A2	砂壤土	(10YR6/3)	砂質 疎	
A3	砂壤土	(10YR5/3)	砂質 疎	
A4	砂壤土	(10YR4/2)	砂壤土粒(10YR3/2)1%	砂質 疎
A5	砂壤土	(10YR3/1)	砂壤土粒(10YR2/1)1%	砂質 疎
A6	砂壤土	(10YR5/2)	砂壤土粒(10YR2/1)1%	砂質 疎

## SK2014

A1	砂壤土	(10YR3/1)	砂壤土粒(10YR5/4)1%	砂質 疎
A2	砂壤土	(10YR4/3)	小礫 1%	砂質 疎
A3	砂壤土	(10YR4/1)	砂質 疎	

## SK2015

A1	砂壤土	(10YR5/4)	砂壤土粒(10YR6/3)40%	砂質 疎
A2	砂壤土	(10YR5/4)	砂質 疎	
A3	砂壤土	(10YR5/2)	砂質 疎	

## SK2016

A1	砂壤土	(10YR5/3)	砂壤土粒(10YR6/2)20%	砂質 疎
A2	砂壤土	(10YR5/1)	砂壤土粒(10YR5/1)30%	砂質 疎
B1	砂壤土	(10YR5/4)	砂壤土粒(10YR4/2)5%	砂質 疎
B2	砂壤土	(10YR5/1)	砂壤土粒(10YR5/4)1%	砂質 疎
C1	砂壤土	(10YR4/1)	砂壤土粒(10YR5/4)5%	砂質 疎

#### SK2015土坑 (第26図)

〈検出状況〉 B区平場北側縁辺部、Ⅶ層上面で検出する。SK2016に切られる。

〈規模・形態〉 1.5×0.9mの楕円形を呈する。壁は、北壁が袋状に掘り込まれ、西壁は緩く立ち上がり、それ以外の壁は直立する。底面は平坦である。長軸方位はN-88°-Eである。底面でコブシ大の亜角礫がまとまって確認され、人為的に入れ込まれたものとする。

埋土は、灰黄～鈍黄褐色土を基本とするA層であり、色調と土質の差違から3層に小別される。

〈出土遺物〉 なし(亜角花崗岩)

〈時期〉 不明

#### SK2016土坑 (第26図)

〈検出状況〉 B区平場北側縁辺部、Ⅶ層上面で検出する。SK2015を切る。

〈規模・形態〉 1.5×0.8mの不整楕円形を呈する。壁は北壁が袋状に掘り込まれ、東壁が緩く立ち上がり、それ以外は直立する。底面は中央部がわずかに窪む。長軸方位はN-86°-Wである。

埋土は、褐灰～鈍黄褐色土を基本とし、3層に大別でき、さらにA層は2層、B層は2層に小別される。層の境界が明瞭である。

〈出土遺物〉 なし

〈時期〉 不明

#### SX1002 (第26図)

〈検出状況〉 A区南端、Ⅶ層上面で検出する。

〈規模・形態〉 径0.56mの円形を呈する。確認面から底面までの深さは0.05mである。

埋土はⅦ層、灰黄褐色土を基本とする単一層である。

〈出土遺物〉 なし

〈時期〉 不明

#### SX1007 (第22図)

〈検出状況〉 A区南端、Ⅶ層上面で検出する。SKP1006に切られる。一部調査区外に伸びる。

〈規模・形態〉 径0.6m以上あると考えられる。確認面から底面までの深さは0.1mである。

埋土は、黒色砂壤土を基本とする単一層である。

〈出土遺物〉 なし

〈時期〉 不明

#### 石 積 (写真図版53ページ)

県埋文センターの調査区内の石積と一連のものであり、総延長は東西に約125m、高さは約1～2mを測る。石積の並びはほぼ東西方向に合致し、平面配置は弧状を呈する。この弧状配置は沢地形に立地することに由来すると考えられる。工法は、基礎として下部に直径1m大の花崗岩を置き、その上に直径20～50cmの花崗岩を積み上げている。積まれている石は殆どが花崗岩であり、風化により脆くなっている。



## 遺構外出土遺物（第27、28、29、30、31図）

1～9は縄文土器である。全て破片資料であり、時期は不明である。

1はA区南端から出土する。深鉢の口縁部であり、横位平行沈線が施されている。

2はA区中央から出土する。深鉢胴部とみられる。地文の上に弧状沈線が施されている。

3はA区南端から出土する。深鉢胴部であり、器壁は薄い。器面には地文がみられ、摩滅する。

4はA区中央から出土する。深鉢胴部であり、結束縄文を地文としている。

5はA区南端から出土する。深鉢胴部であり、縦位地文のうゑに横位沈線が施文される。

6はA区中央部西側から出土する。深鉢胴部であり、地文に縦位波状沈線を施文し、その後、波状沈線上を弱くナデ付けている。

7はA区中央部から出土する。深鉢胴部であり、弧状の平行沈線が施文され、沈線のあいだを擦り消している。

8はA区南端から出土する。深鉢胴部であり、刻み目のある隆帯が貼り付けられている。

9はA区中央部西側から出土する。深鉢の底部であり、網代痕がみられる。

10～14は石製品である。

10は無茎鏃であり、正三角形で基部が浅く抉入する。

11は有茎鏃であり、二等辺三角形で基部は凸形を呈する。

12は有茎石鏃である。黒曜石製で鋭角の二等辺三角形を呈する。側縁は、調整剥離と基部から先端部に向かう大きい剥離により作り出されている。基部先端部に自然面を残す。

13は磨製石斧の刃部である。背面の側縁部が二次加工されている。

14は板状石製品である。両面に擦痕がみられ、側縁は平らに面取りされている。

15～30は土師器である。

15、16、26は甕底部である。15、16ともにA区南端から出土する。26はA区中央部の西側から出土する。

15の器面調整は、内面、側面はヘラナデで整形され、底部に木葉痕が残る。

16の器面調整は、内面は剥離し、外面はヘラナデで整形され、底部に木葉痕が残る。

26の器面調整は、外面はヘラナデで整形され、内面は、器壁が剥離する。

17、18、24、25は甕口縁部である。17、18はA区中央部西側から、24、25はA区南端から出土する。

17は、口唇部が面取りされ、器面調整はヨコナデに加えてヘラナデで整形されている。

18、24、25は、内外面をヘラナデで整形している。

19～23、27～30は坏である。

19は胴部中央に段を有するもので、内外面にミガキが施され、内面は黒色に処理されている。

20はミガキが施された内黒坏である。

21は胴部に段を有する内黒坏である。器面調整は内外面ともにミガキが施されている。

22は底部にあたり、ヘラ切り痕がみられ、無調整である。

23は内黒のロクロ坏であり、底部にはヘラ切り痕が見られ、無調整である。

29は内黒の坏であり、胴部に段を有する。器面調整は内面はミガキ、外面はヘラナデで整形されている。

27、28、30は坏底部であり、回転糸切り痕がみられる。30は底部外面においてヘラナデが施されている。

31～42は須恵器である。

31、32、34、35、37～42は甕、33は壺、36は坏である。

31、32は調査区廃土、33、37～41はA区中央部の西側、35、36、42はA区南端部、34はA区中央部の東側から出土する。

31、34、35、37～42は甕胴部にあたり、器面調整について、31、34、41は外面に平行叩目、内面はヘラナデで調整されている。42は、外面に平行叩目がみられ、内面調整は不明である。

35は、外面が平行叩目、内面は不明である。

37～40は、外面は平行叩目、内面は弱いヘラナデと、指圧痕とみられる微かな凹凸が観察できる。

32は返しのある口縁部であり、口縁部に波状沈線の頂部線が見られる。器面調整は内外面ともヨコナデである。

33は壺胴部であり、肩部に近い部分にあたるものと考えられる。器面調整は、外面は自然釉が付着し、内面はロクロ整形されている。

36は坏底部であり、底径は6.0cm、回転糸切りされ、無調整である。

43、44は羽口である。ともに先端部に鉄滓が凝着する。

43は、A区中央部西側から出土する。残存長9.1、外径7.1、内径3.6cmである。外面はヘラナデで整形されている。

44は、A区中央部西側から出土する。残存長11.5、外径7.8、内径3.0cmである。

45～52は鉄製品である。45はA区北端部、46～48はA区中央部東側、49はA区南端部、50、52はA区中央、51はA区中央部西側から出土する。

45は板状で、側縁は直角に交わる。

46は側縁が折り曲げられている。

47は角釘である。

48はC字形を呈し、重量は9.9gである。

49は角釘であり、木片のようなものが付着する。重量は5.6gである。

50は釣針で、重量は4.9gである。

51は板状であり、直線的な側縁が見られる。

52は角釘であり、重量は2.3gである。

53～66は鉄滓である。下記は鉄滓の重量表である。

No.	出土地点	層位	重量 (g)
53	廃土中	—	190.8
54	廃土中	—	709.4
55	A区中央	IV層上面	48.2
56	A区中央	IV層上面	264.8
57	A区中央	IV層上面	29.5
58	A区中央西側	IV層上面	40.2
59	A区中央	IV層上面	52.0

No.	出土地点	層位	重量 (g)
60	A区中央	IV層下面	52.5
61	A区南端部	IV層上面	16.9
62	A区中央西側	IV層上面	289.2
63	A区中央西側	IV層上面	383.8
64	A区中央東側	IV層上面	13.1
65	A区南端部	IV層上面	4.5
66	B区平坦面中央	IV層下面	93.2

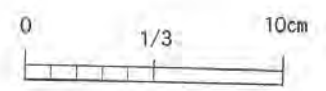
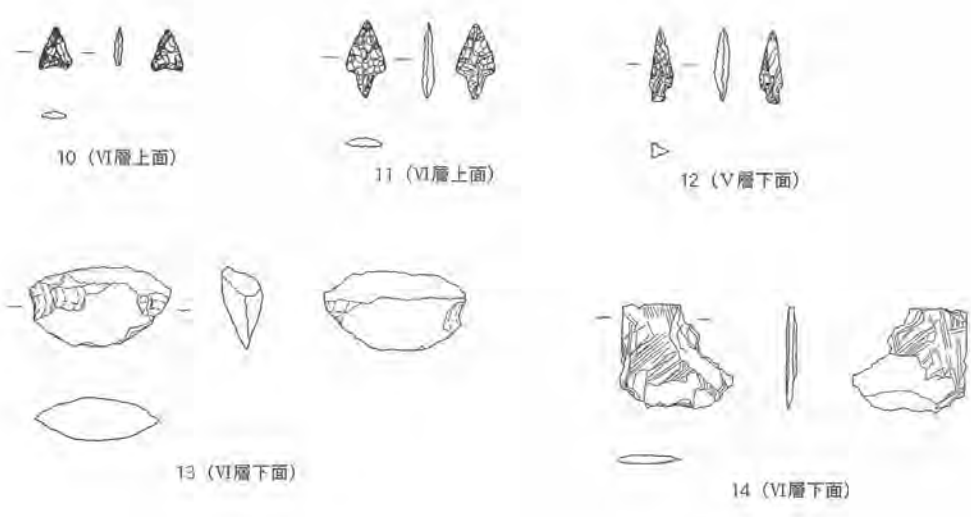
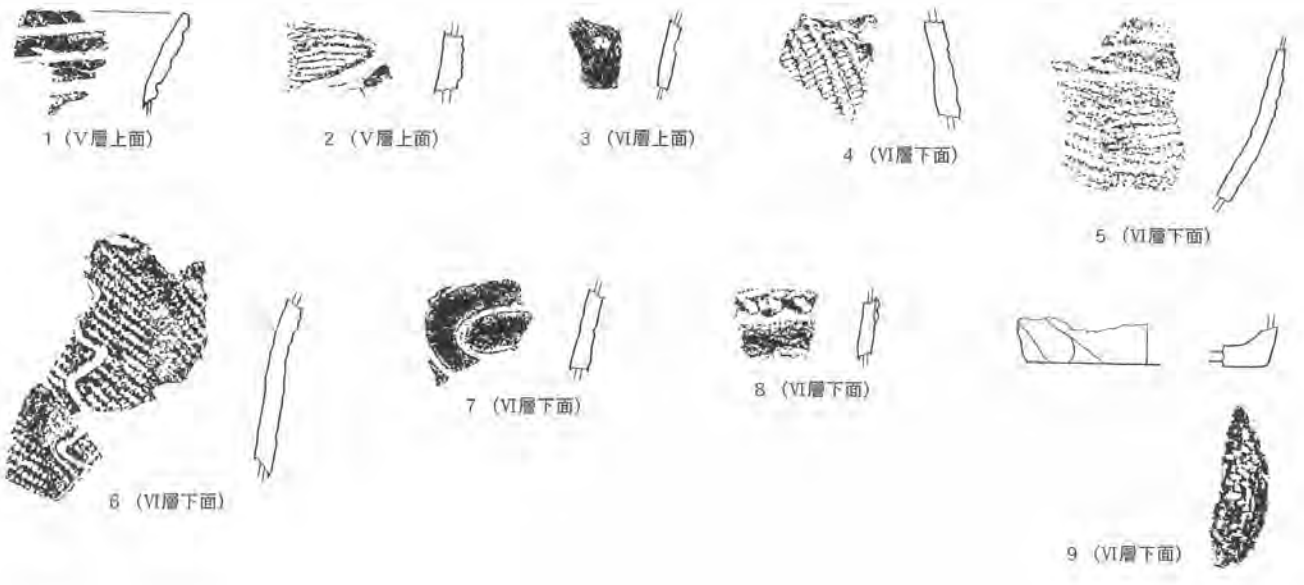
67は馬臼歯である。A区中央から出土する。

68、69は石製品である。

68は断面がL字形で、両面とも平滑である。A区中央から出土する。

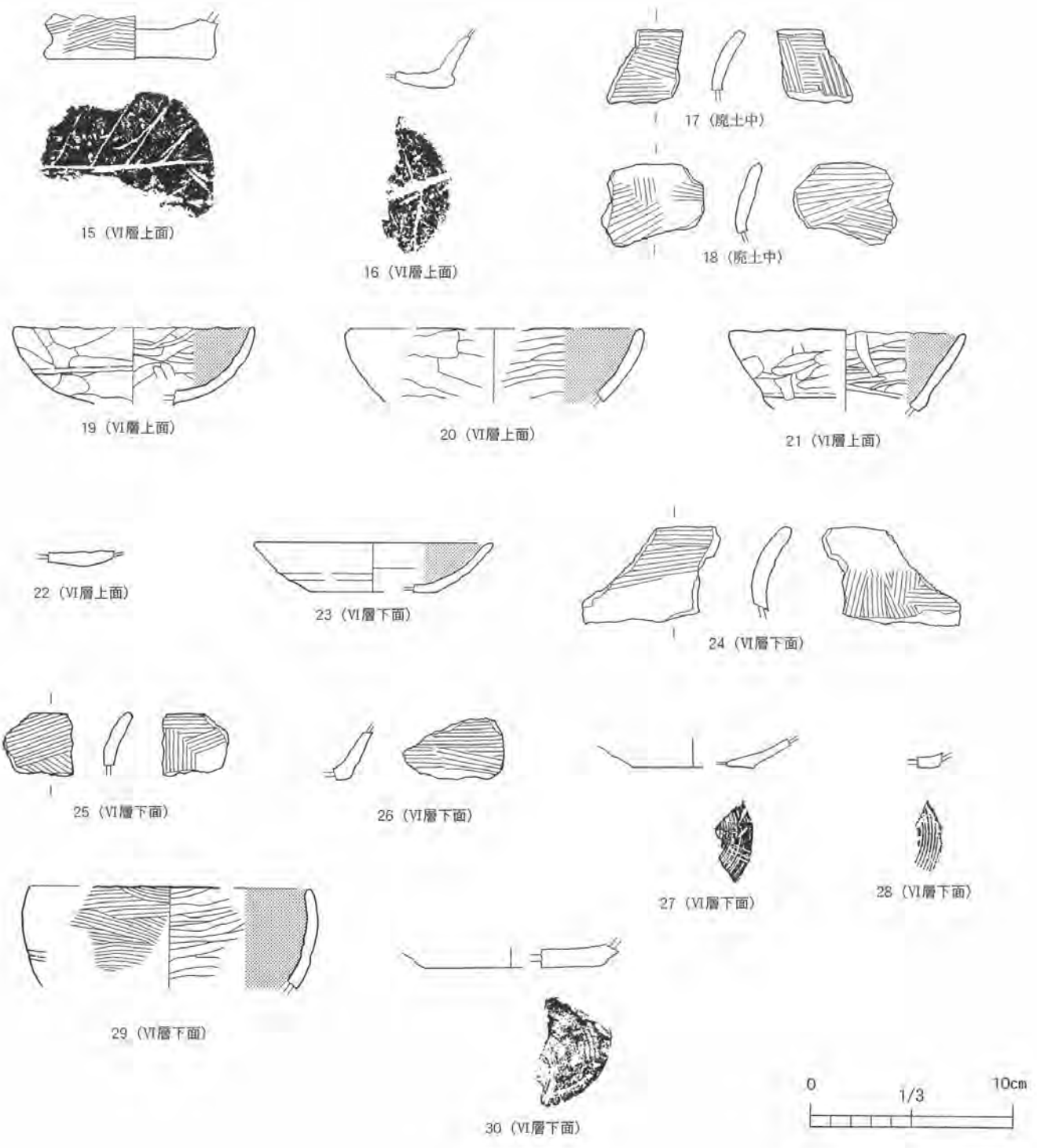
69は茶臼の下石にあたる。A区中央部西側から出土する。口径は推定で36.3、高台径29.8cmとみられる。器高は8.1cmである。

70は寛永通寶で、重量は2.8gである。A区中央部から出土する。

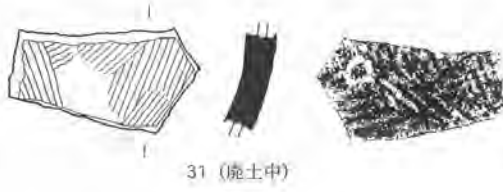


第27図 遺構外出土遺物 (1)





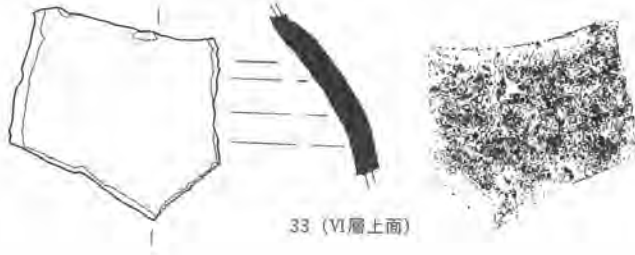
第28図 遺構外出土遺物 (2)



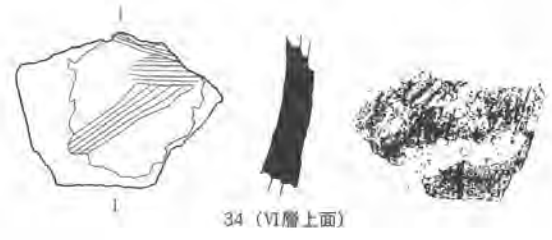
31 (鹿土中)



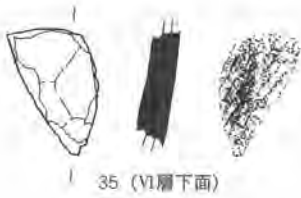
32 (鹿土中)



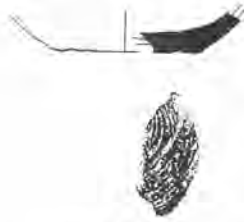
33 (VI層上面)



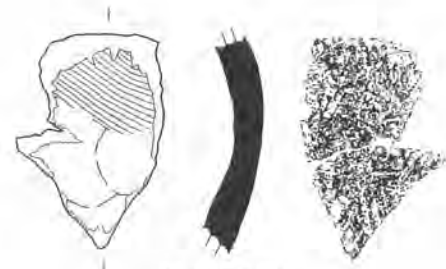
34 (VI層上面)



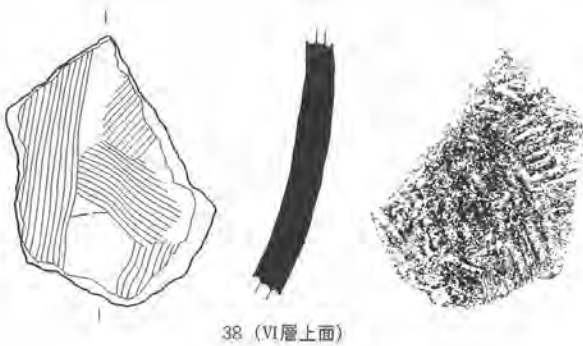
35 (VI層下面)



36 (VI層下面)



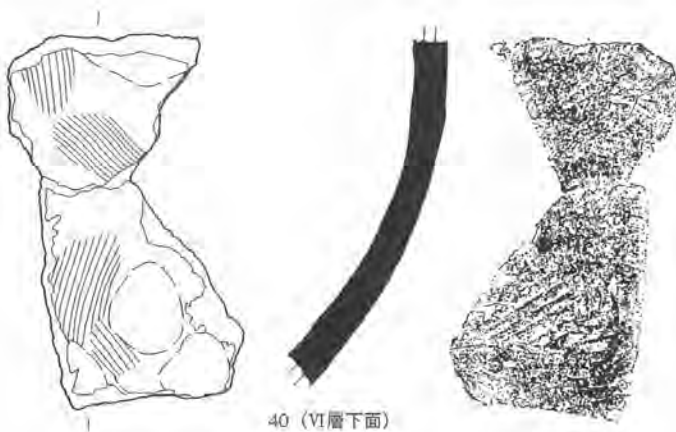
37 (VI層下面)



38 (VI層上面)



39 (VI層下面)



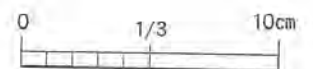
40 (VI層下面)



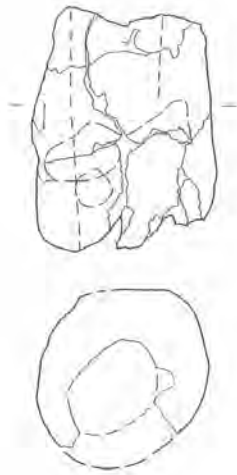
41 (VI層下面)



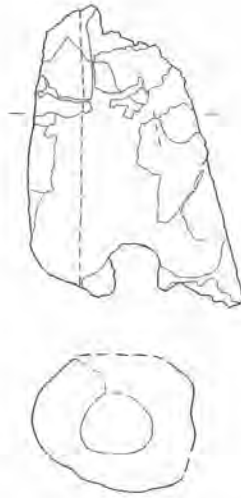
42 (VI層下面)



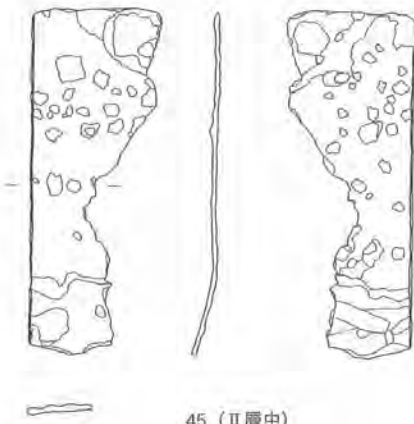
第29図 遺構外出土遺物 (3)



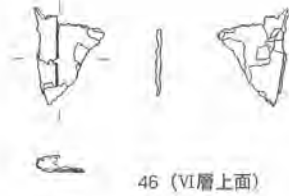
43 (VI層下面)



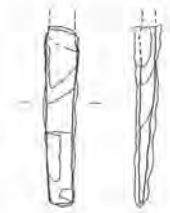
44 (VI層下面)



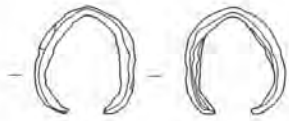
45 (II層中)



46 (VI層上面)



47 (VI層下面)



48 (VI層下面)



49 (VI層下面)



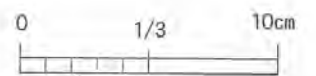
50 (VI層上面)



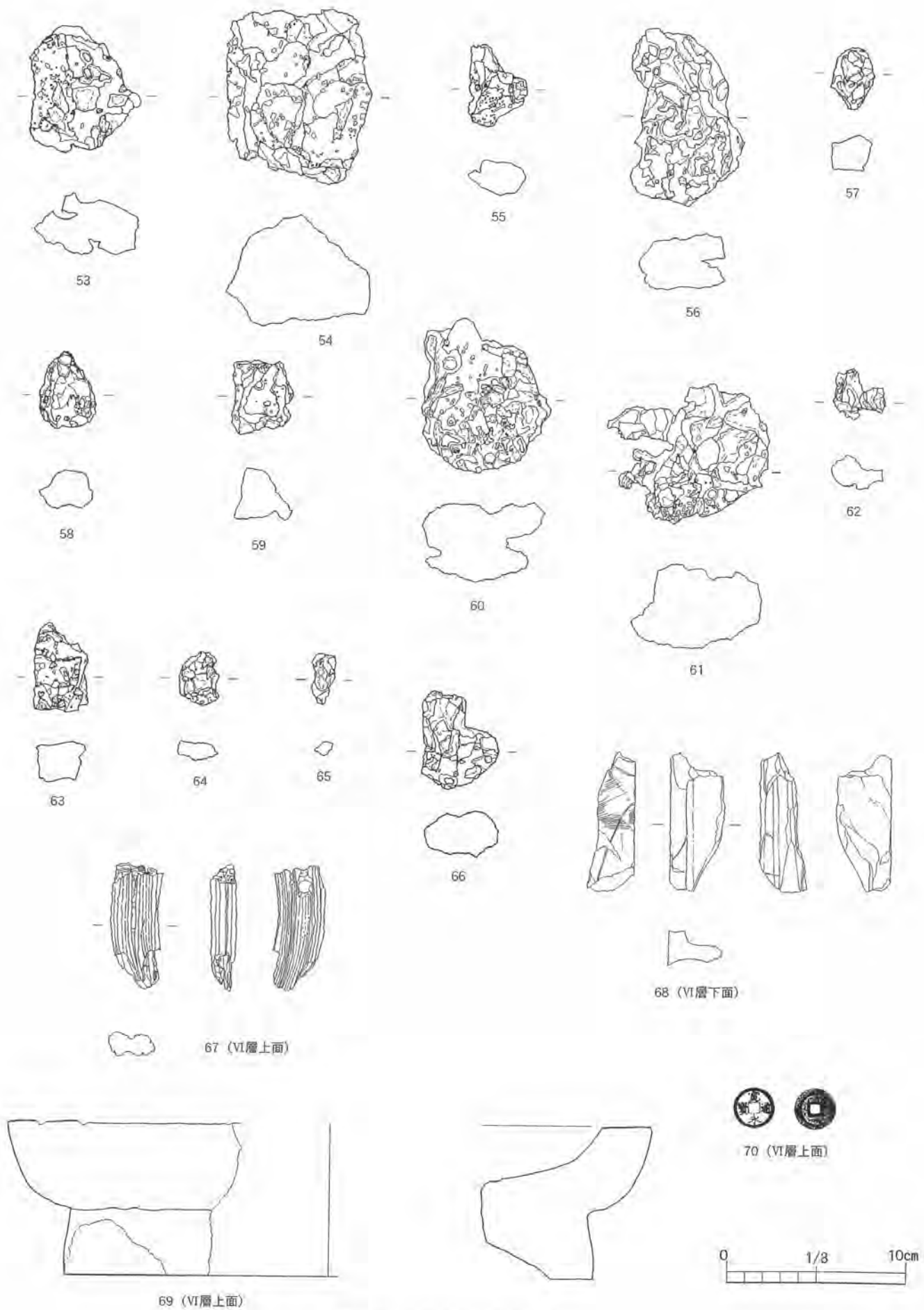
51 (VI層上面)



52 (VI層上面)



第30図 遺構外出土遺物 (4)



第31圖 遺構外出土遺物 (5)

## 調査のまとめ

宮古市内での古代集落の調査は鯉沢遺跡や、磯鶏館山遺跡、島田Ⅱ遺跡をはじめ各所で実施されているが、市内北側の黒森丘陵では山口館跡調査が面的には最も広いものである。本遺跡は中世城館跡として周知されているが、これまでの調査ではこれを遡る古代から中世までの集落跡が確認された。

今回の調査成果は、①平成8年度、9年度調査の古代集落跡範囲が東側にさらに広がることが確認されたこと、②市内では事例の少ない8世紀前半頃の竪穴住居跡が確認されたこと、があげられる。特に②について、これまで資料的に乏しかった8世紀の集落跡について多少の検討が可能となったことが成果といえる。

以下、平成11年度、12年度の調査成果について述べ、最後に平成9年度、10年度の成果も踏まえたまとめをしたい。

### ・ 竪穴住居跡について

平成11年度の調査で確認された4棟の竪穴住居跡の時期は、出土遺物からSI1001は8世紀前半の古い時期、SI1004が8世紀前半、SI1011が8世紀末葉頃と考えられる。よって、古いものから、SI1001→1004→1011という変遷が追える。ただし、SI1010は、遺物の出土がないため時期は不明である。

SI1001は平成9年度調査のSI08に次に古い住居跡と考えられる。SI08は略方形であり、SI1001は掘り方の一部を消失するものの、方形基調の掘り方と想定される。遺存状況からその規模を比較すると、長辺で、SI08が2m、SI1001が遺存する東西壁の大きさを4mを測り、規模的に約倍近くの差がある。現時点では时期的なものによる差違と考えられる。SI08の帰属時期が7世紀後半であり、その後SI1001が築かれる8世紀前半までとでは大きな時間差がある。7世紀後半～8世紀前半頃の比較資料が少なく、大きな時期差がある中での比較であるため、唐突な印象を受ける。この時間差を埋める調査事例が増えることにより、より細かい変遷を把握できるものとする。

SI1004は平成9年度調査SI04などの8世紀前半頃に比定される住居跡と同時期と考えられる。遺跡内同時期の竪穴住居跡としてはSI04、05、06、07がある。この中でSI04とSI06については、埋土の状況からSI04がSI06に先行することが確認されている。同時期であるSI1004とこれらを規模的に比較すると、SI1004が長辺で3.6mであるのに対し、SI04が6.1m、SI06は長辺で7.1m、SI05は6.1mと、ほぼ同時期でありながらも、SI04、06、05に比べSI1004は小規模である。この規模の違いについては、用途の違いや、集落または集団内における規制など、機能的そして社会的な要因が考えられる。

SI1011のカマドは、煙道部に石を用いるなど、本遺跡のこれまでの調査事例の中では特殊である。さらに形態的特長として、石を組み、粘土で目張りした煙道の上部に板状の石を立てて置いている。煙道に石を使用する例は、市内では赤前遺跡群で確認されている。この他に類似するものとして久慈市源道遺跡、中長内遺跡などで確認されている。ただし、煙道上部に立石を設ける事例は、管見では確認できなかった。

SI1010は、出土遺物がないため所属時期は不明である。しかし、本遺構からは鍛造薄片が出土し、これと近接して炭化物や還元焼成の跡とみられる円形プランが確認されている。遺構の性格については、カマドを付設しないことから、鉄生産に関する施設跡と考えられる。



また、カマドの方位について、SI1011を含めたこれら3棟は北向きにカマドを付設する。この方位が共通する理由のひとつとして、火のまわりを良くし燃焼効率を上げるべく斜面上方に向けカマドを置いたため、北向きになった可能性が考えられる。

### ・土坑について

11基確認されている。性格についてはSK1006からは人骨が出土し、SK2012からは馬臼歯が出土しており、この2基については埋葬施設としての掘り込み跡と考える。それ以外の土坑として、SK2013～2016については、掘り方の規模がSK2012とほぼ同じであり、また重複することなく列をなして並ぶ。これらのことから、SK2012と大きな時期差がなく、これとほぼ同じ埋葬目的で築かれたものとする。

### ・竪穴住居跡の出土遺物について

出土遺物が少なく、型式を把握することができないため、個別の器種同士を比較することにより特徴や帰属時期を判断した。

SI1001出土の高坏は、器面調整にミガキを用い、内黒であり、胴部外面に段を有するなどの特長から8世紀前半においても、比較的古い時期まで遡る可能性がある<sup>(註1)</sup>。同様の土器は平成9年度調査のSI08から1点出土しており、両者とも法量、形態が類似する。

SI1004出土の球胴甕は、器面調整にヘラナデとヨコナデを用いており、口唇部は平坦である。これらの特徴から8世紀前半に属するものと考えたい。これ以外に、球胴甕の出土は宮古市鯉沢遺跡第27号住居跡で確認されている。鯉沢遺跡のものと比較し、SI1004出土の球胴甕は最大径の位置が高く、肩部に最大径をもち、やや肩の張ったような器形になっている。

SI1011では、鉢、坏、甕底部が床面上から出土する。坏はヘラミガキで器面を調整し、底部は平底に近く、内黒で、胴部外面に段を有する。鉢は供膳具としては珍しく底部に木葉痕を残す。これらの時期については、平底の坏の出土から8世紀末葉頃と考えたい。また同遺構からは破片ではあるが、須恵器が比較的多く出土したことが特徴としてあげられる。器種は甕、壺、長頸壺があり器種構成は充実している。長頸壺は頸部のみの出土であり、市内では上村貝塚F-1号住居跡、磯鶏館山遺跡H09号竪穴住居跡からも出土している。

註1、2 八木光則氏にご教示いただく。口縁部の形状や型式的なことから8世紀前半古相に位置付けられる可能性を示唆頂いた。

### <参考文献>

- 岩手県立博物館 『岩手の土器』 1982
- 田村忠博 『古城物語』 1986
- 宮古市教育委員会 『宮古市埋蔵文化財調査報告書第34集 -鯉沢遺跡-』 1993
- 古代城柵官衙遺跡検討会 『特集シンポジウム 北日本における律令期の土器様相』 1993
- 宮古市教育委員会 『宮古市埋蔵文化財調査報告書第43集 -磯鶏館山遺跡-』 1995
- (財)岩手県埋蔵文化財センター 『岩手県埋蔵文化財調査報告書第310集 -山口館跡-』 1999
- (財)岩手県埋蔵文化財センター 『岩手県埋蔵文化財調査報告書第368集 -島田Ⅱ遺跡-』 2001

## 山口館跡遺跡の自然科学分析

### はじめに

山口館跡の発掘調査では、奈良・平安時代の可能性<sup>(註1)</sup>がある円形土坑が検出されている。今回の調査では、この円形土坑内から出土した骨・歯について鑑定し、本土坑の性格を考える資料とする。なお、骨の鑑定は、早稲田大学金子浩昌先生にお願いした。

### 1. 試料

試料は、SK1006の埋土から出土した骨3点である。出土状況等詳細は不明である。

### 2. 分析方法

試料を肉眼で観察し、形態的特徴から種類・部位を同定する。

### 3. 結果

結果を表1に示す。検出された骨は全て破片であり、保存状態が悪い。これら検出された骨は、全てヒト (*Homo sapiens*) に同定された。この内、1点<sup>(註1)</sup>は特徴的な形態が認められないため、部位を特定することができない。その他は、脛骨と右側第3大臼歯である。脛骨は、骨体部の破片であり、一部接合する。骨端部は認められない。右側第3大臼歯は歯根が破損し、歯冠部のみ残存する。

検出された骨と歯は同一個体の可能性がある。ただし、性別不明であり、歯の形状から成人骨に由来するものと考えられる。

表1 骨同定結果

遺構	層位	採取日	種類	部位	数量	備考
SK1006	埋土	990917	ヒト	脛骨	12	破片、一部接合する
SK1006	埋土	990927	ヒト	右側下顎第3大臼歯	1	破片
SK1006	埋土	990927	ヒト	不明	1	破片

(株) ニッテツファインプロダクツ釜石文化財  
保存処理センター  
パリノ・サーヴェイ株式会社

註1 SK1006土坑の時期については、調査の結果、骨片以外の遺物が遺構内から出土せず、明確な帰層時期は判断できなかった。よって上記の奈良、平安時代頃という遺構の年代記述は正確なものではなく、本文をもって訂正いたしたい。

写 真 图 版







調査区遠景（西から）

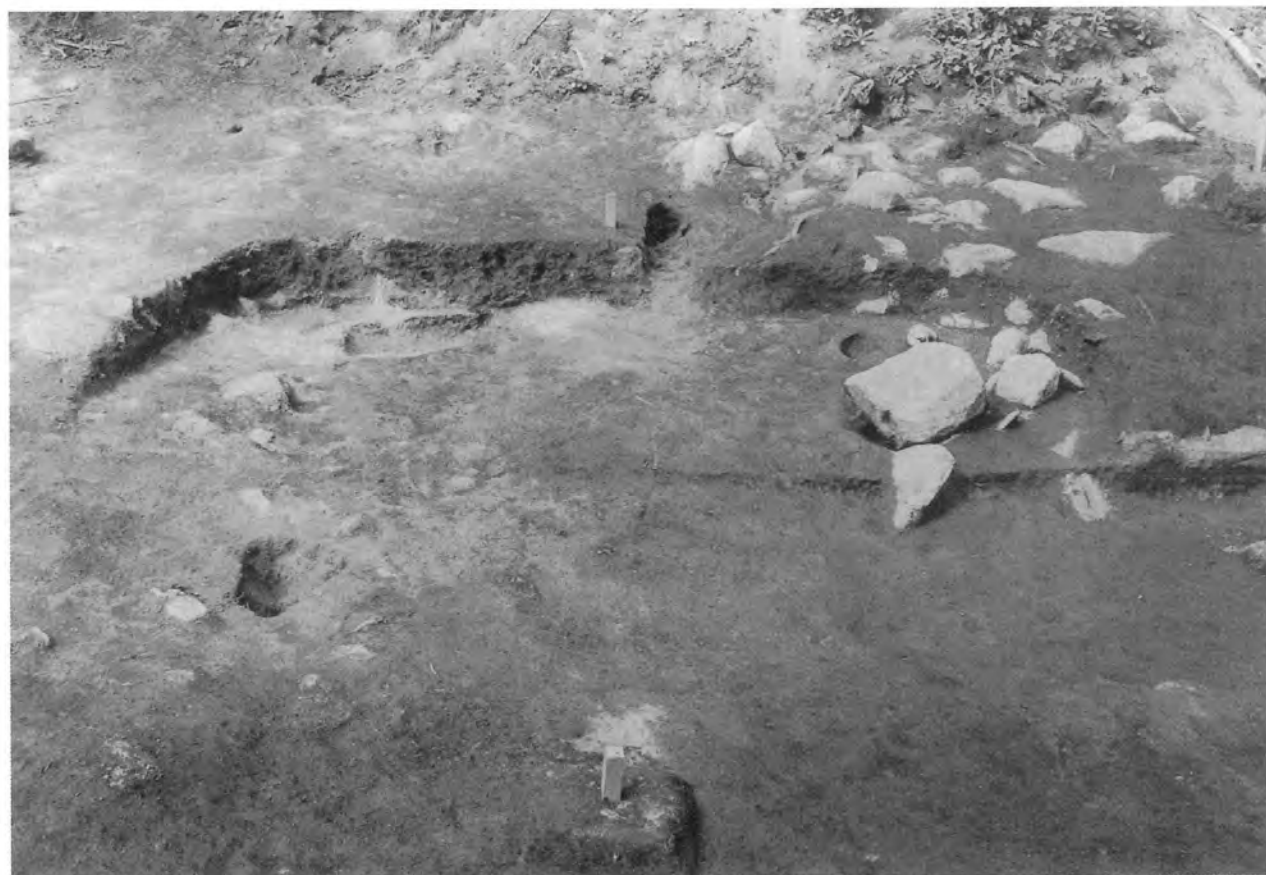


石積（西から）

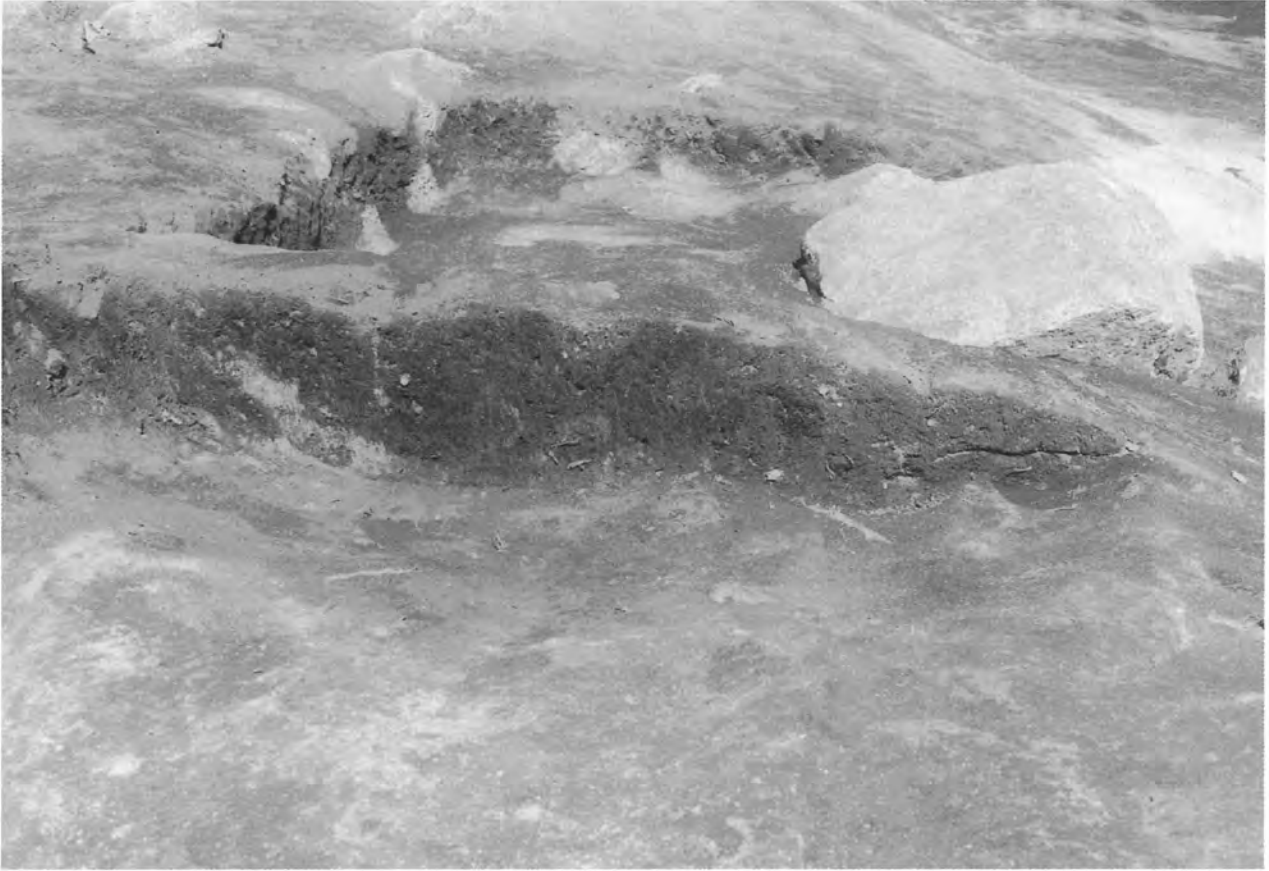




基本土層断面（北西から）



SI1001貼床面（南から）



SI1001南北土層断面（西から）



SI1004・SK1005完堀（南西から）



SI1004カマド検出状況（南から）



SI1004カマド本体部（南から）

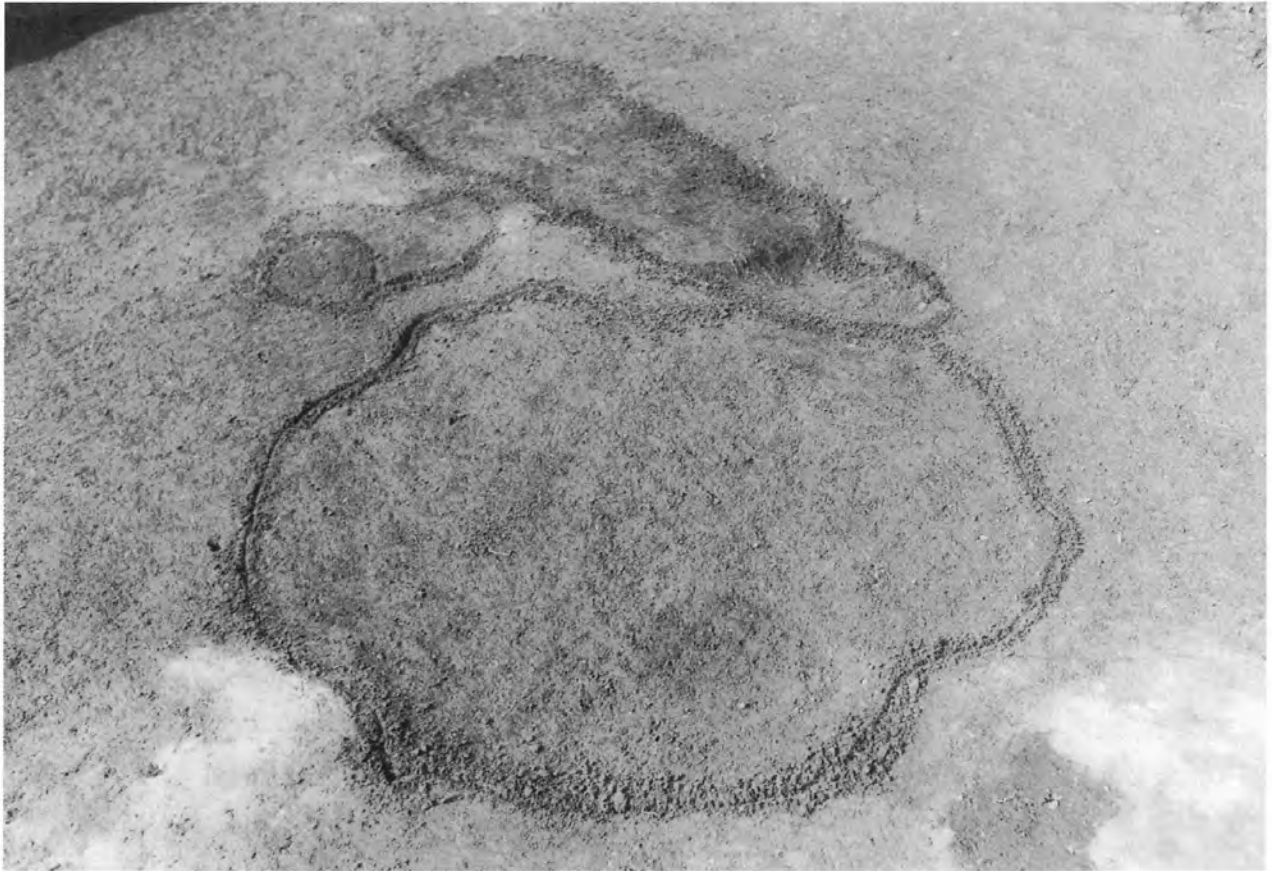




SI1004遺物出土状況（南西から）



SI1010完掘（南から）



SI1010鍛造剥片プラン（東から）



SI1011全景（南から）





SI1011北カマド検出状況（南から）



SI1011北カマド完掘（南から）



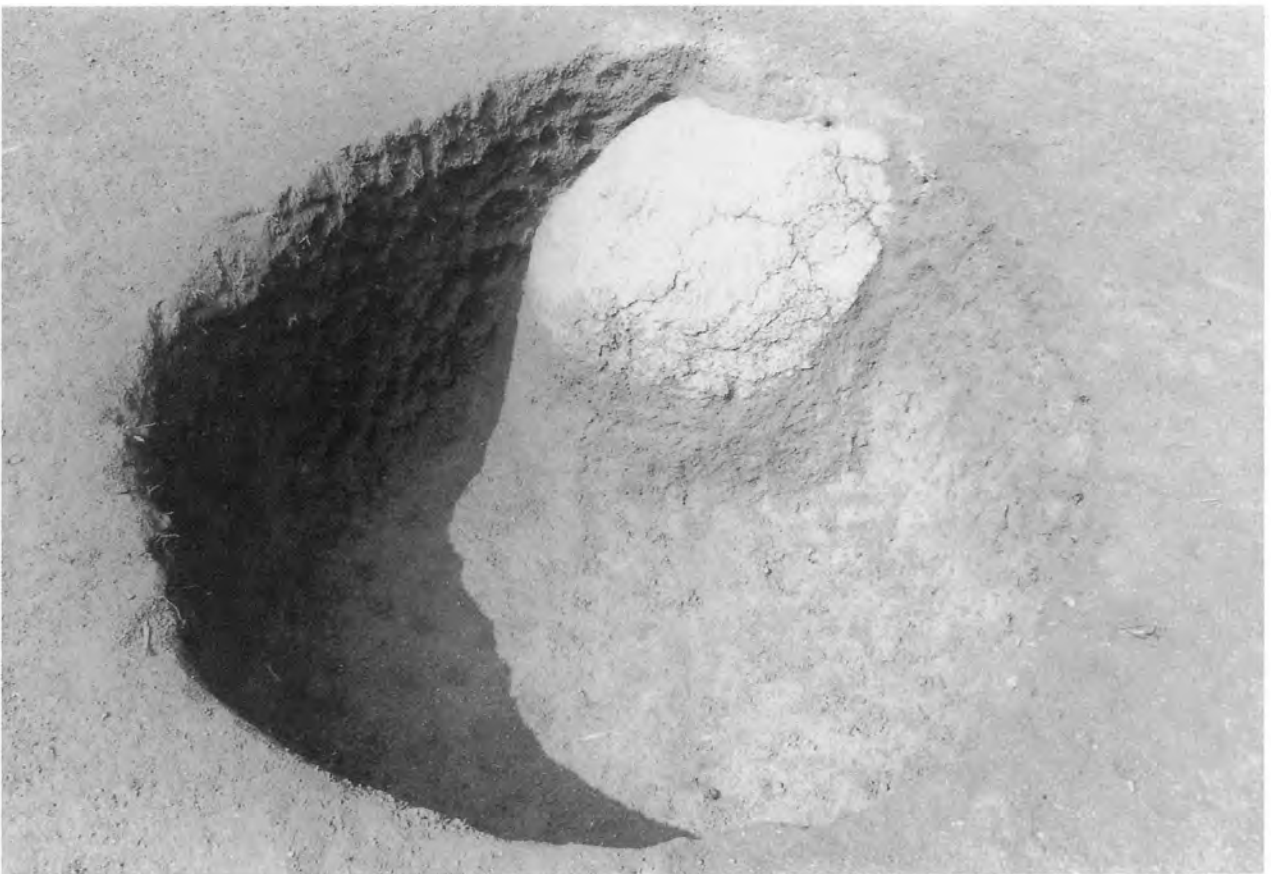
SI1011北カマド煙道上部（南東から）



SK1003完堀（西から）



SK1006完掘（北東から）



SK1008完掘（南から）





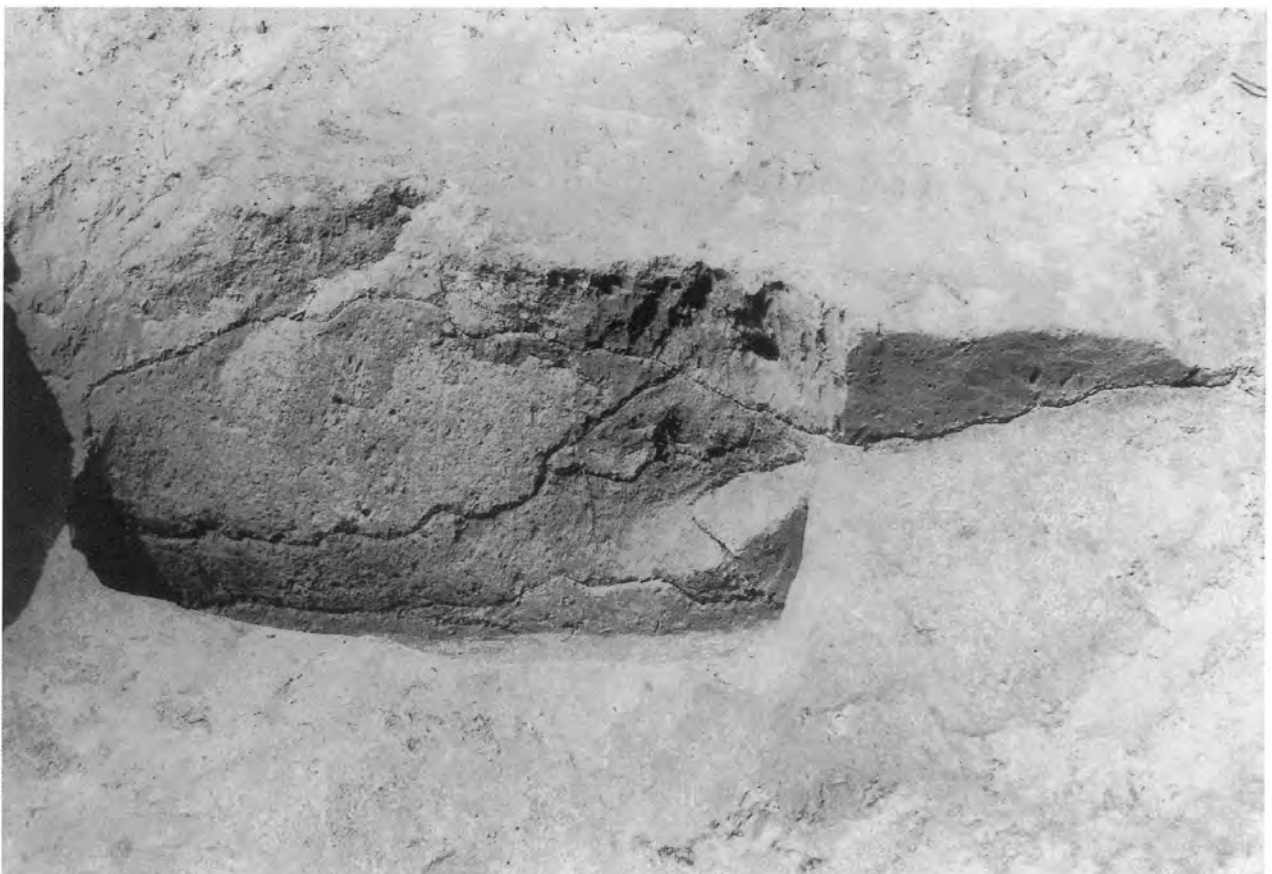
B区作業状況（西から）



B区基本土層断面（南西から）



SK2012完堀（南西から）



SK2012東西土層断面（南から）





SK2013完堀（西から）



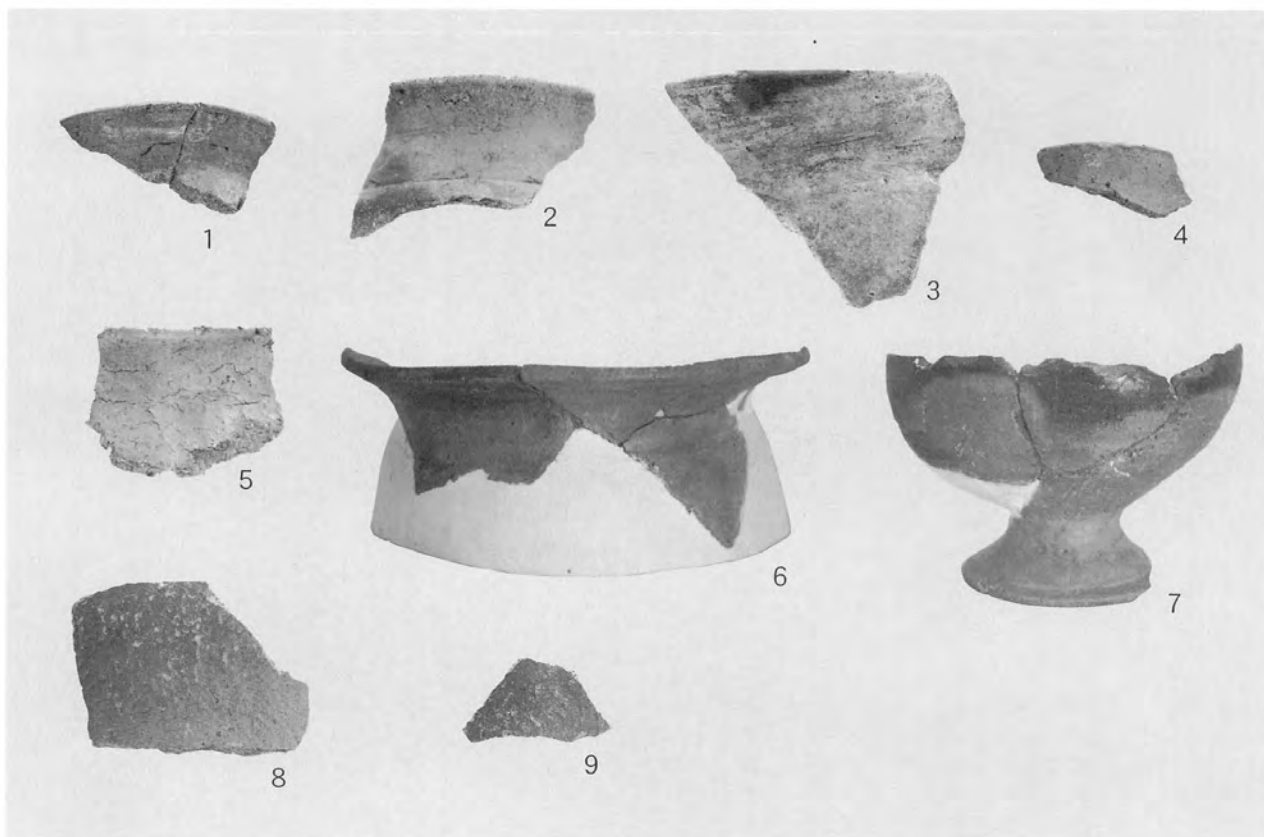
SK2015礫検出状況（東から）



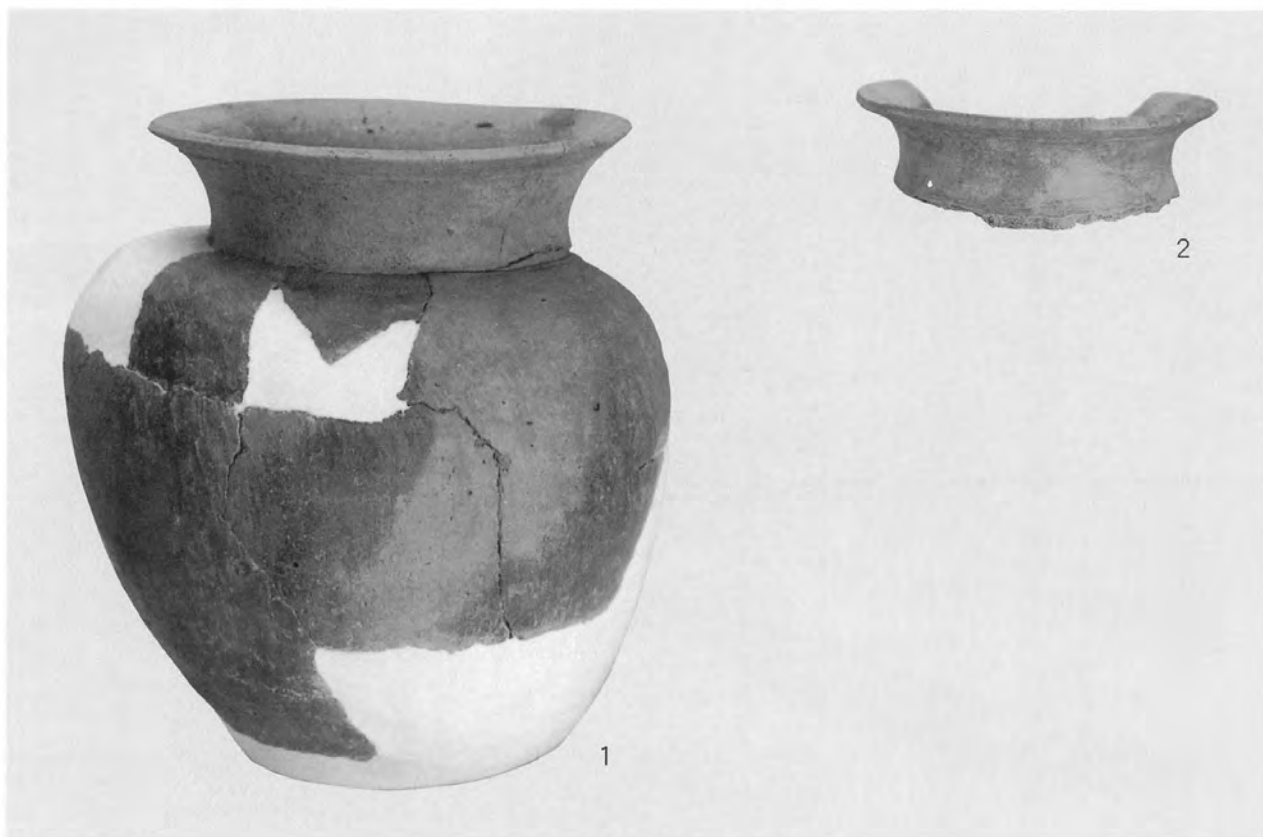
SK2015・2016東西土層断面（南から）



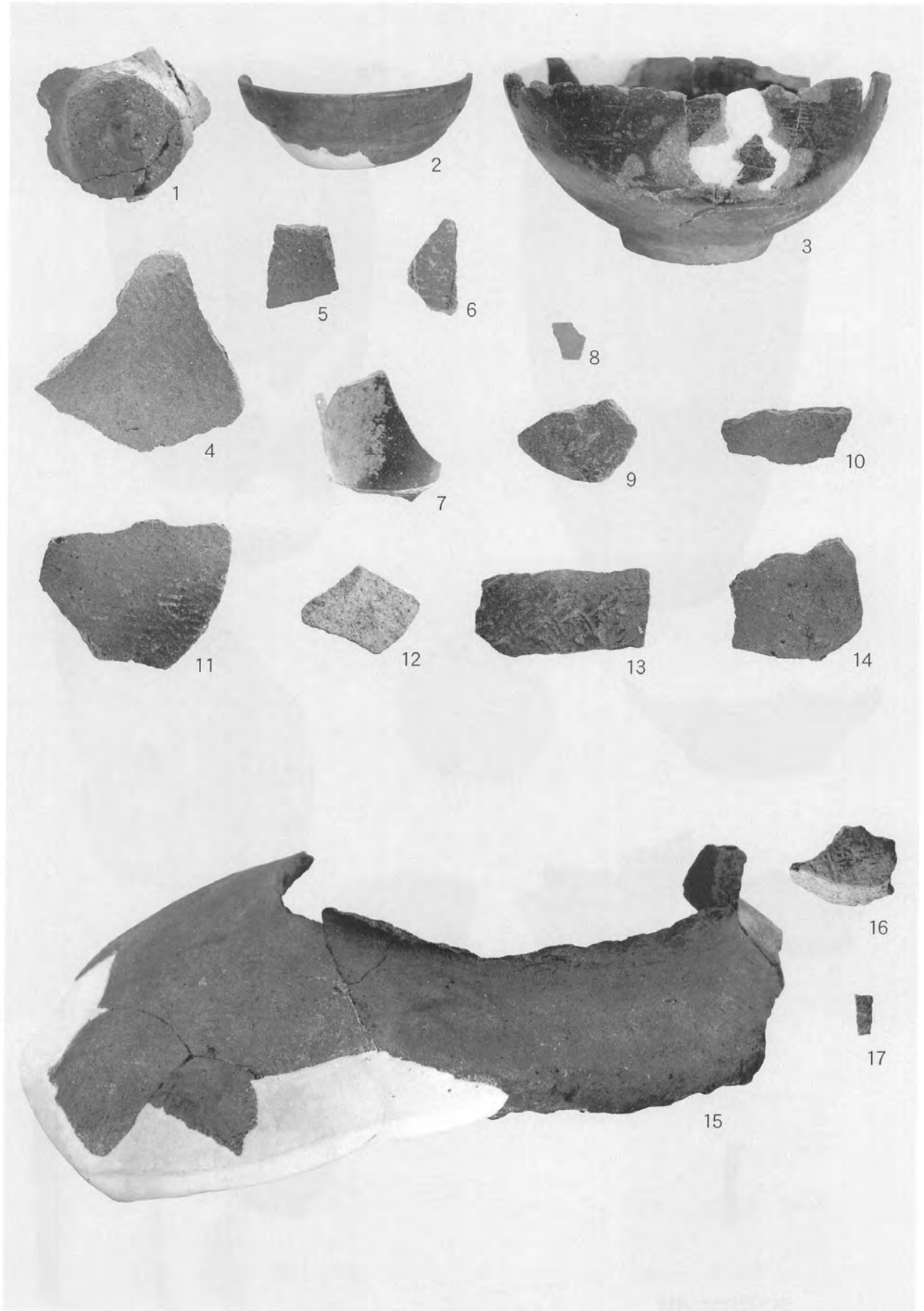
SK2012～2016遠景（南西から）



SI1001出土遺物

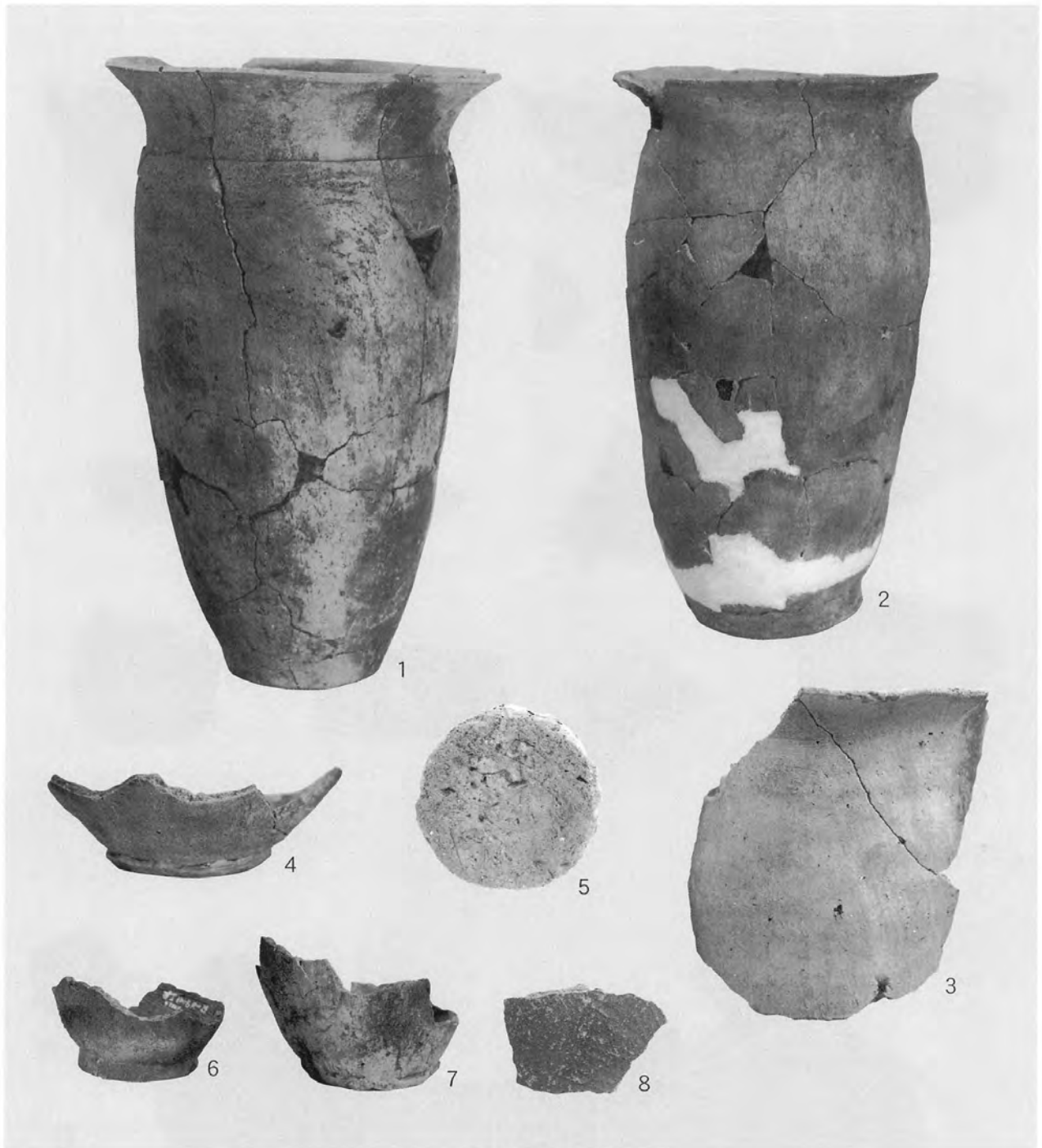


SI1004出土遺物



SI1011出土遺物





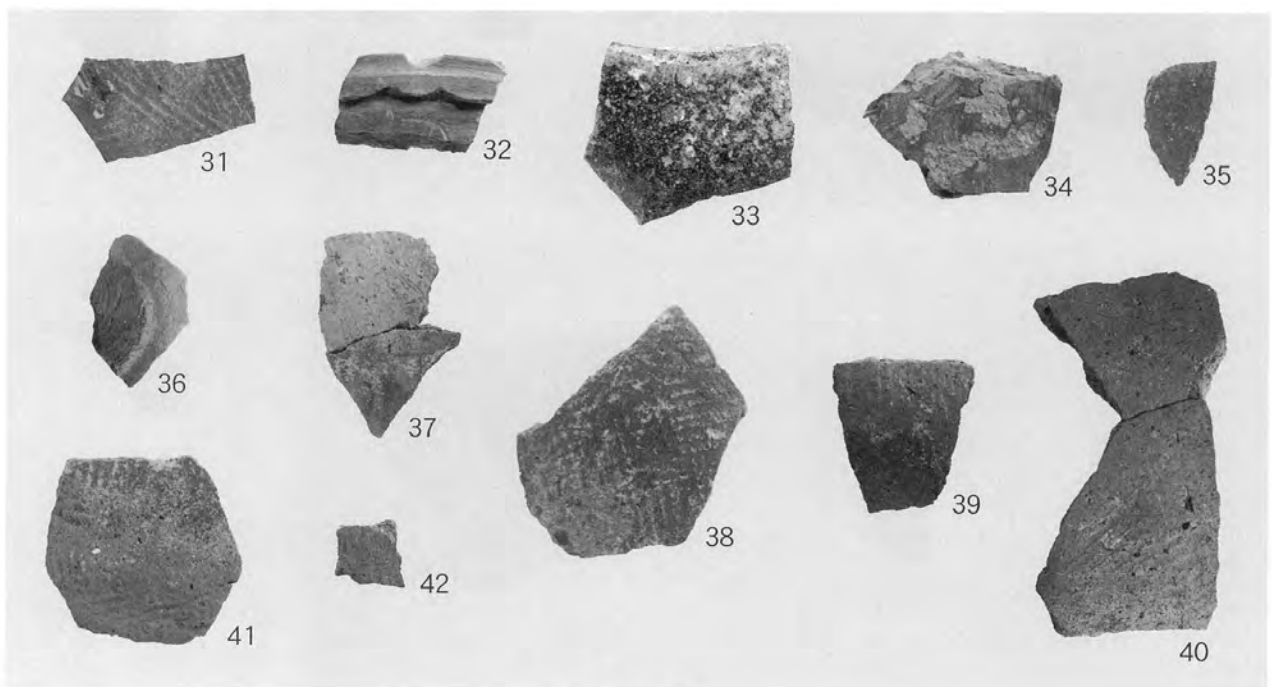
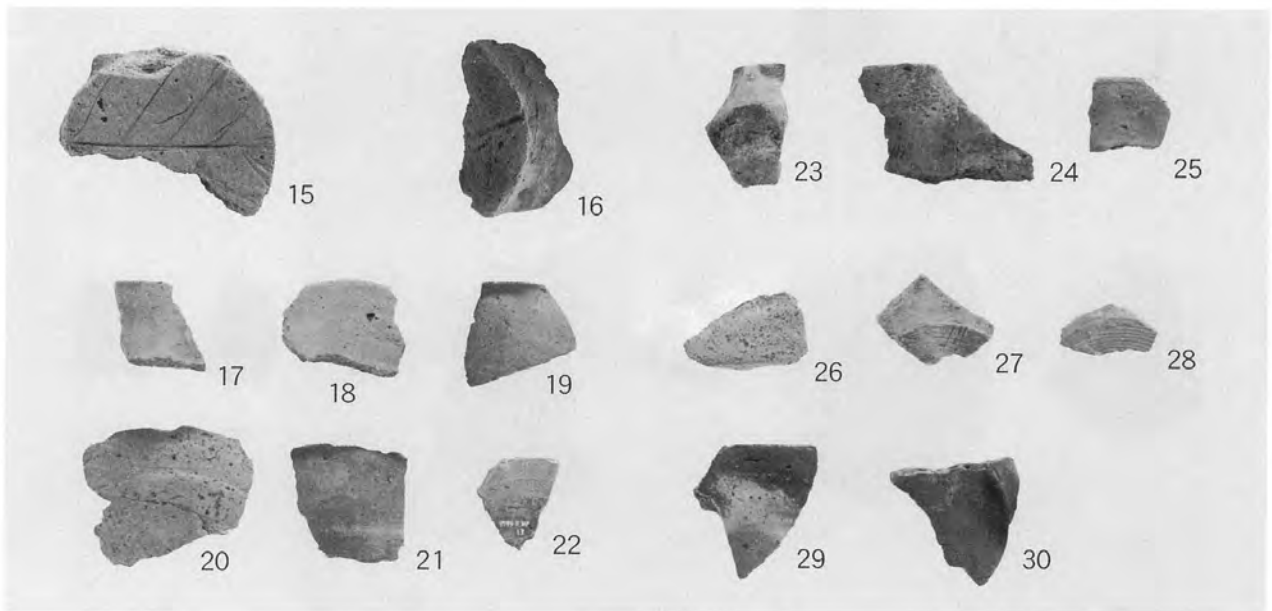
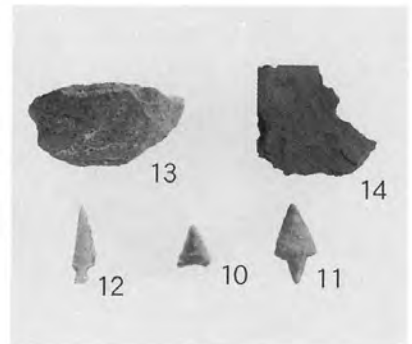
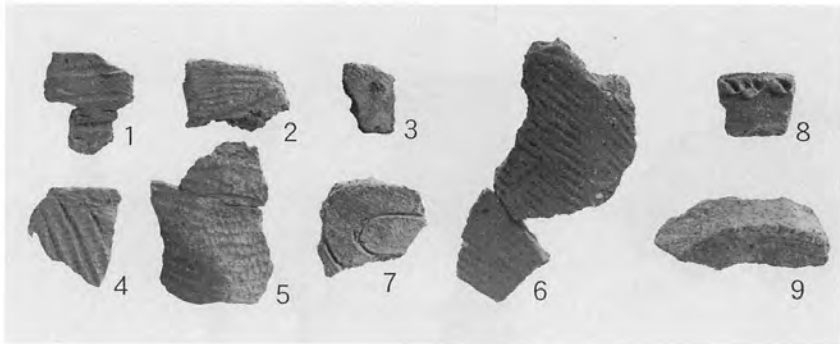
SK1005出土遺物



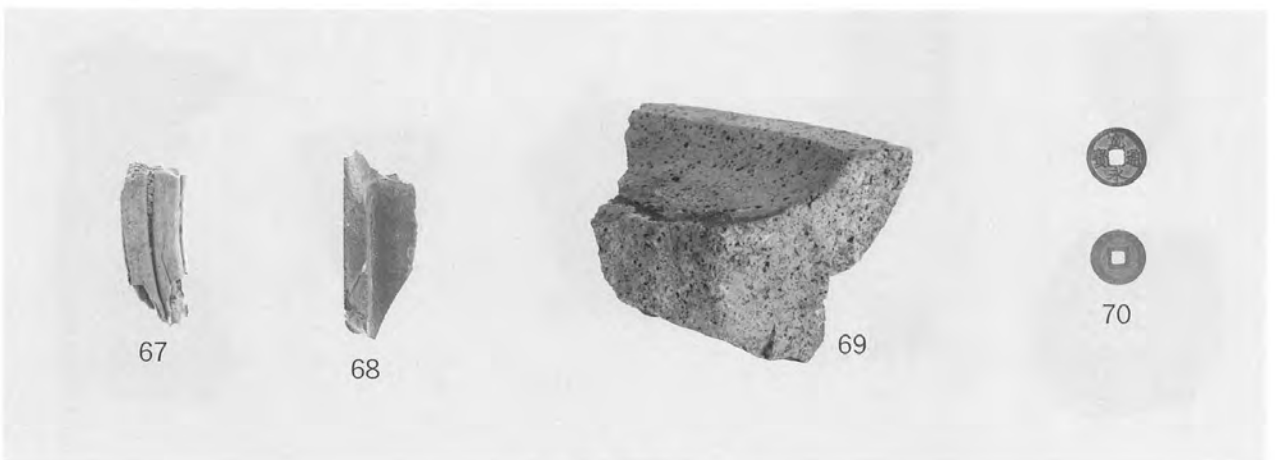
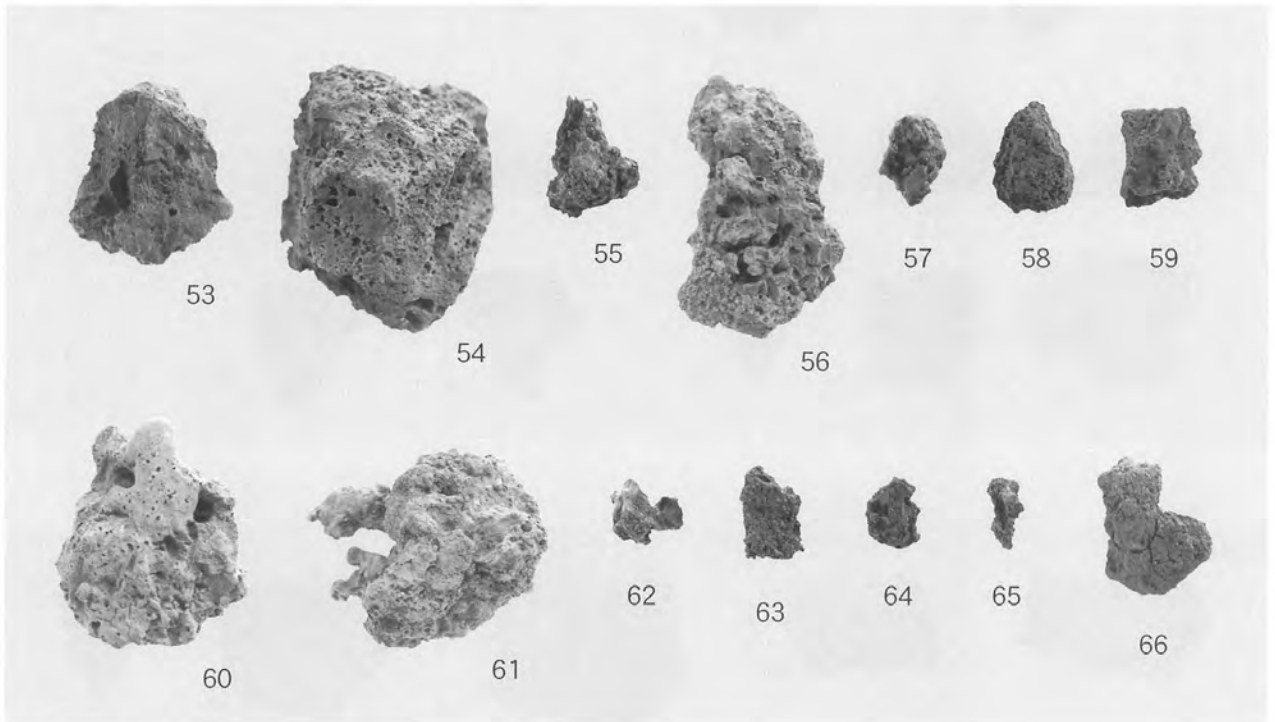
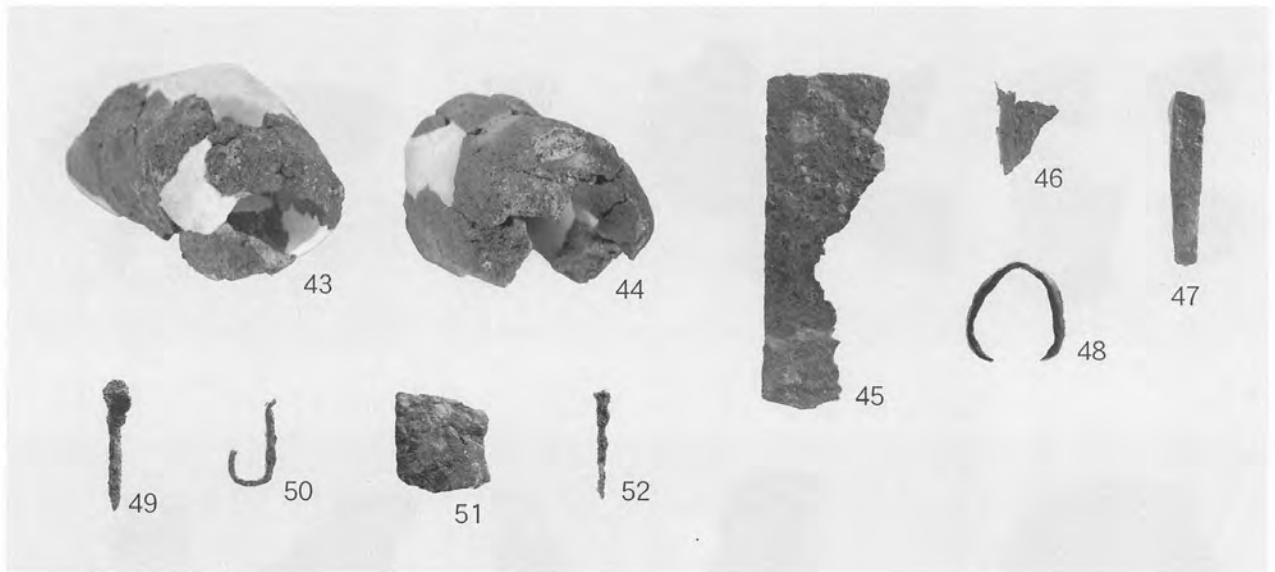
SK1003出土遺物



SK2012出土遺物



遺構外出土遺物



遺構外出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	やまぐちたてあと							
書名	山口館跡							
副書名	平成11、12年度発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	宮古市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	57							
編著者名	安原 誠							
編集機関	岩手県宮古市教育委員会							
所在地	〒027-8501 岩手県宮古市新川町2番1号 TEL. 0193-62-2111 FAX. 0193-63-9119							
発行年月日	2002年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やまぐち たてあと 山口館跡	いわてけんみやこ 岩手県宮古市 やまぐち 山口	03202	LG23-2310	39°38'59"	141°56'29"	19990614 ~1119	900m <sup>2</sup>	北部環状線道路改良工事
やまぐち たてあと 山口館跡	"	"	"	"	"	20000614 ~0908	465m <sup>2</sup>	"
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
山口館跡	集落跡 城館跡	奈良時代	竪穴住居跡4棟 土坑9基 不明遺構2基	土師器、須恵器、フイゴ羽口、鉄滓、 鍛造剥片、動物遺存体、陶磁器、 縄文土器、石器				



---

宮古市埋蔵文化財調査報告書57

## 山口館跡

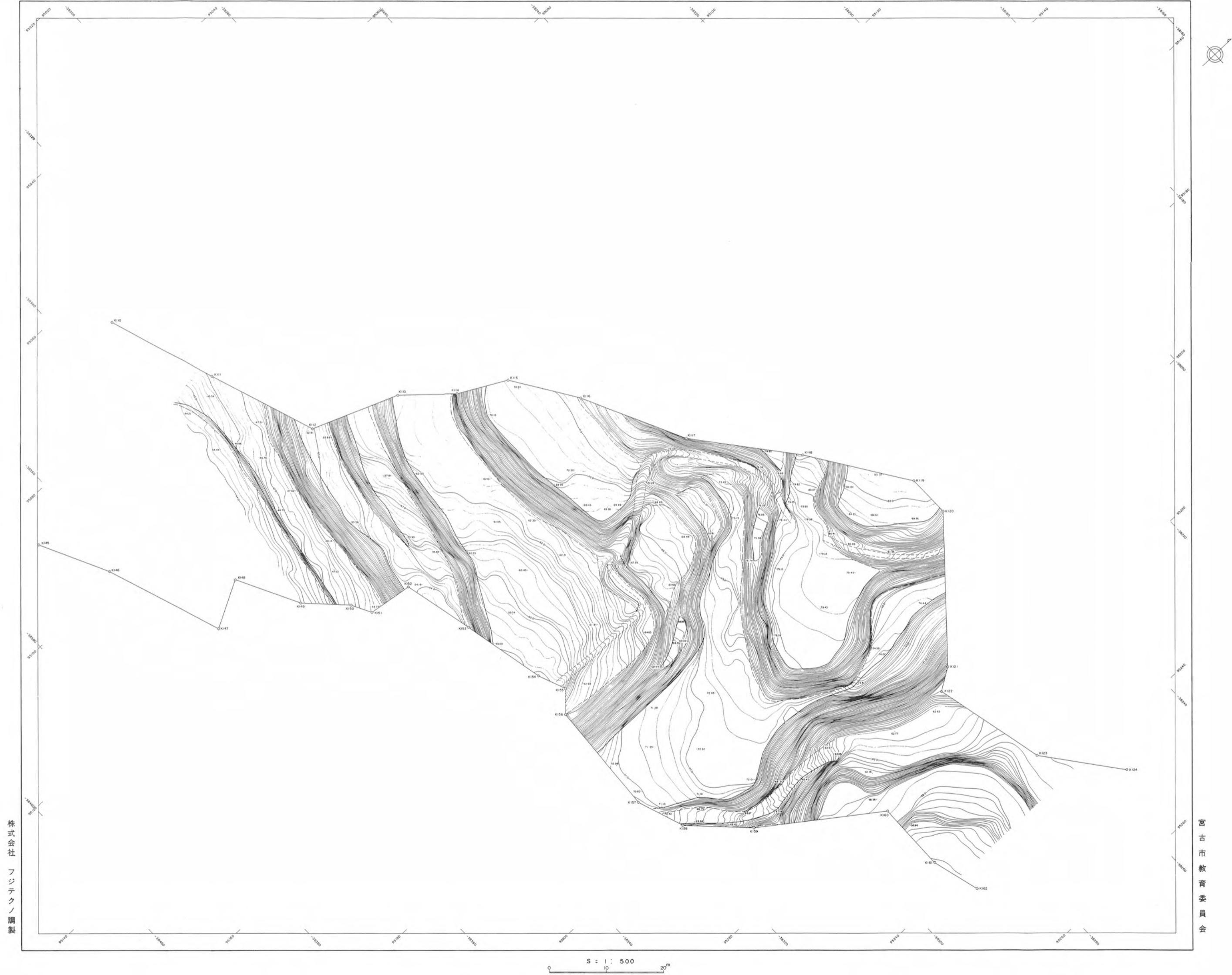
平成11、12年度発掘調査報告書

－北部環状線道路改良工事関係－

印刷・発行 平成14年3月  
発行 岩手県宮古市教育委員会  
〒027-8501 岩手県宮古市新川町2番1号  
TEL0193-62-2111 FAX0193-63-9119  
印刷 株式会社 文化印刷  
岩手県宮古市松山5地割13番地6

---

山口館跡現況図



株式会社  
フジテクノ製

宮古市  
教育委員会







